

大和川今池遺跡

—都市計画道路堺港大堀線整備事業に伴う発掘調査—

平成29年3月

大阪府教育委員会

大和川今池遺跡

—都市計画道路堺港大堀線整備事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

大和川今池遺跡は、旧石器時代から近世の長期間にわたる複合遺跡です。また遺跡範囲も広大で、大阪市・堺市・松原市にまたがります。昭和47年の試掘調査で発見されて以来、現在までで50箇所程度の調査がなされ、多くの成果が得られています。中でも難波宮中軸線から南に延びるいわゆる難波大道の発見は特筆すべき成果です。

今回の調査は、都市計画道路堺港大堀線の道路拡幅工事に先立つものです。調査範囲は狭いものでしたが、新たに平安時代と鎌倉時代の屋敷地が見つかったことは、大きな成果となりました。西除川流域での計画的な土地開発に伴って出現した有力者の屋敷地であったと考えられます。また、平安時代後期の瓦が多数出土し、周辺に今まで知られていない寺院が埋もれている可能性も強くなりました。今回の調査成果は、地域の歴史を明らかにする上で大変重要な資料となるものです。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆様、ならびに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月

大阪府教育庁文化財保護課長

星住 哲二

例 言

1. 本書は、都市計画道路堺港大堀線整備事業に伴い実施した松原市天美我堂五・六丁目に所在する大和川今池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、平成26年度を調査第二グループ主査 山田隆一と副主査 林日佐子、平成27年度を調査事業グループ主査 山田隆一を担当者として実施した。調査期間は平成27年2月1日から同3月31日まで、平成27年4月1日から同5月29日までと平成28年1月5日から同1月29日までである。また整理作業は、平成27・28年度に調査管理グループ主査 三木弘（平成28年度）、同副主査 藤田道子、同専門員 阪田育功（平成28年度）と山田を担当者として実施した。
4. 本調査の調査番号は、平成26年度が「14031」、平成27年度が「15002」と「15028」である。
5. 出土した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。出土した木器の保存処理と分析は、一般社団法人文化財科学研究センターに委託し、その結果を第4章に収録した。
6. 本調査の写真測量は、平成26年度を株式会社エムズ、平成27年度の調査番号15002を写測エンジニアリング株式会社、調査番号15028を株式会社エムズに委託した。撮影フィルムは各社が保管している。
7. 発掘調査および整理作業にあたっては、地元自治会、松原市教育委員会、大阪府都市整備部富田林土木事務所松原建設事業所建設課の協力を得た。
8. 本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
9. 本文の執筆および編集は山田が行った。
10. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
11. 本書は300部作成し、一冊あたりの単価は1,733円である。
12. 遺物図版については、文化財保護課ホームページ埋蔵文化財情報からカラー版がダウンロードできます。

<http://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/index.html>

凡 例

1. 本書に用いた標高は、東京湾標準潮位（T. P. 値）による。座標値は、世界測地系平面直角座標第Ⅵ系によるもので、方位は座標北を示す。
2. 土層の記載に用いた色調は、『新版 標準土色帖（20版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）1997.9によった。

本文目次

序 文
例 言
凡 例

第1章 調査にいたる経緯と経過	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過と方法	2
第2章 位置と歴史的環境	3
第3章 調査結果	5
第1節 層序	5
第2節 A区の調査結果	11
第3節 B～C・G区の調査結果	11
第4節 D～F区の調査結果	36
第4章 出土木製品の保存処理および分析	60
第5章 まとめ	75

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図	1
第2図 調査区箇所図	2
第3図 周辺の遺跡分布図	4
第4図 東区土層断面図	6
第5図 西区土層断面図	7
第6図 東区遺構平面図	9-10
第7図 B区溝2001平面・断面図	12
第8図 B区井戸2130平面・断面図	13
第9図 B区井戸2130井戸枳実測図1	14
第10図 B区井戸2130井戸枳実測図2	16
第11図 B区井戸2130井戸枳実測図3	17
第12図 B区井戸2130井戸枳実測図4	18
第13図 B区井戸2130井戸枳実測図5	19
第14図 B区井戸2130井戸枳実測図6	20

第15図	B区井戸2130出土遺物実測図	22
第16図	B区掘立柱建物1・2平面・断面図	24
第17図	B区掘立柱建物3・4平面・断面図	25
第18図	B区掘立柱建物5平面・断面図	26
第19図	掘立柱建物3・4・5出土遺物実測図	27
第20図	B-C・C区掘立柱建物6平面・断面図	28
第21図	掘立柱建物6出土遺物実測図1	29
第22図	掘立柱建物6出土遺物実測図2	30
第23図	掘立柱建物6出土遺物実測図3	31
第24図	G区掘立柱建物9平面・断面図	32
第25図	掘立柱建物9・10、溝7001出土遺物実測図	32
第26図	G区溝7001平面・断面図	33
第27図	B～G区その他遺構平面・断面図	34
第28図	その他遺構出土遺物実測図	35
第29図	西区遺構平面図	37-38
第30図	F区上面遺構平面・断面図	39
第31図	D-E区濠5001断面図	39
第32図	濠5001出土遺物実測図	40
第33図	D-E区井戸4019平面・断面図	40
第34図	井戸4019出土遺物実測図	41
第35図	E区井戸5005平面・断面図	43
第36図	井戸5005出土遺物実測図1	44
第37図	井戸5005出土遺物実測図2	45
第38図	F区井戸6052平面・断面図	46
第39図	井戸6052出土遺物実測図	46
第40図	E-F・F区掘立柱建物7・8平面・断面図	47
第41図	掘立柱建物7・8出土遺物実測図	48
第42図	D～F区その他遺構平面・断面図	49
第43図	その他遺構出土遺物実測図	50
第44図	E-F区整地土他出土遺物実測図	51
第45図	F区整地土出土遺物実測図1	52
第46図	F区整地土出土遺物実測図2	53
第47図	F区整地土出土遺物実測図3	54
第48図	F区整地土出土遺物実測図4	55
第49図	F区整地土出土遺物実測図5	57
第50図	F区整地土出土遺物実測図6	58

第51図	木製品保存処理中写真	61
第52図	木製品顕微鏡写真1	66
第53図	木製品顕微鏡写真2	67
第54図	木製品顕微鏡写真3	68
第55図	木櫃X線写真1	69
第56図	木櫃X線写真2	70
第57図	木櫃X線写真3	71
第58図	木櫃X線写真4	72
第59図	木櫃X線写真5	73
第60図	木櫃X線写真6	74
第61図	木櫃復元図	77

図 版 目 次

図版1	東区	a. A・B区全景（東から）	b. A区北壁土層断面（南西から）
図版2	東区	a. B区全景（西から）	b. B区北壁土層断面（南西から）
図版3	東区	a. 溝2001全景（南から）	b. 溝2001断面（南から）
		c. 落込み2129全景および断面（東から）	
図版4	東区	a. 井戸2130（東から）	b. 井戸2130埋土上半断面（西から）
		c～e. 井戸2130下半の掘削状況 f～h. 井戸2130下半の構造（北東から）	
図版5	東区	a・b. 掘立柱建物6（西から）	
		c～g. 掘立柱建物6柱穴断面（c.3001、d.3002、e.3003、f.3019、g.3021）	
		h. 掘立柱建物6柱穴3021検出状況（北から）	
図版6	東区	a. 掘立柱建物3柱穴2098遺物出土状況（東から）	
		b～f. 掘立柱建物5柱穴断面（b.2127、c.3022、d.2121、e.3023、f.2118）	
		g. 柱穴2048遺物出土状況（南から） h・i. 溝埋土断面（h.2014、i.3010）	
		j～l. 土坑埋土断面（j.2082、k.2104、l.2111）	
図版7	東区	a. 掘立柱建物9他（東から）	
		b～i. 掘立柱建物9柱穴断面	
		（b.7009、c.7013、d.7003、e.7014、f.7004、g.7015、h.7005、i.7016）	
図版8	東区	a～d. 掘立柱建物9柱穴断面（a.7011、b.7010、c.7007、d.7012）	
		e・f. 掘立柱建物10（f.7021、g.7022） g. 溝7001（南東から）	
		h・i. 土坑埋土断面（h.7023、i.7028）	
図版9	西区	a. F区上面遺構（東から）	b. D区全景（西から）

- c. 濠5001全景（西から） d. 濠5001断面（南から）
- 図版10 西区 a. 井戸4019（東から） b. 井戸4019掘削状況（北から）
c. 井戸4019遺物出土状況（南から）
- 図版11 西区 a. E区全景（東から） b. 井戸5005全景（北から）
c. 土坑4018全景（南から）
- 図版12 西区 a. F区全景（東から） b. E-F区全景（東から）
c. F区西半の整地土層（南東から）
- 図版13 西区 a. 井戸6052全景（東から） b. E-F区東壁断面（西から）
c. F区遺構掘削状況（西から）
d. e. 掘立柱建物8柱穴断面（d.6038、e.6039）
- 図版14 出土遺物1
- i 東区、井戸2130枳板（1） a. 井戸2130枳板1 b. 同上細部
- ii 東区、井戸2130枳板（2） a. 井戸2130枳板2 b. 同上細部
- iii 東区、井戸2130枳板（3） a. 井戸2130枳板3 b. 同上細部
- iv 東区、井戸2130枳板（4） a. 井戸2130枳板4（左下：細部）
b. 井戸2130枳板5（右上：細部）
- 図版15 出土遺物2
- i 東区、井戸2130出土遺物（1） 井戸2130出土遺物（木器）
- ii 東区、井戸2130出土遺物（2） a. 井戸2130出土遺物1 b. 井戸2130出土遺物2
- iii 東区、井戸2130出土遺物（3） a. 井戸2130出土遺物3 b. 井戸2130出土遺物4
- iv 東区、掘立柱建物出土遺物 a. 掘立柱建物5出土遺物 b. 掘立柱建物4・6出土遺物
c. 掘立柱建物3出土遺物
- 図版16 出土遺物3
- i 東区、掘立柱建物他出土遺物 a. 掘立柱建物6・9・10他出土遺物
b. その他遺構出土遺物
- ii 東区、掘立柱建物6出土遺物（1） 掘立柱建物6柱穴3021出土遺物
（上段凹面、中段凸面、下段細部）
- iii 東区、掘立柱建物6出土遺物（2） a. 掘立柱建物6柱穴3021・3019出土遺物
b. 同上（凸面）
- iv 西区、濠5001・井戸4019出土遺物 a. 濠5001出土遺物 b. 井戸4019出土遺物1
- 図版17 出土遺物4
- i 西区、井戸4019出土遺物 a. 井戸4019出土遺物2 b. 井戸4019出土遺物3
- ii 西区、井戸5005出土遺物（1） a. 井戸5005出土遺物1 b. 井戸5005出土遺物2
- iii 西区、井戸5005出土遺物（2） a. 井戸5005出土遺物3 b. 井戸5005出土遺物4
- iv 西区、井戸5005出土遺物（3） a. 井戸5005出土遺物5 b. 井戸5005出土遺物6

図版18 出土遺物 5

- i 西区、井戸5005出土遺物 (4) a. 井戸5005出土遺物 7 b. 井戸5005出土遺物 8
- ii 西区、井戸・掘立柱建物他出土遺物 a. 井戸6052、掘立柱建物 7・8 出土遺物
b. 掘立柱建物 7、その他遺構出土遺物
- iii 西区、各種遺構出土遺物 a. 各種遺構出土遺物 1 b. 各種遺構出土遺物 2
- iv E-F区整地土出土遺物 a. E-F区整地土出土遺物 1 b. E-F区整地土出土遺物 2

図版19 出土遺物 6

- i F区整地土出土遺物 (1) a. F区整地土出土遺物 1 b. F区整地土出土遺物 2
- ii F区整地土出土遺物 (2) a. F区整地土出土遺物 3 b. F区整地土出土遺物 4
- iii F区整地土出土遺物 (3) a. F区整地土出土遺物 5 b. F区整地土下部出土遺物
- iv F区整地土出土遺物 (4) F区整地土出土遺物 (瓦) 1

図版20 出土遺物 7

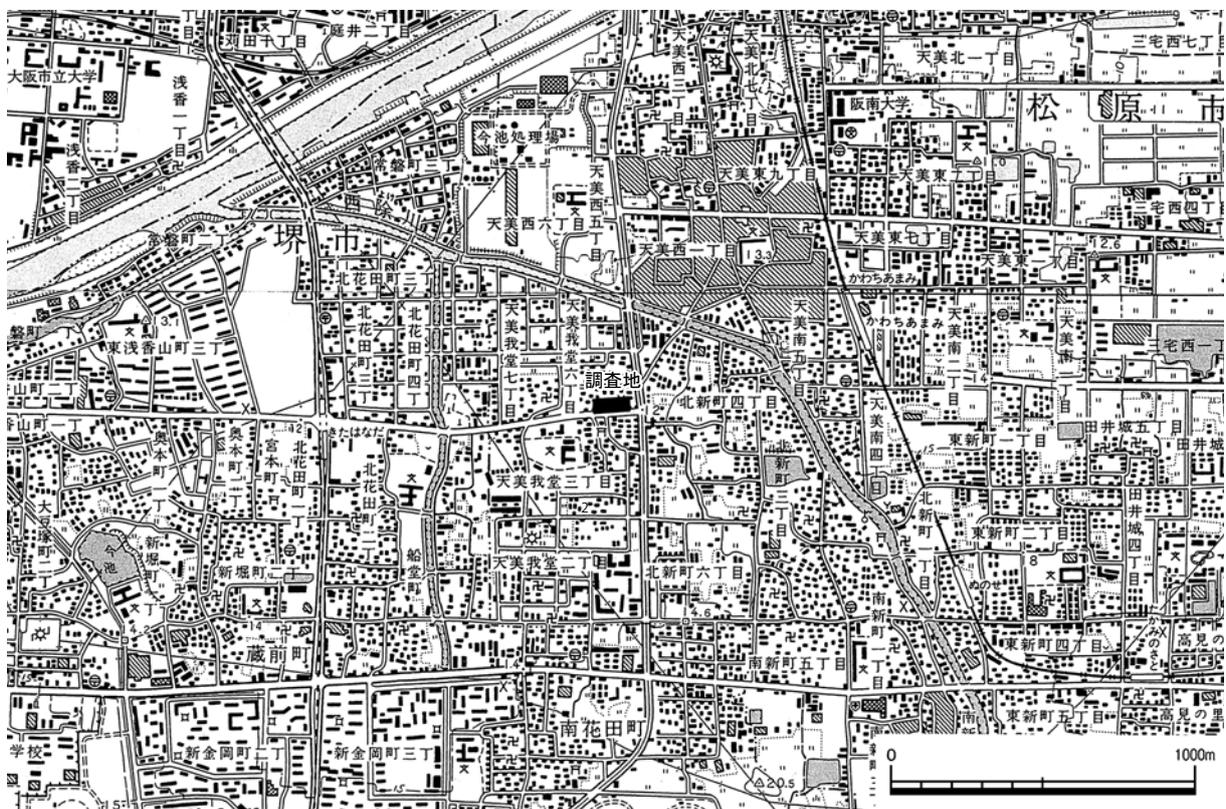
- i F区整地土出土遺物 (5) F区整地土出土遺物 (瓦) 2
- ii F区整地土出土遺物 (6) a. F区整地土出土遺物 (瓦) 3 b. F区整地土出土遺物 (磚)
- iii F区整地土出土遺物 (7) a. F区整地土出土遺物 (瓦) 4 b. 同上 (凸面)
- iv F区整地土出土遺物 (8) a. F区整地土出土遺物 (瓦) 5
b. F区整地土出土遺物 (瓦) 6

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

大和川今池遺跡は、松原市天美西・天美我堂、堺市北区常盤町と大阪市住吉区の広大な面積を占めて所在する旧石器時代から近世におよぶ複合遺跡である。そして今回の事業箇所は、大和川今池遺跡範囲の南東部分で、松原市天美我堂五・六丁目である。発掘調査は、都市計画道路堺港大堀線整備事業における府道拡幅工事に伴うものであり、道路に沿う北側の延長126 mを対象とする。その道路は幅員7 mと狭いにもかかわらず、車両の交通量は激しく、また小・中学校の通学路としても利用されており、決して安全な状況と言えるものではない。以上の状況から、事業主体の大阪府都市整備部富田林土木事務所松原建設事業所建設課は、道路の拡幅を計画したものである。

大和川今池遺跡については、過去に多くの調査事例があるものの、多くが遺跡範囲北半での調査であり、今回の南東部は調査が少なく、近年まで実態の不明な地域である。いくぶん明らかになるのは、東側隣接地において高木遺跡が発掘調査されてからであろう。そこでは、弥生時代後期の竪穴住居、奈良時代後期から平安時代前期の集落、古代以降の水田跡が明らかになっており、今回の事業箇所においても関連遺構の存在が予想されたのである。そこで、大阪府都市整備部富田林土木事務所松原建設事業所建設課と大阪府教育委員会文化財保護課は、その取り扱いについて協議を行い、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部から依頼を受けて、発掘調査を実施することになったものである。

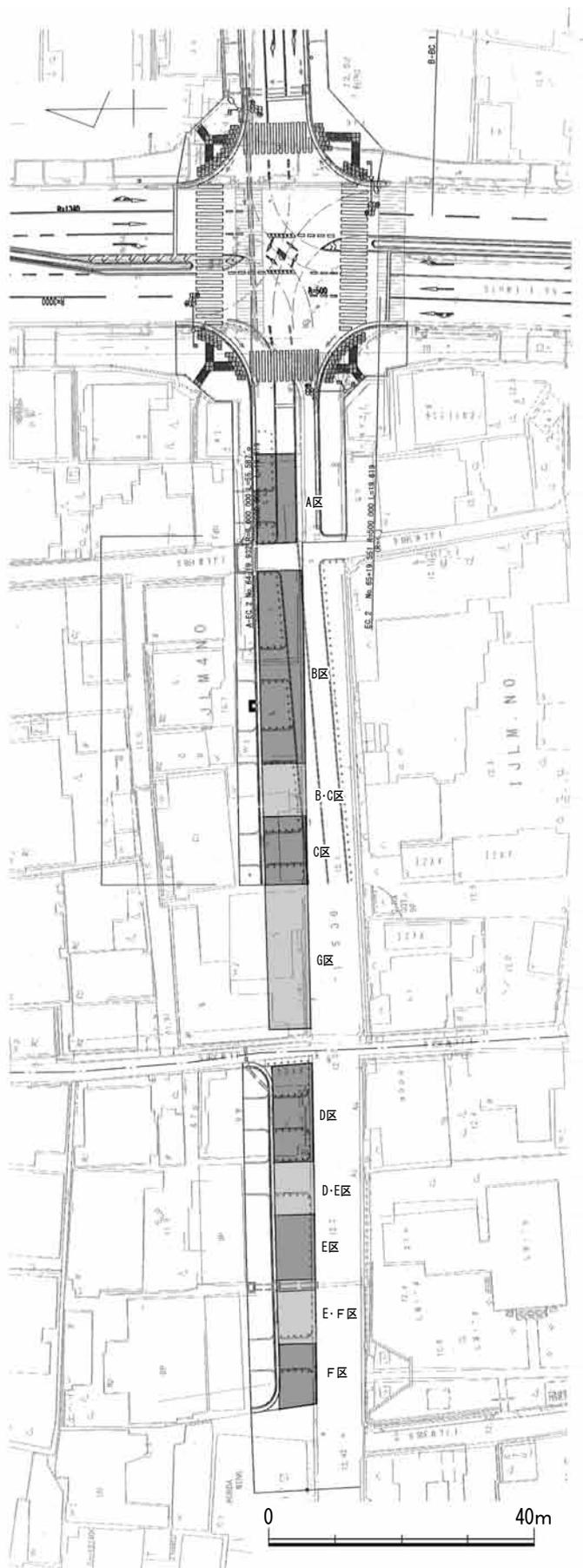


第1図 調査地位置図

第2節 調査の経過と方法

発掘調査の対象地は、府道堺港大堀線に沿う北側の延長126 m、幅6～7 mである。そしてその拡幅部分には最近まで民家が建っていたのだが、調査開始時には、調査対象地の中央部(G区)以外はすでに民家の撤去とセットバックが終了している状況であった。そこで本体の工事計画を考慮して、まずG区の東側(A・B・C区)、次に西側(D・E・F区)を行い、最後に中央部民家の撤去が終了した後にG区の調査を実施することになった。調査はA・B・C区を平成26年度(調査番号14031)、D・E・F区を平成27年度当初(調査番号15002)、G区を平成27年度末(調査番号15028)に実施した。それぞれの調査面積は、290㎡、220㎡、110㎡である。

調査区を分割するのは、住民の出入を確保するためである。東区の場合、B・C区の調査時はB-C区が通路となり、終了後にB・C区を埋め戻して通路とし、B-C区間を調査する、といった順序で進めた。また作業の効率化をはかるため、A・B・C・D・E・F・G調査区で、トラッククレーンによる写真撮影を実施している。なお遺構番号は、煩雑を避けるために調査区ごとに行った。A区(1001～)、B区(2001～)、C区とB-C区間(3001～)、D区(4001～)、E区とD-E区間(5001～)、F区とE-F区間(6001～)、G区(7001～)である。



第2図 調査区箇所図

第2章 位置と歴史的環境

大和川今池遺跡は、松原市天美西・天美我堂、堺市北区常盤町と大阪市住吉区の広大な面積を占めて所在する旧石器時代から近世におよぶ複合遺跡である。多数の調査がなされ、様々な時期、様々な性格の遺構が確認されているが、その多くが南北1.5Kmにもおよぶ遺跡範囲の北半でのものである。それに対して今回の調査地点は遺跡範囲の南端であり、周辺の様子は明らかではない。明治18年の仮製地形図によると、広がる水田域の中に位置し、近世には集村として成立していた我堂の集落がある。今回の調査区はその東端部にトレンチを入れたことになる。

今回の調査では、新たに平安時代と鎌倉時代の集落を確認した。これらの歴史的環境を明らかにする上で、狭山池とそこから流れ出す西除川の存在は重要である。なぜなら本遺跡は、狭山池の灌漑範囲にあり、古代・中世の土地開発のもとに成立したと考えられるからである。そして近年、西除川流域の周辺では同様の古代・中世集落がいくつか知られるようになった。それによって、本地域では奈良時代後半以降、計画的な土地開発の始まったことがあきらかになりつつある。そのような歴史的環境の中で、本遺跡を理解しなければならないのである。古代を中心に、具体的な事例を概観してみよう。

高木遺跡 今回の調査地の東に隣接する。奈良時代後期と平安時代前期の集落、古代以降の水田などが検出されている。奈良時代の集落は条里地割で区画され、掘立柱建物には大規模な建物も含まれており、陶硯や小型銅鏡が出土したことで、地方官衙的な機能のうかがえる集落である。一方、平安時代になると衰退傾向があらわれる。掘立柱建物は小型化し、方位や配置の統一感が失われる。

堀遺跡 西除川右岸の低位段丘上に立地する。奈良時代後半から平安時代前期ころ当地に条里地割が出現すると共に、集落も形成される。集落では掘立柱建物5棟が復元された。その後、平安時代中期には水田は放棄されるが、平安時代中・後期から鎌倉時代前期には大規模な再開発がなされ、水田面積が拡大したことが確認される。また鎌倉時代後期から室町時代、室町時代後期、近世・近代の水田のあり方も確認されている。以上のように本遺跡では古代以降の集落と水田の関係、時代ごとの変遷が明らかにされている。

池内遺跡 西除川の氾濫減に立地する。平安時代の集落が3地点で確認されている。西建物群は9世紀後半～10世紀で、3/4町四方の区画溝を備える屋敷地である。この屋敷地は60棟以上の掘立柱建物からなる大規模なもので、在地有力者の屋敷である。役人が付ける帯金具などの出土から官人がいたと考えられる。東建物群は9世紀後半～11世紀前半であるが、西建物群と様相を異にする。建物には明確な中心建物が見られず、ほとんどが小規模である。古文書の研究から荘園管理施設と考えられている。

河合遺跡 西除川左岸の中位段丘上に立地する。松原市の調査によって、奈良時代の掘立柱建物群の他、大溝・井戸・土坑などが検出され、大規模で整然とした配置・構造から郡庁などの官衙遺跡と推定されている。また段丘を横断して掘削された大溝は「河合大溝」と称される。掘削時期は未解決ながら、中位段丘を開削した灌漑用の人工水路とする考えが有力である。計画的な西除川流域における地域開発を示す遺構である。他に鎌倉時代の柱穴・井戸・土坑も検出されている。

大和川今池遺跡 広い遺跡範囲の北半で、奈良時代後半の集落4つと平安時代の集落1つが確認されて

第2章 位置と歴史的環境

いる。奈良時代は、難波大道に沿う集落1のみが方位と区画を意識したもので、他は水田を営む小規模集落で方位の意識は薄い。平安時代は10世紀初頭～11世紀におよぶ集落とその周囲が生産域となった状況が確認されている。遺構密度は低く12世紀には集落が移動する。なお今回の調査地点は、南西600mの地点にあり、平安時代前期の屋敷地を形成するなど状況は全く異なる。

以上、西除川流域において最近明らかになった遺跡を概観した。本地域では、奈良時代以降いくつもの集落が出現と消滅を繰り返すことがわかる。集落の性格も在地有力者の屋敷、荘園管理施設、地方官衙、小規模な農村集落など様々である。今回の調査地点もそんな遺跡の一つである。遺跡個々の内容を明らかにすることは勿論であるが、同時に西除川流域における地域開発といった側面から遺跡状況全体の中でその位置付けを検討されねばならないであろう。

(参考文献)

大阪府教育委員会『高木遺跡』2011年

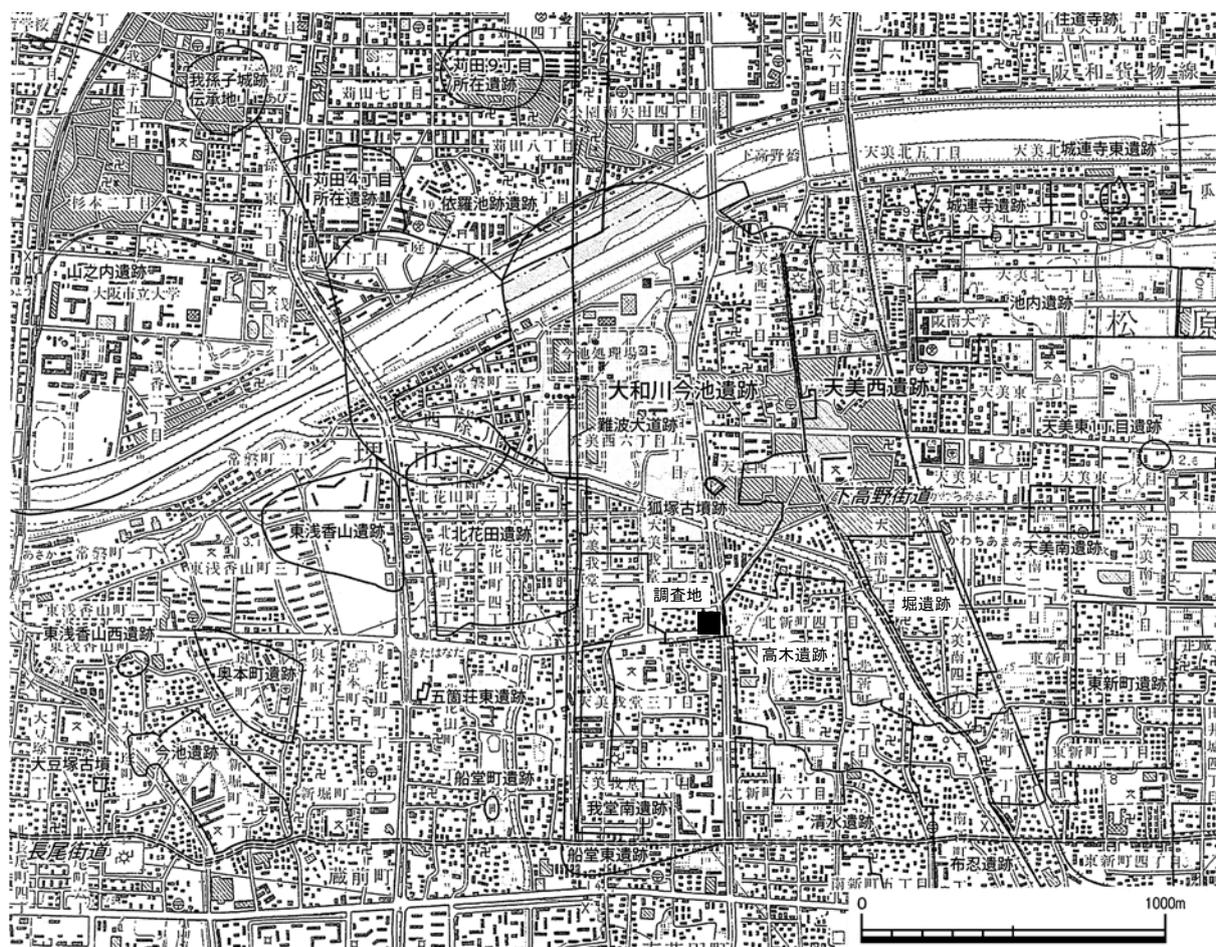
大阪府教育委員会『堀遺跡』2010年

財団法人 大阪府文化財センター『池内遺跡』2010年他

大阪府教育委員会『河合遺跡』1987年

大阪府教育委員会『大和川今池遺跡発掘調査概要』1983年他

大阪府立 狭山池博物館『古代西除川沿いの集落景観』（平成22年度秋季企画展）2010年



第3図 周辺の遺跡分布図

第3章 調査結果

第1章第2節に記載したように、発掘調査箇所は、府道堺港大堀線に沿う北側の延長126m、拡幅する車道部分の幅6～7mである。調査を実施した順番は、平成26年度2・3月にA・B・C区とB-C区間、平成27年度4・5月にD・E・F区とD-E区間・E-F区間、同1月にG区である。

調査箇所は、最近まで民家が建っていたこともあり、多数の攪乱や井戸等が存在した。調査は、現代の盛土・耕作土までを機械で掘削した後、それ以下を人力で掘削した。その結果、A区では平安時代の田畑、B区～G区では平安時代の屋敷、遺構密度の低いD区を挟んで、D-E間～F区では鎌倉時代の屋敷などが確認出来ている。よって本報告では、第1節層序の後、遺構の時期的なまとめりと内容を重視して、東から西に向かって、第2節A区、第3節B～C・G区、第4節D～F区として報告する。

第1節 層序

調査箇所は、我堂村の東縁辺部から集落内部にかけてであり、そのことは明治20年発行の仮製地形図によっても確認できる。それに合致して、A～G区では現代耕作土が明確に確認できるのに対して、D～F区では現代耕作土に相当すると考えられる土層が認識できるにすぎない。なお今回の調査地は土層の攪乱が激しいが、それは昭和初期以来、今回が2回目のセットバックであることが原因の一つとなっている。層序は、ローマ数字で4大別し、アラビア数字で細別して報告する。

I層：現代の盛土、廃棄土坑等 現代耕作土より上位の民家築造時の盛土等である。また穴を掘っての瓦礫等の廃棄坑もあり、現代の井戸等も含めている。調査の過程で分層しているが、本報告ではラインのみで示した。

II層：現代耕作土、および床土（II-1～3層） 耕作土は褐灰色土（II-1・2層）、床土は明黄褐色粘土（II-3層）である。

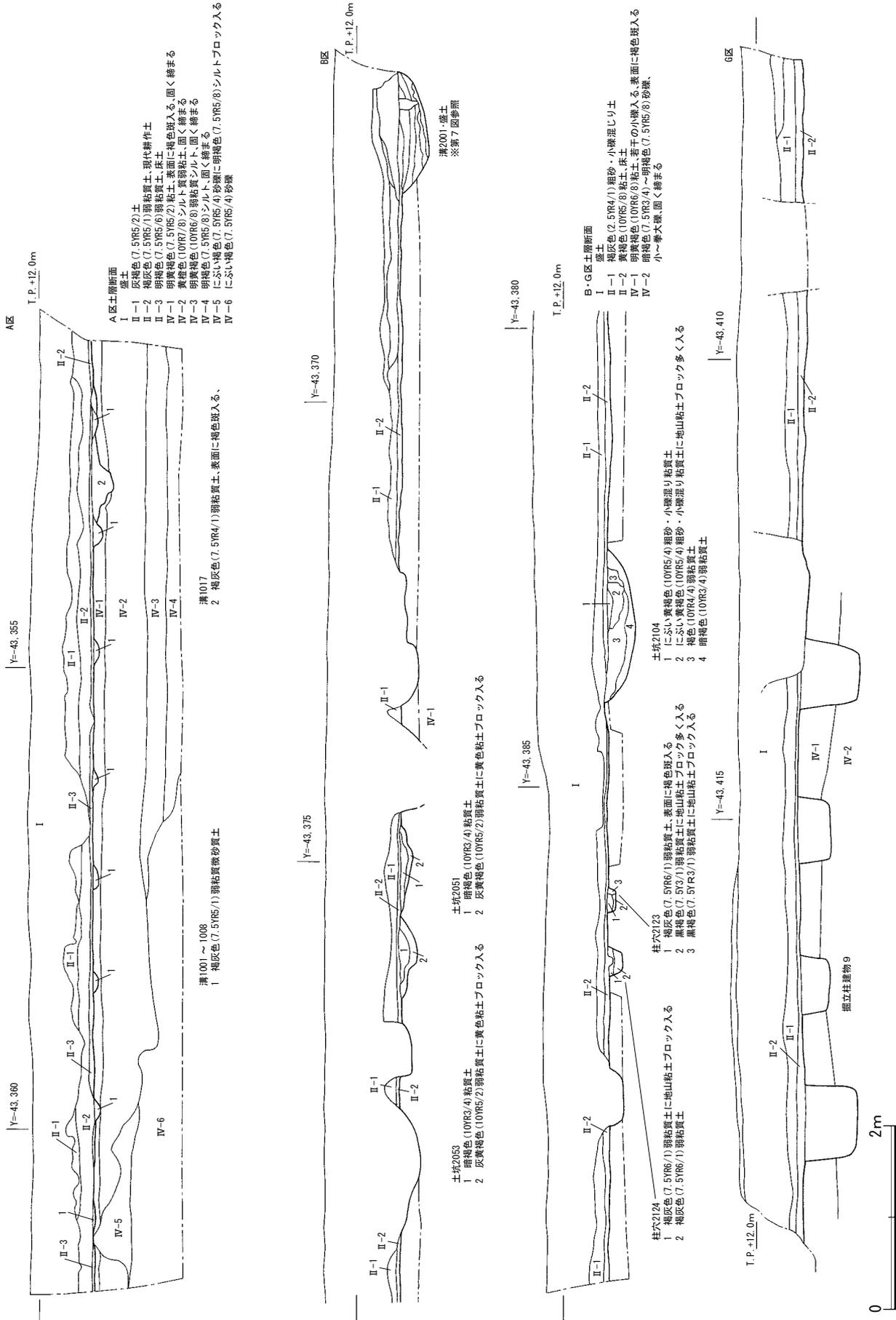
A区のみ耕作土が厚く二層に分層したが、水平方向の鉄分の沈着が確認でき、さらなる分層は可能である。層厚30cm程度。床土も全域で残る。床土の標高は、T.P.+11.6mである。

B～G区の耕作土は薄い但し全域で確認できる。層厚10～15cm程度。床土も全域で残る。床土の標高はA区よりやや低く、T.P.+11.55mで推移する。

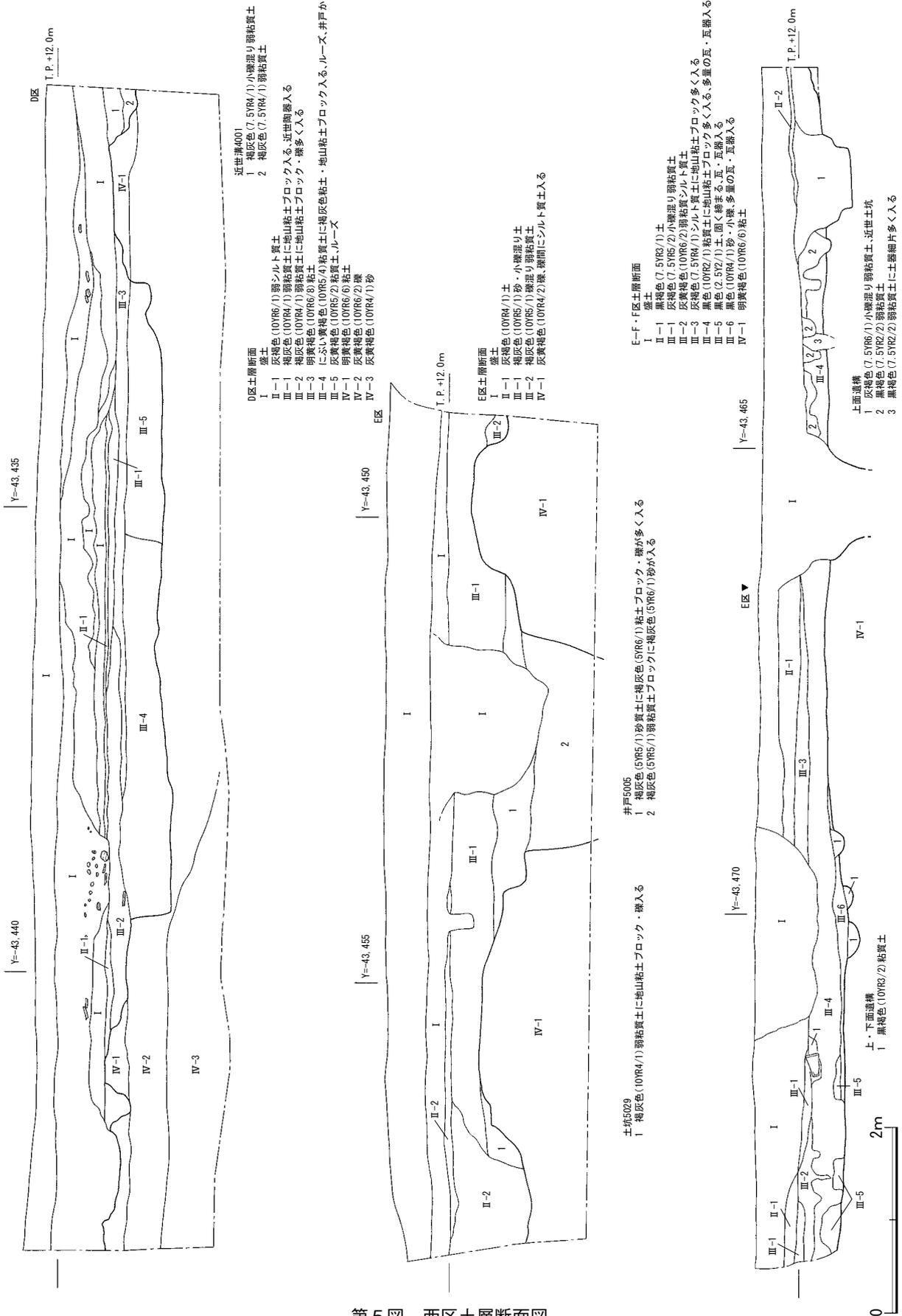
D区では耕作土に相当すると考えられる層（II-1層）が、B～G区よりやや低くT.P.+11.50m程度で確認できる。層厚2～5cm。なおD区以西では明確な床土は見られない。E～F区では耕作土および相当層は急激に高くなりT.P.+12.0m程度で確認できる。

III層：整地土ほか（III-1～6層） A～G区では本層は存在せず、床土の直下がIV層となる。

D区北壁の中央部では、急激に調査区外に向かって落ちる状況が確認できた。III-1～3層からは近世以降の磁器や瓦が出土しており、近世段階の盛土と考えられる。III-5層は整地土と考えられる。時期は不明であるが、F区の中世段階の整地とは全く異なるもので、より新しい時期であろう。III-4層は調査区外にのびる大きな土坑であり、井戸と考えられる。北壁沿いに接待した幅30cm程度の側溝内におさまる輪郭を確認した。



第4図 東区土層断面図



第5図 西区土層断面図

第3章 調査結果

E区では褐灰色砂・小礫混じり土を確認した。整地土と考えられるが、F区の中世段階の整地とは異なるもので、より新しい時期のものと考えておきたい。

F区では北西に向かって急激に地山面が低くなっており、それを埋立てた整地土がE-F・F区において確認できた。Ⅲ-1～5層は粘質土が主体的であるが、Ⅲ-6層は褐灰色砂・小礫の自然堆積層である。なお、Ⅲ-4～6層には多量の瓦器・瓦や土師器を含んでいる。

Ⅳ層：基盤層（Ⅳ-1～8層） 最上位は明黄褐色弱粘土（Ⅳ-1層）であり遺構検出面である。その下は、A区西半以西で砂・礫層となるが、A区東半ではその間にシルト層を挟む。砂・礫層は部分的な下層調査で確認した。表面に凹凸があり、E区で盛り上がり、再び西方に向かって下がる事を確認している。

A区では、Ⅳ-1層の下は、東半部でシルト質粘土（2層）、粘質シルト（3層）、シルト（4層）と続く。これらの土層はA区東半部においてのみ確認できるもので、いずれも硬く締まる。層厚85cm以上。A区西半部では、これらシルト系土層にもぐり込む状況で褐色を呈する砂・礫層（6層）を確認できる。6層はB区以西で、1層の直下に確認できる砂・礫層であり、本層中に湧水層がある。A区での層厚55cm以上。なお5層は6層中に4層がブロック状に入る崩壊土である。

B～G区では、Ⅳ-1層上面がT.P.+11.5mで確認できる。一方、Ⅳ-2層上面はB区井戸2130の周囲でT.P.+11.0～11.1m、G区掘立柱建物9の箇所でT.P.+11.1～11.3mで確認できる。西方に行くにしたがって、徐々に高まっていく事がわかる。Ⅳ-1層の層厚40～55cm程度、A区6層に対応する砂・礫層は層厚110cm以上である。この砂・礫層はその粒子の大きさ、構造、色調などによって分層できるが、おおむね褐色～黄褐色を呈する。

D区でもⅣ-1層上面がT.P.+11.5m、Ⅳ-2層上面はT.P.+11.2～11.3mで確認できる。B～G区の状況と同様である。

E区ではⅣ層自体が急激に高くなり、削平も著しい。Ⅳ-1層は確認できず、砂・礫層の上面が遺構検出面であり、T.P.+11.8mである。しかし砂・礫層の上面は西方に行くにしたがい低くなり、F区西端の井戸6052の断面に示したようにT.P.+11.4mで確認している。

現地の地形は中位段丘である。東に隣接する高木遺跡の調査では、解析谷と旧流路・氾濫原が確認されており、A区は中位段丘の東縁辺に相当する。調査において、地山面の標高は西方に向かって高まる事が確認できた。A区がT.P.+11.4m、B～G区がT.P.+11.5mで推移する。D区は攪乱により不明確であるが、E区がT.P.+11.7～11.75m、E-F区がT.P.+11.8mと最も高くなり、F区に向かい徐々に低くなる。なおY=-43,470前後でT.P.+11.5mと最も低くなり、西方に向かい徐々に高まるようである。つまり今回確認した古代・中世の集落は、氾濫原に接するやや不安定な場所（A区）を生産域として利用し、より安定した段丘面に居住域を設定して形成された事が確認できる。古代にはより平坦な場所（B～G区）を屋敷地とし、中世には凹凸の有る場所（E・F区）を整地して居住域とした事が確認できる。

第2節 A区の調査結果

我堂村東端部を南北に走る道路より東の調査区である。調査区の規模は、 $Y = -43,351 \sim -43,362$ の間、東西長10.5m×南北幅6.5mである。

(1) 遺構と遺物

層序は単純で、盛土を除去すると、現代耕作土・床土であり、その下が地山である。地山表面が、遺構検出面である。南北方向の溝群と小穴3などを確認したが、後者から掘立柱建物が復元できる状況ではない。なおA区は氾濫原から本遺跡の立地する中位段丘の変換点に相当するので、第1節で報告したように下層確認を行った。

溝1001～1008 (第6図) A区の全域で確認した南北溝である。いわゆる鋤溝のように、耕作の繰り返しを示す溝の重複する状況はない。地山直上に明確に掘り込まれ、同じ方向性を持った一連の溝である。遺構の性格は不明であるが、本報告では畑の畝溝と推定しておきたい。埋土は褐灰色(7.5YR5/1)弱粘質砂質土、規模は幅25～30cm、深さ5cm程度、方位は $N-7^{\circ}-W$ である。幅が狭い畝と広い畝の二種類があり、溝間の中心同士の距離は前者が1.0～1.1m、後者が1.3～1.4mである。前者が1001-1002間、1004-1005間、1005-1006間、1007-1008間、後者が1002-1003間、1003-1004間、1006-1007間である。

出土遺物は、数点の須恵器・土師器細片の他、溝1006から黒色土器A類の細片1点が出土しており、瓦器や中世以降と認定出来る遺物は含まれていない。これらの状況から、遺構の時期の位置付けは難しいが、B～G区の平安時代屋敷地に対応する生産域である可能性を想定しておきたい。

第3節 B～C・G区の調査結果

我堂村内の東部を南北に走る道路2条の間の調査区である。調査区の規模は、 $Y = -43,366 \sim -43,426$ の間、東西長60m×南北幅5.5～6.0mである。

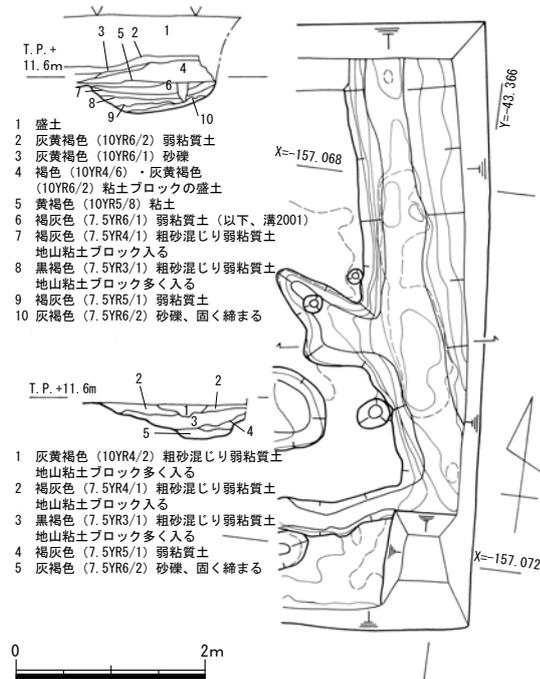
(1) 遺構と遺物

層序は盛土を除去すると、A区と同じく現代耕作土・床土、地山である。地山表面が、遺構検出面である。調査区の全域が、平安時代の屋敷地と考えられ、濃密な遺構が確認できる。ただし詳細に見れば、 $Y = -43,391$ 程度を境に屋敷地内の遺構密度は大きく異なる。すなわち屋敷地内東部では、小型の柱穴が多くしかも重複して密集する。それに対して屋敷地内西部では、柱穴は大型方形で、復元できる掘立柱建物も大型で重複しないことである。なおB～C・G区において、中世の遺物はほとんど出土しておらず、また遺構はC区の東西方向の溝6条、G区の土坑1基、南北溝1条にすぎない。

溝2001 (第7図) B区東端で確認した南北方向の溝である。A区との間の南北道路に併行する溝であり、両者は同じ方向性を示す。なお、溝の南1m程は攪乱により破損している。方位は $N-14^{\circ}-W$ である。なお調査においては、溝の東側ラインは未確認であるが、溝底部は東に向かって上がっており、幅1.3m程度の溝であろう。なお溝の中ほどで、北西方向への突出部があるが、性格は不明である。なお埋土から土師器片が出土しているが時期は不明である。

ところで、溝2001の埋没後に全く同じ位置に粘土ブロックの盛土が確認できる。この盛土は、我堂村

第3章 調査結果



第7図 B区溝2001平面・断面図

井戸枠の残存状況は良好ではない。地下水が上下するために、T.P.+10.75m以上は腐食・消失し、T.P.+10.4m程度以上の井戸枠材は所謂「ヤセ」が著しいが、以下の3種類の丸太材（第10図）と板材で構成される。

丸太材A（第9図4～6）：四隅に立てる丸太材で、先端は切断して平坦面をなす。四隅すべての下部のみが残存しており、直径6.0～6.7cmの広葉樹である。4・5において、直行するほぞ穴（長5.0×幅3.0cm程度）二段が確認できる。一段目を下から10.5～11.5cm、二段目を24.5～27.0cmの位置に穿つ。なお5の二段目ほぞ穴には、丸太材B先端が挿入された状況で残存していた。

丸太材B（第9図3）：四隅に立てた丸太材Aを連結し、井戸枠を固定する丸太材である。直径6.0cm程度の広葉樹丸太材の先端を尖らせたものである。完存するものはなく、3の右は欠損する。先端は4.5×2.0cm程度の長方形に加工する。

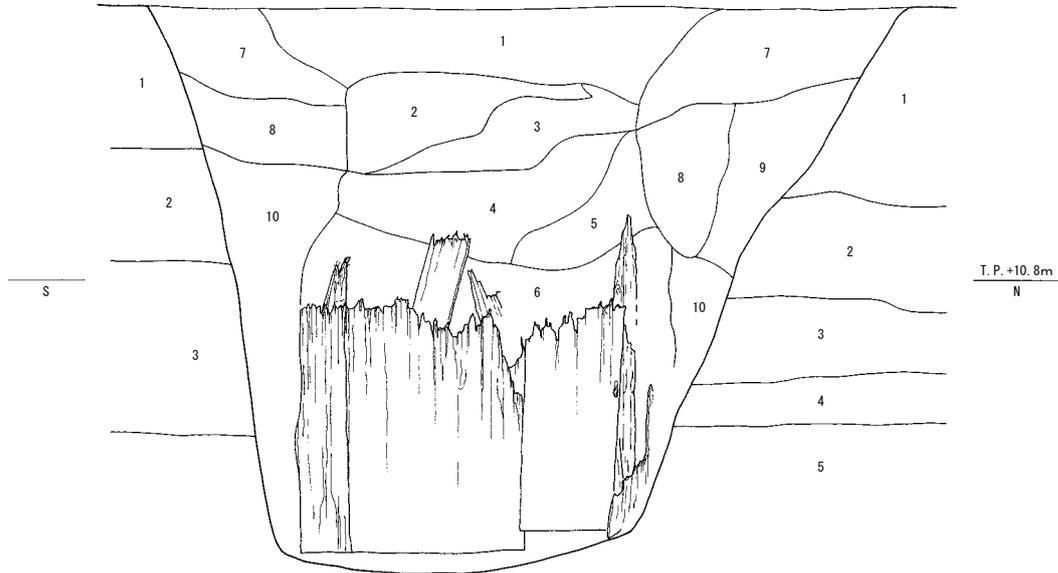
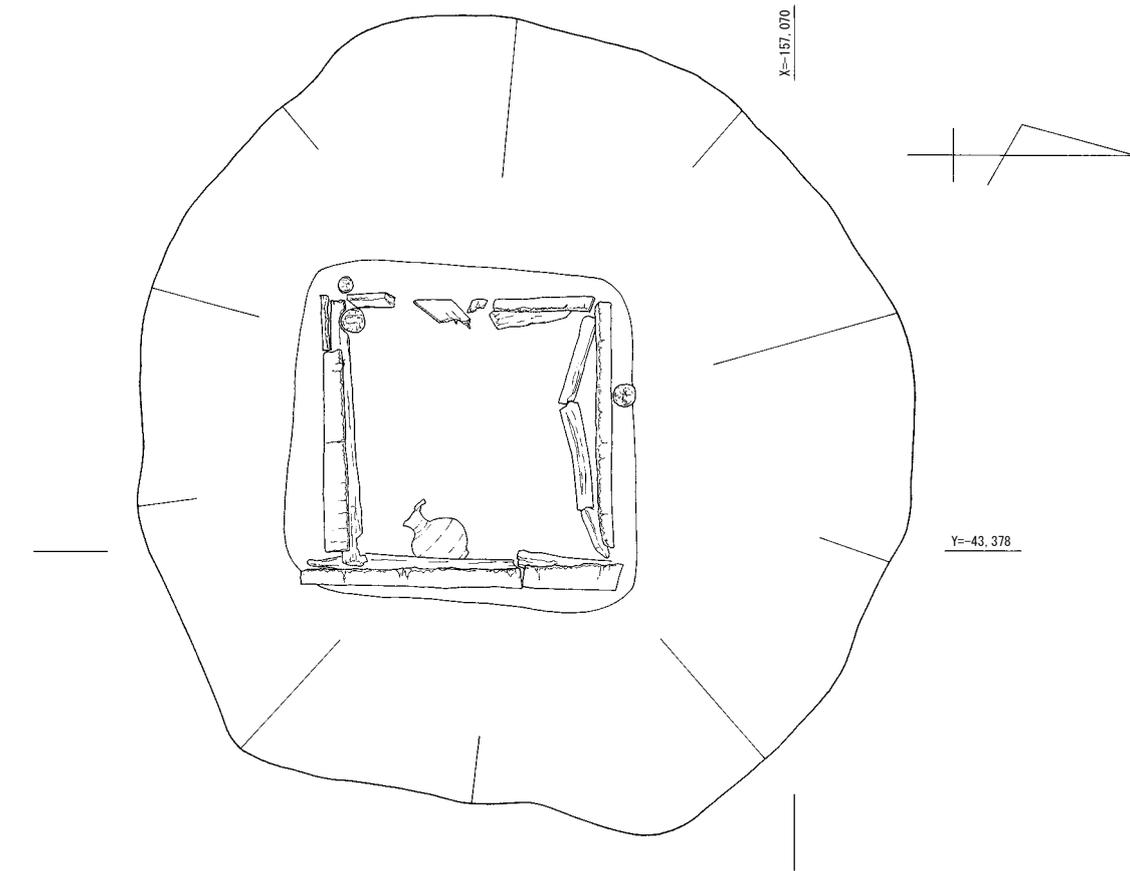
丸太材C（第9図1・2）：四隅に立てた丸太材Aを外側から押さえつけ、固定した状況（図版4 f～h）で出土した。直径6.0cm程度の広葉樹丸太材で、1点が完存する。完存する1は、長さ72.0cmである。両端近くに長9.0cmの抉りを入れる。抉りは外側が急角度、内側がやや緩やかな角度である。

井戸枠の骨組みは、四隅に丸太材Aを立て、丸太材Aに穿たれたホゾ孔に丸太材Bの先端を横位に挿入して連結したものである。それを掘方底に設置し、丸太材Aを外側から丸太材Cの抉り部分で押さえつつ、その外側を板材で囲い、最後に掘方と板材の間に礫を詰めて井戸枠を固定させるものである。

以上の井戸枠を構成する丸太材A・B・Cの連結は、南部最下段で比較的良好に残存し、確認することができた。それ以外の材としては、井戸枠の北側においてのみ、板材を固定する目的で、裏込め礫に先端を尖らせた丸太杭を差し込む状況（図版4 a）が確認できた。井戸の北壁は緩やかに掘り込まれているので、板材の倒れるのを防ぐためであろう。なお丸太材Aと丸太材Bの連結は数段があったと考えられ、また井戸枠内で丸太材A・Bや板材の破損品も出土しているが、段数等の詳細は不明である。ま

の南北道路下に延びるものでやはり道と考えられよう。盛土自体は、床土に乗り新しいものなのだが、溝2001以降、現在に至るまで区画あるいは道路として踏襲されてきたと考えられる。

井戸2130（第8図） B区のほぼ中央で検出した。掘方は直径2m程度のややいびつな円形を呈し、検出面から1.5mの深度まで掘り込まれる。南は急角度、北はやや緩やかに掘り込まれるが、中ほどからすぼまりつつ平面形がやや方形気味になり、底面は1.05×0.9mの長方形の平坦面にする。井戸枠は、土坑底に加工した丸太材により平面65cm四方程度の方形の枠を設置し、その周囲を板材で囲ったもので、裏込めに砂礫土を入れて固定したものである。なお井戸枠内には、井戸枠を構成したであろう板材が落ち込んでいたが、上部の構造は不明である。また掘立柱建物2との関係も不明である。

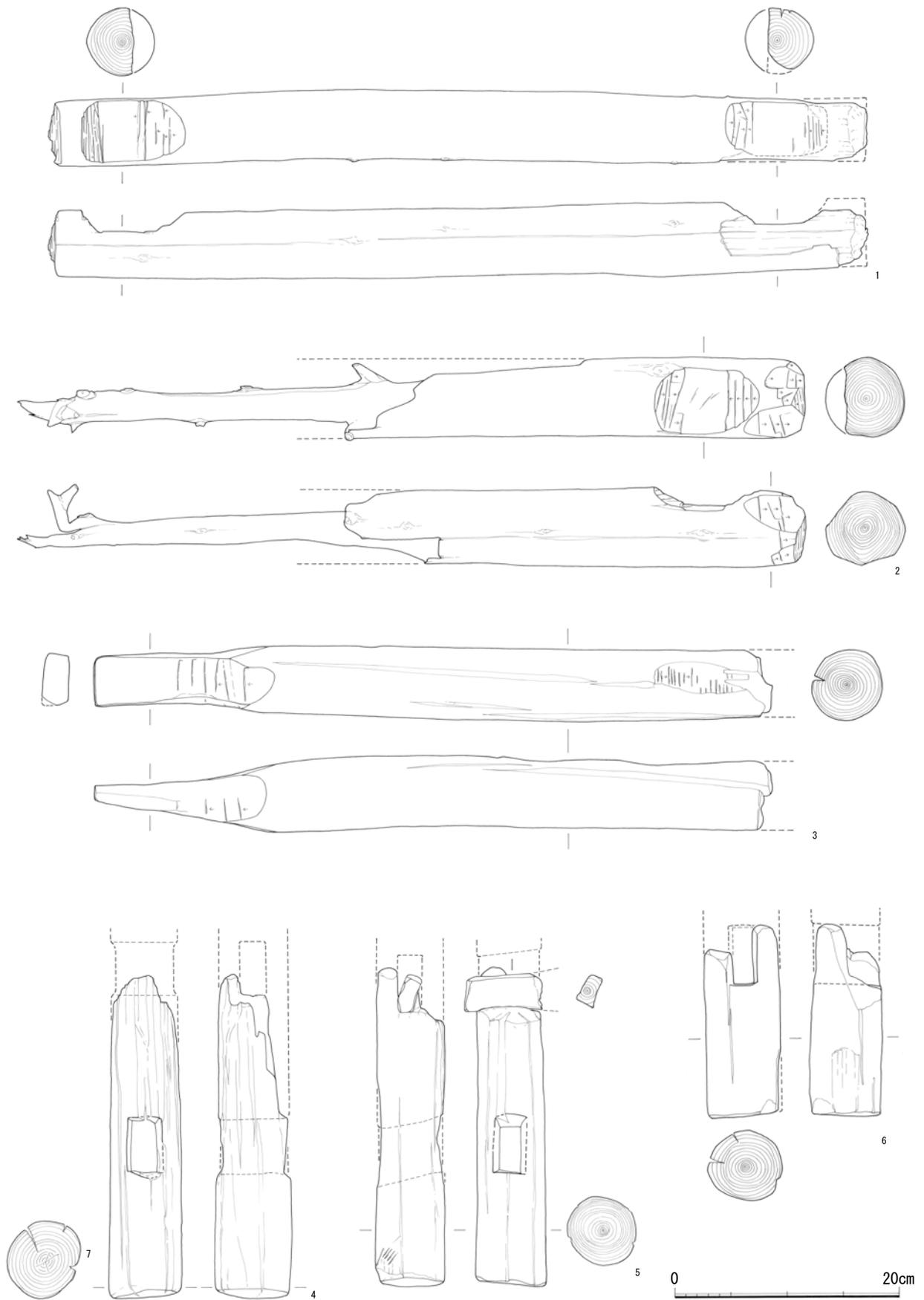


- 1 褐灰色(5YR4/1)シルト質土、小礫・土師器片多く入る
- 2 褐灰色(7.5YR4/1)シルト質土、若干の小礫と土師器片多く入る
- 3 黒褐色(7.5YR3/1)粘質土、ルーズ、若干の小礫入る
- 4 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土ブロック、ルーズ
- 5 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土ブロック、ルーズ
- 6 黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土ブロック、ルーズ
- 7 褐灰色(7.5YR4/1)シルト質土、固く締まる、小礫・土師器片多く入る
- 8 黒褐色(7.5YR3/2)シルト質土、固く締まる、小礫入る
- 9 黒褐色(7.5YR3/2)弱粘質土、固く締まる、小礫入る
- 10 黒褐色(7.5YR3/1)粘質土ブロック、固く締まる、小礫入る

- 地山断面
- 1 明黄褐色(10YR6/8)小礫混じり弱粘質土
 - 2 褐色(10YR4/4)砂礫
 - 3 黄褐色(10YR5/8)砂礫
 - 4 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂礫混じり粘土
 - 5 青灰色(10B6/1)砂礫



第8図 B区井戸2130平面・断面図



第9図 B区井戸2130井戸樫実測図1

た井戸枠の外側を囲う厚い板材以外に、薄い板材が多数出土（図版4 e）しており、井戸枠を構成すると思われるが、構造は不明である。

井戸枠を囲う板材等（第10～14図）：井戸枠の外側を囲う板材等として11点がある。これらの板材は櫃、案等を解体した再利用品であり、それを縦方向に設置したものである。なお井戸内から櫃に装着した持ち手が出土しており、井戸枠から落ち込んだと考える。内訳は櫃8、天板1、不明2である。

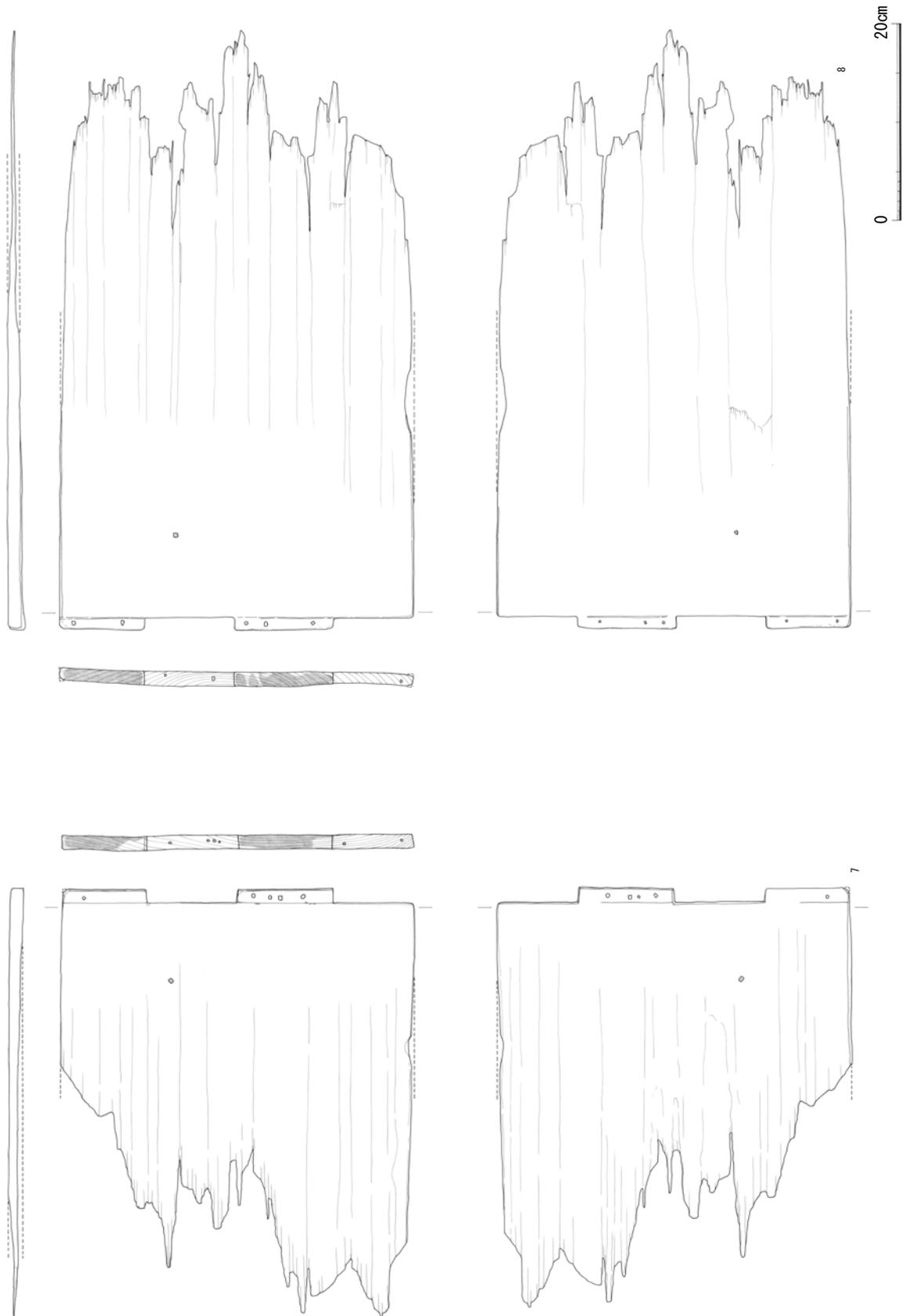
木櫃（7～10、12～14、16） 木櫃3点または4点の板材からなる。木櫃Aは側板4（7～10）と持ち手1（12）、木櫃Bは蓋板2（13・14）、木櫃Cは底板1（16）からなる。木櫃Aは側板と持ち手の釘孔の位置関係が同じなので同一個体と考えた。木櫃AとBは厚さが若干異なるので別の木櫃とした。また不明板材とした15も木櫃底板の可能性もある。その場合厚さがほぼ同じ木櫃Bの底板となる可能性もある。木櫃には脚の付く唐櫃（からびつ）と、持ち手の付く倭櫃（やまとびつ）があるが、木櫃Aは倭櫃であることがわかる。

木櫃A側板（7～10） 倭櫃の側板が4枚出土した。樹種はスギ。厚さ1.2～1.3cmの板目材であり、木表を表面側に使用する。7・8が長辺側、9・10が短辺側であり、残存する釘孔によって8と10が組み合うことがわかる。身の組み方は、板の高さを4分割し、交互に切り欠いて組み合わせる四枚組みであり、釘で固定する。なお切り欠くに際して、端部から板材の厚さに相当する1.3cmの表裏面に直線を刻み、上から8.5、9.0、10.0、8.0cmに4分割する。長側の7・8には持ち手を固定した鋌孔が残る。鋌孔の位置は、上から11.3、11.6cm、端部から9.4、9.7cmであり、いずれも木片を埋める。なお、小口部を中心とした接合部に若干の黒漆（「蔭切」かげさい）が残存する。

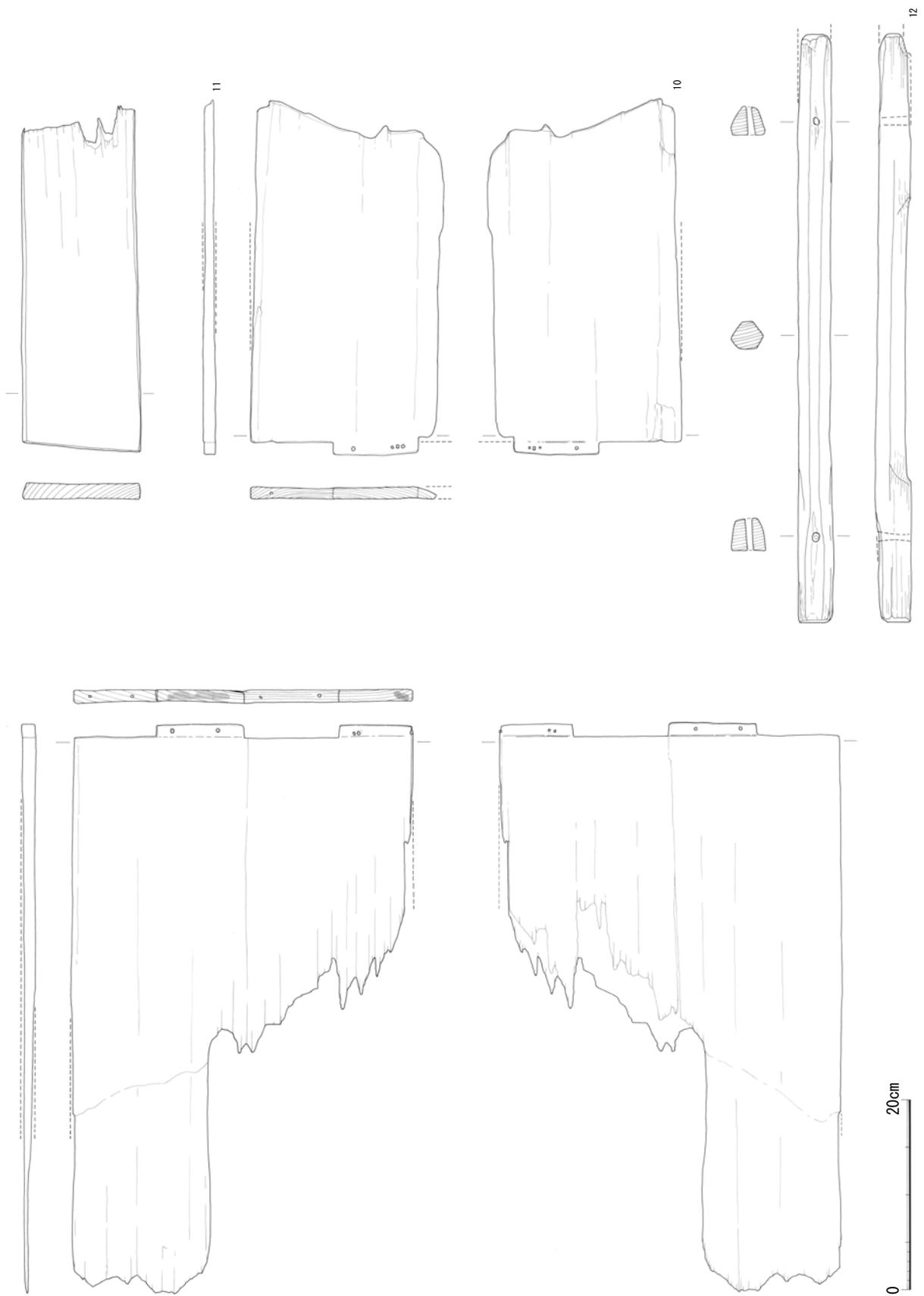
木櫃A持ち手（12） 倭櫃の持ち手であり、井戸枠内から出土（図版4 e）した。樹種はスギ。持ち手は、櫃の長側板に横位に装着するものであり、一本の棒の両端近くと中央の三箇所を釘で留め、その間の二箇所を削りかたを入れる。本資料は磨耗が激しいが半分以上が残存する。端面には黒漆が残存する。断面は櫃に接する部分が台形、削りかた部分が六角形である。釘孔から櫃に接する部分での鋌断面は3×5mm程度の長方形であることがわかる。なお持ち手の長さは、櫃の長さと同しいので、持ち手端部から中央の釘孔までの長さ52.5cmから、櫃の長さは105cmであることがわかる。

木櫃B蓋板（13・14） 1枚の蓋板を分割し、3枚の板材として使用されていたもので、14は2枚が接合できたものである。樹種はスギ（13のみ樹種同定）。厚さ1.7cmの板目材で、木表を上面として使用する。13と14に隅部が残っており対角の位置関係である。蓋板上面の縁部はいくぶん丸みを持つ。小口面には黒漆が明瞭に残る他、側面と上面端部の幅2cm程度の範囲内にも黒漆が残存する。また下面端部には幅0.3cmの黒漆が明瞭に確認できる。14下面において端部から2cmの位置に蓋側面の痕跡が平行して確認できるので、蓋側面板も蓋板と同じ厚さ1.7cmの板材であったことがわかる。13の小口側1に1孔と長辺側に1孔、14の小口側に2孔と長辺側に1孔の鋌孔ある。上面の鋌孔周辺は、1.5～2.0cm程度が楕円形にくぼんでおり、飾り金具の痕跡と考えられる。他に長辺側に紡錘形の孔が13に2孔、14に1孔があるが、性格はわからない。

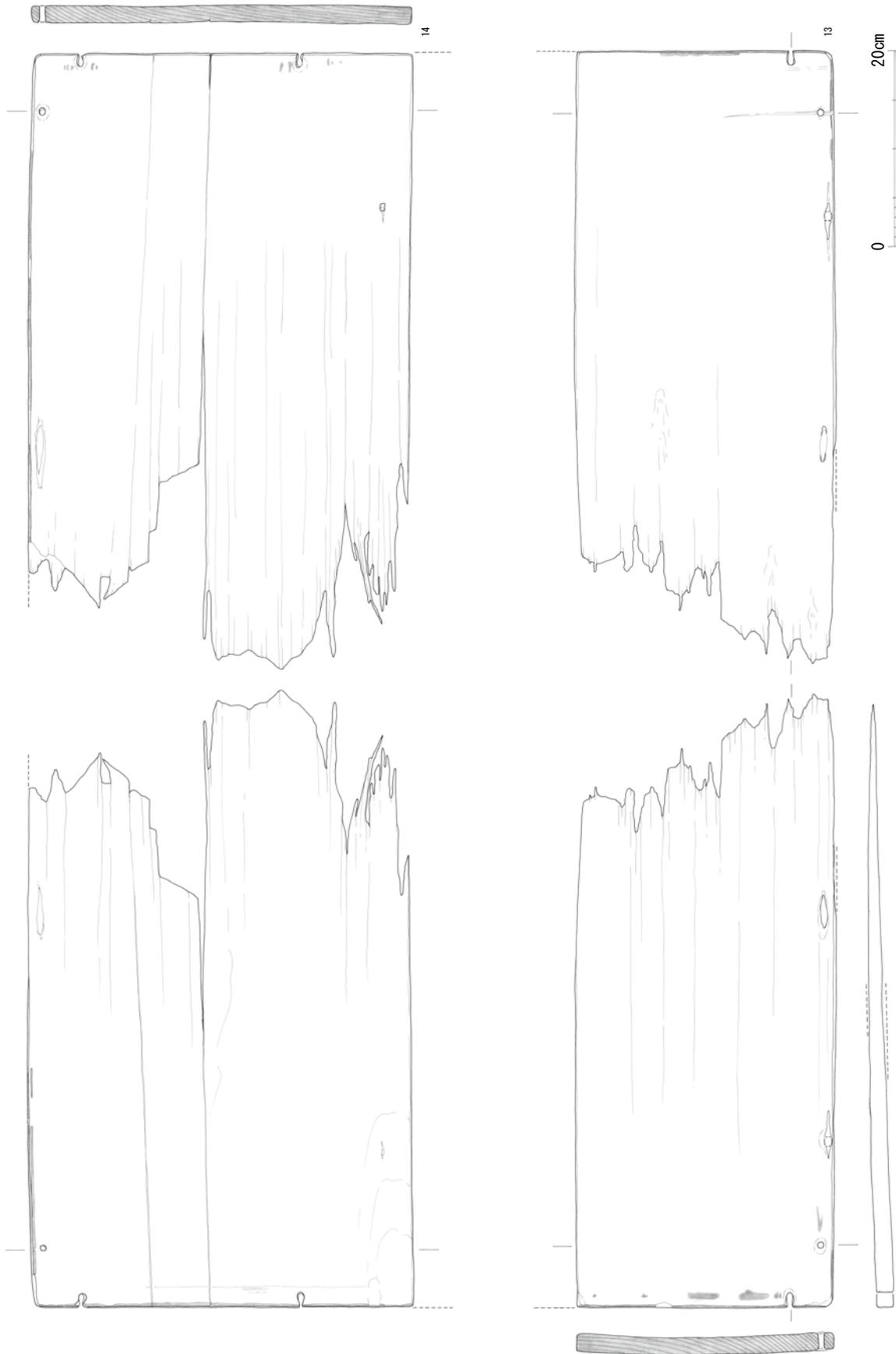
短辺側の鋌孔によって蓋板の幅が推定できる。短辺側に同じ関係で鋌孔があることが前提である。まず13と14が直接に接合するとすれば、鋌孔間隔が14では22cmに対して、13と14の間は32cmになる。よって3孔の可能性は低く、その場合13と14の間には失われた板材があったと考えられる。次に4孔とすれ



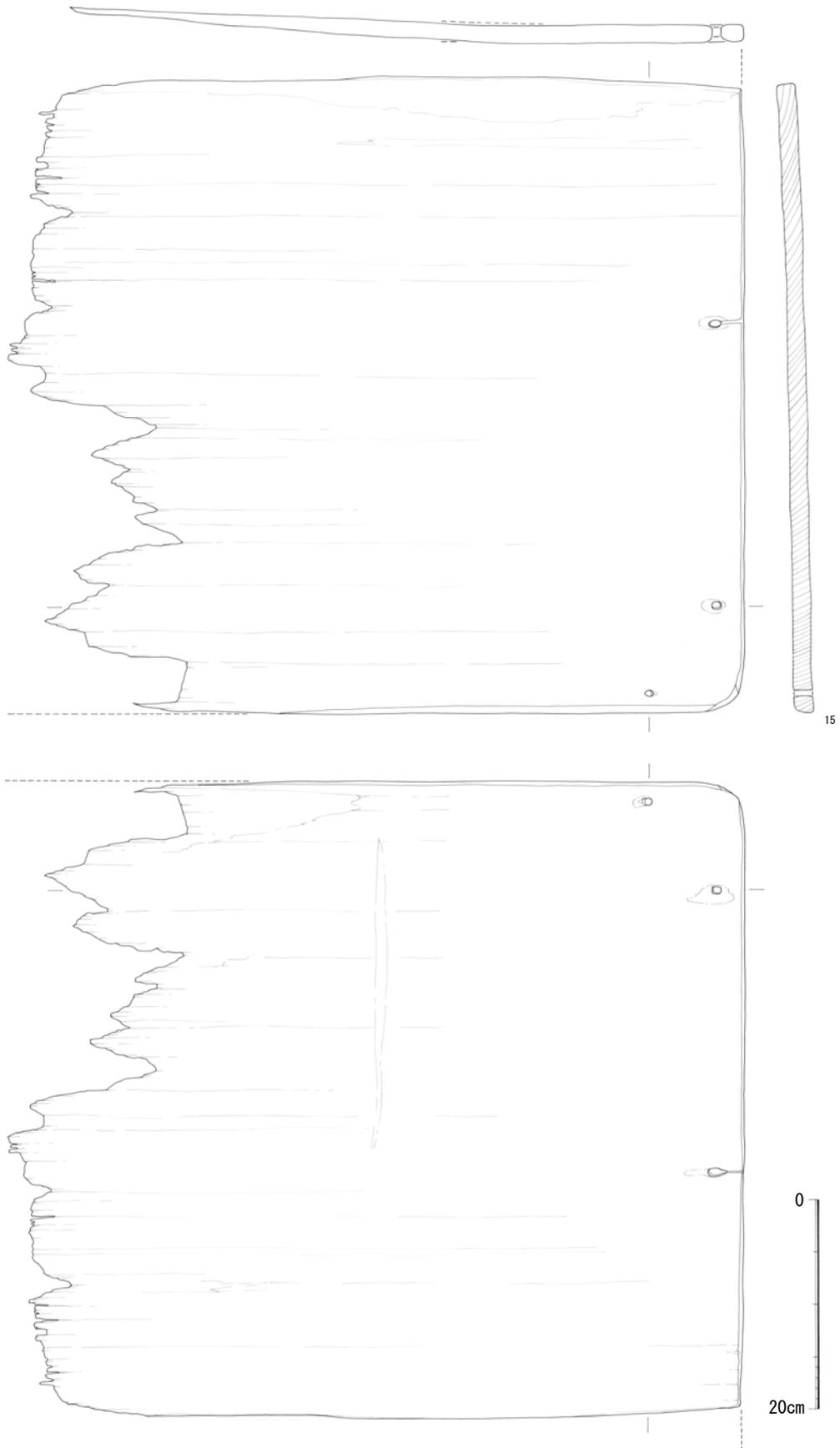
第10図 B区井戸2130井戸枠実測図2



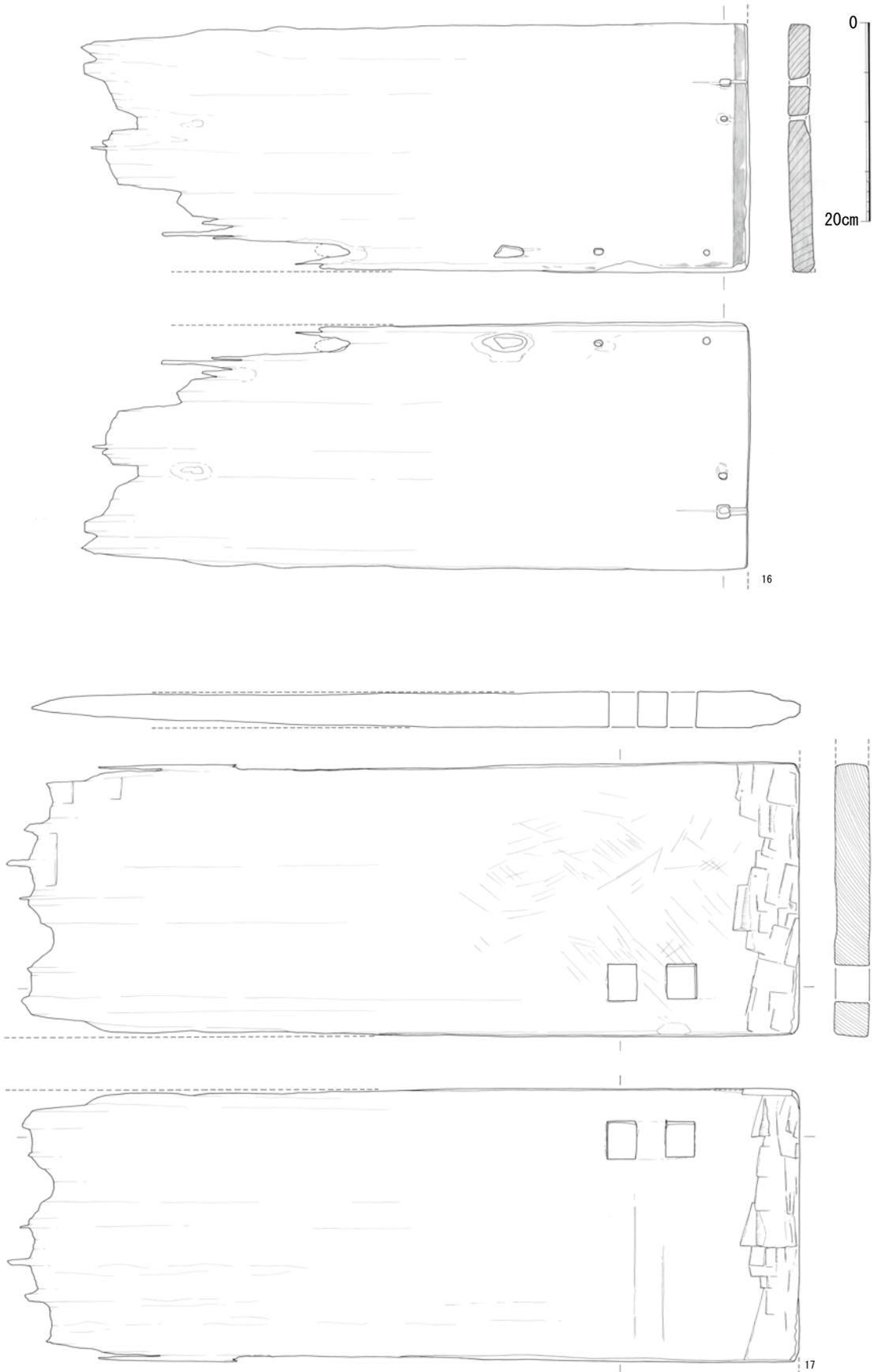
第11図 B区井戸2130井戸枠実測図3



第12図 B区井戸2130井戸枠実測図4



第13図 B区井戸2130井戸枠実測図5



第14図 B区井戸2130井戸枠実測図6

ば13と14の鉸孔間隔は44cmとなり、13と14の間には幅12cm、鉸孔1のある板材が存在したことになる。その場合、両側縁までの長さを加算すれば、蓋板の幅は76cmとなる。また蓋板幅から両蓋側板までの長さ4cmを引けば、木櫃B本体の幅は72cmになる。なお5孔とすれば、蓋の幅98cmとなり、これは木櫃の長さ105cmに対して大変アンバランスになる。よって現存する木櫃の大きさに近い鉸孔4、幅76cmと考えられる。

木櫃C底板(16) 木櫃の底板と考えられる。樹種はスギ。厚さ2.5cmの柾目材で、木表を上面として使用する。短辺側は上面の端部から1.5cmに直線を刻み、その間と小口面に黒漆を塗る。長辺側は側面と上面の一部に黒漆が残存する。裏面に漆は確認できない。釘孔が短辺側、長辺側ともに2箇所ずつ残る。長辺側隅の釘のみ残存しており、裏側から打ちつけた木釘である。他のクギ孔は上面側が小さく長方形の輪郭が明瞭に対して、裏面側は孔が大きくまた周囲が潰れている。潰れは鉄釘の頭部によると考えられる。裏面から釘を打ち付けて側板を固定したのであろう。なお長辺側の隅から24cmの位置に台形状の孔がある。唐櫃脚部の装着に関わる可能性も想定できるが詳細は不明である。

不明板材(11・15) 11は井戸西側の枳材として使用されていたものである(図版4f)。幅12.3cm、厚さ1.7cmの柾目材である。15は櫃等の底板の可能性のある板材である。樹種はスギ。厚さ1.8cm、柾目材で、底板と仮定すれば木表を上面として使用する。小口が黒化するが漆とは特定できない。釘孔が短辺側に2箇所、側面側に1箇所が残る。木櫃B底板と同様に、釘孔は上面側が小さく長方形の輪郭が明瞭である。釘孔の大きさは0.8～1.0×0.5cmである。小口側中央付近の釘孔が、底板の短辺側中央と仮定すれば、本来は幅73cmの板に復元できる。長辺側14cmを削除して板材としたものである。この幅は木櫃Aに極めて近い。

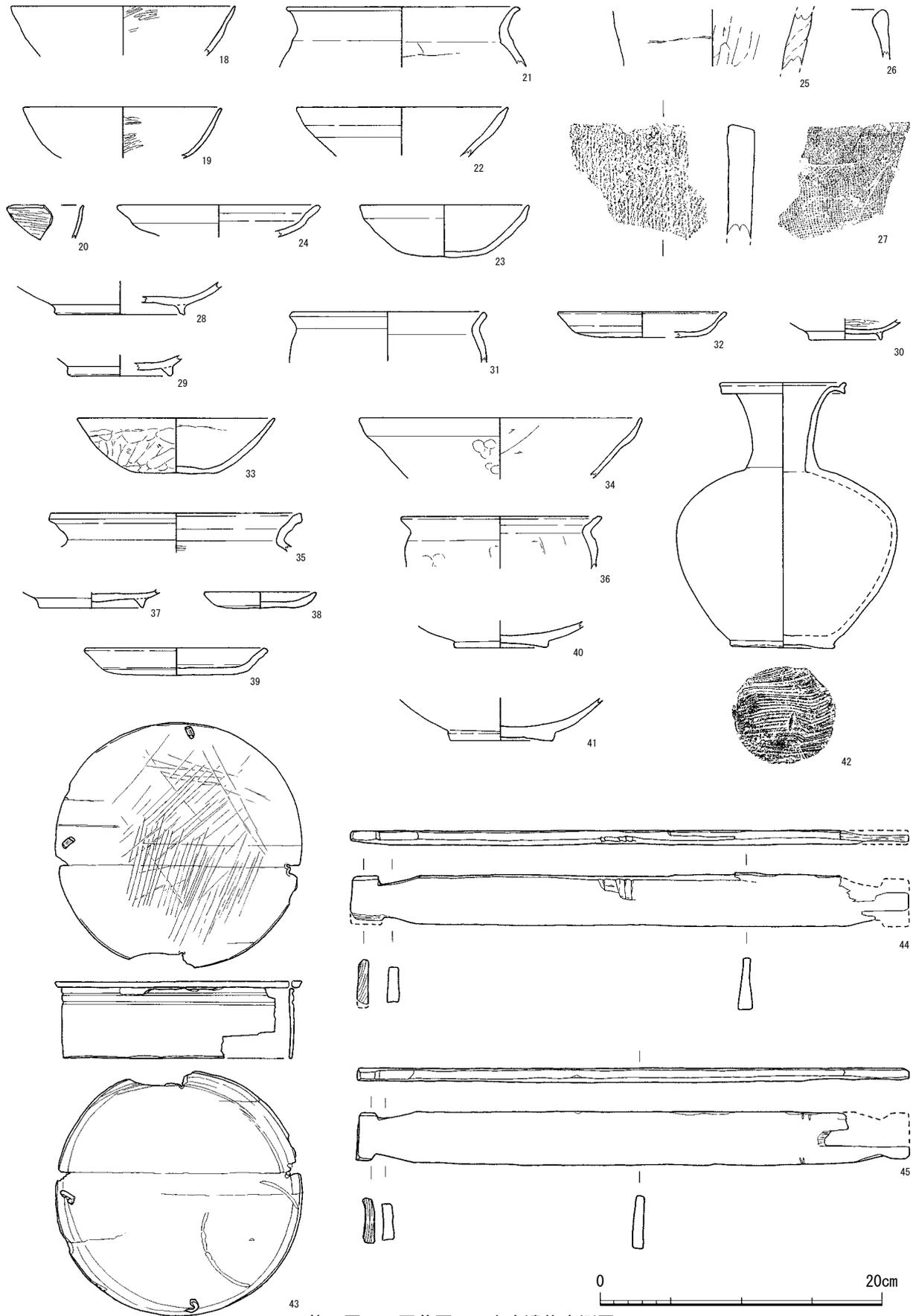
天板(17) 机・案の天板と考えられる。天板を分割し幅27cmの板材としたものである。樹種はヒノキ。厚さ3.5cm、木目の詰まった柾目材で、木表を上面として使用する。脚を装着するためと考えられる2孔1組のほぞ孔が残る。いずれも3.0×3.6cmの貫通孔で、2孔の間は3.0cmである。保存処理前には、裏面に2孔を挟んで3cm幅の圧痕が短辺と同じ方向で伸びる事を確認している。脚座等の部材を固定した可能性が想定できる。上面には刃痕があり、また端部は両面から手斧で削り尖らせている。手斧の刃幅は4.5cm。後者は板材とした段階の加工であろう。

出土遺物(第15図) 井戸枳内の埋土、および裏込め土から多くの遺物が出土した。土師器・須恵器や陶磁器の他、若干の瓦、曲物や抉りのある細い板などの木器である。

18～27は井戸枳の裏込め土、28・29は井戸枳内の上層、30～32は井戸枳内の中層、33～41・43～45は井戸枳内の下層、42は井戸底に密着して出土した遺物である。なお、細片のため図示しえていないが、墨書のある土師器も出土している。

18～20は黒色土器の椀である。18・19は内面黒色のA類、20は細片で両面黒色だがA類と考えておきたい。19・20の器壁は3mmと薄い。内面ヘラミガキ、外面は摩滅のため調整不明である。21は土師器の甕である。口縁部は強いヨコナデで、端部を横に引き出す。22・23は土師器の椀である。いずれも厚手、にぶい褐色を呈する粗製品である。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。23は二段のヨコナデを施す。24は土師器の皿である。口縁部に強いヨコナデを施す。灰黄褐色を呈する。25・26は土師器の製塩土器である。にぶい橙色を呈する。25は胎土に長石・石英を主とする粗砂を多く含む。外面は接合

第3章 調査結果



第15図 B区井戸2130出土遺物実測図

痕の残るナデ仕上げ、内面は強くナデ上げてくぼむ。26は1mm弱の砂粒を含む。体部器壁は薄く、口縁部は肥厚する。27は平瓦である。凹面は布目、凸面は縄目叩き、凹面端部と小口面はケズリを施す。色調は黄灰色、胎土に細砂～3mm程度の粗砂を多く含み、硬質である。なお、他にも井戸枠内で3点の瓦片が出土している。

28・29は土師器の杯あるいは椀である。色調は明赤褐色を呈し、胎土に赤色斑を含む。

30は黒色土器の椀で、内面黒色のA類である。器壁は3～4mmと薄く、内面ヘラミガキである。31は土師器の甕である。口縁部内外面ヨコナデ、外面に煤が付着する。32は土師器の皿である。口縁部上半に強いヨコナデを施す。33・34は土師器の椀である。口縁部外面ヨコナデ、体部内面ナデ、同外面は成形時の指ナデである。33は完形品で、体部外面に放射状に成形時の指頭痕が巡る。35・36は土師器の甕である。35は口縁部端部を下方に肥厚させる。36は口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、同外面は成形時の指ナデである。37は土師器の坏であろう。内面ナデを施す。38・39は土師器の皿である。いずれも口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、同外面は成形時の指ナデを仕上げとする。なお38の口縁部外面ヨコナデは条線を残す特徴的なものである。40・41は緑釉陶器である。40は軟質焼成で椀あるいは皿と考えられる。円盤状高台であり、高台底面には緑釉が付着しておらず淡橙色を呈する。胎土は白色である。なお本遺構では他に緑釉陶器細片8点（図版20 a～d）が出土しているが41以外は軟質焼成である。平安京近郊窯産と考えられる。41は硬質焼成で椀と考えられる。蛇の目高台であり、高台の底面・側面はロクロ回転によるヘラ削りである。全面に施釉される。平安京近郊窯産と考えられる。いずれも9世紀中頃に位置付けられる。42は須恵器の細頸壺である。口縁部が破損するのみである。口縁部の破片は出土していないが、人為的な破損なのかは不明である。底面に静止糸きり痕がある。

43は木製品の曲物であり、蓋板と側板が分離して出土した。樹種はいずれもヒノキ。蓋板は直径17.5cm、厚さ5～4mmの柾目板で、平面周囲に2孔一組の孔が4箇所にある。この孔は、直径2mm程度、紐を通して円筒形に曲げた側板と結合させるためのもので、2箇所の孔に桜樹皮の細紐が残存した。細紐は、幅3mm程度、黒褐色を呈する。蓋の下面となる側の周縁は幅2～3mm程度、斜方向に削り落す。なお、上面には刃痕があり、下面には側板の形に由来すると考えられる円形の圧痕や線刻、および径7.5cm程度の焦げたような痕跡がある。後者の痕跡は線刻に先行するものである。

側板は幅5.1cm、厚さ2～3mmである。円筒形に曲げて、両端を綴じ合わせ蓋板と結合したと考えられるが、破損が激しく詳細は不明である。側板の外面上部に凹線二条を巡らせるようである。なお側板を曲げるための内面の細かな刻線は施さない。

44・45は両端に切り込みを入れる細板である。樹種はいずれもヒノキ。両者とも片側が破損するがかろうじて端部と切り込みが残存しており、全形がわかる。法量は長さ39.0～39.4cm、幅3.6～3.8cm、端部の厚さ6～8cm、中部の厚さ10～8mm（図の下側縁）、5mm（上側縁）である。いずれも上側縁が摩耗して丸くなるが、用途は不明である。

掘立柱建物1（第16図） 柱穴2019・2033・2024（東側柱列）、2052・2056・2062（西側柱列）、2050（北中間柱）からなる側柱建物である。南側は調査区外にのびる。建物は南北に主軸をとり、梁行2間（4.7m）×桁行2間以上である。なお妻側中間柱は、現代井戸によって消失した可能性もある。柱間隔は側柱側2.5m程度である。主軸方位は真南北。柱掘りかたの規模は、2062以外は直径60～70cm程度の円形

第3章 調査結果

×桁行2間以上である。柱筋の通りが悪く、柱間隔もまちまちである。主軸方位は真南北。柱掘方の規模は、直径20～30cm程度の円形で、断面で確認できる柱痕跡は直径10～12cm程度である。柱穴から土師器片が出土しているが時期は不明である。なお井戸2130との関係は不明である。

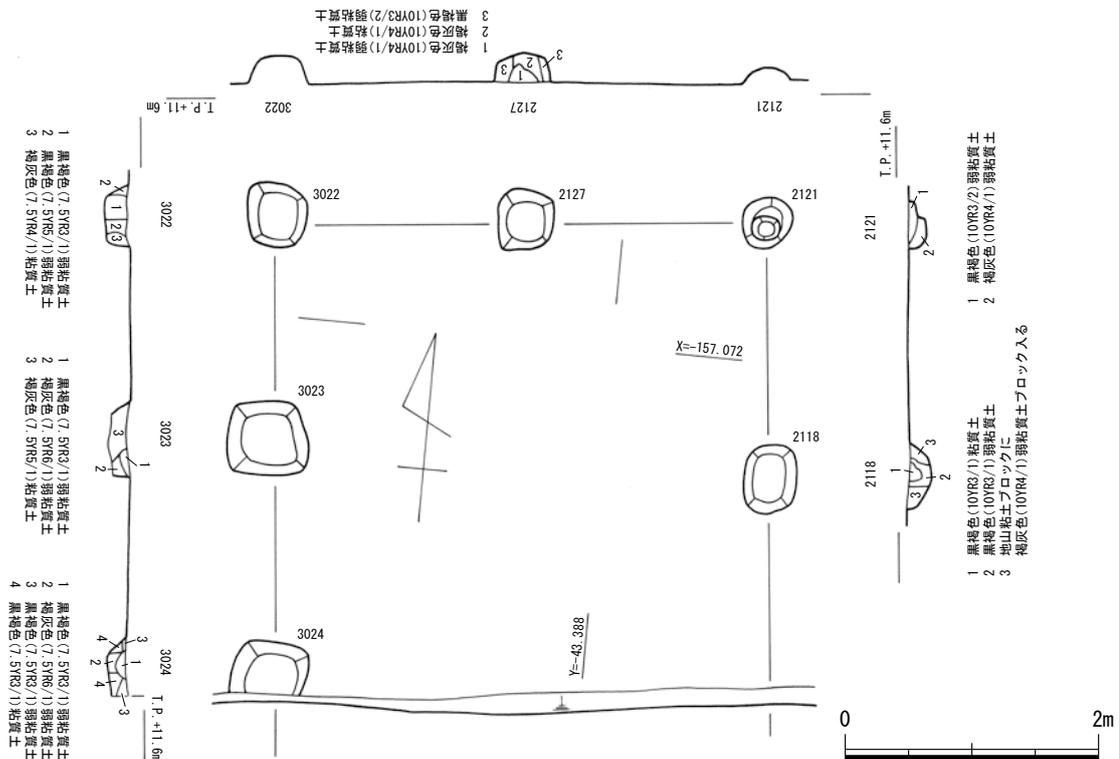
掘立柱建物3 (第17図) 柱穴2102・2106・2098 (東側柱列)、2123・2119・2116 (西側柱列) からなる側柱建物である。北側は調査区外にのびる。建物は南北に主軸をとり、梁行1間 (3.0 m) ×桁行2間以上である。なお妻側中間柱は、落込み2110によって消失した可能性もある。側柱側の柱間隔は2.1 mである。主軸方位は真南北。柱掘方の規模は、直径25～30cm程度の円形で、断面で確認できる柱痕跡は直径10～13cm程度である。柱穴2098の柱痕から緑釉陶器細片、土師器小皿2が出土した。

出土遺物 (第19図) 46・47は柱穴2098の柱痕から出土した土師器の小皿である。47は完形品、46は口縁部の一部を欠く。いずれも赤色斑を含む類似した胎土である。47は口縁端部内面をくぼませる。46は口唇部9 mm程に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。緑釉陶器は軟質であるが、細片のため図示しえない。

掘立柱建物4 (第17図) 柱穴2103・2107 (東側柱列)、2125・2120 (西側柱列)、2113 (南中間柱) からなる側柱建物である。北側は調査区外にのびる。建物は南北に主軸をとり、梁行2間 (3.5 m) ×桁行2間以上である。柱間隔は梁側1.8 m程度に対して、側柱2.5 m程度と長い。主軸方位はN-7°-W。柱掘方の規模は、妻側柱穴が直径35cm程度の円形で、断面で確認できる柱痕跡は直径10～14cmである。なお側柱側の柱穴は小型である。柱穴2120から製塩土器が出土した。

出土遺物 (第19図) 48は柱穴2120のから出土した製塩土器である。体部が外傾・外反する長胴タイプであろう。色調は橙色、胎土に1～3 mmの粗砂を多く含む。指ナデである。

掘立柱建物5 (第18図) 柱穴2121・2118 (東側柱列)、3022・3023・3024 (西側柱列)、2127 (北中間

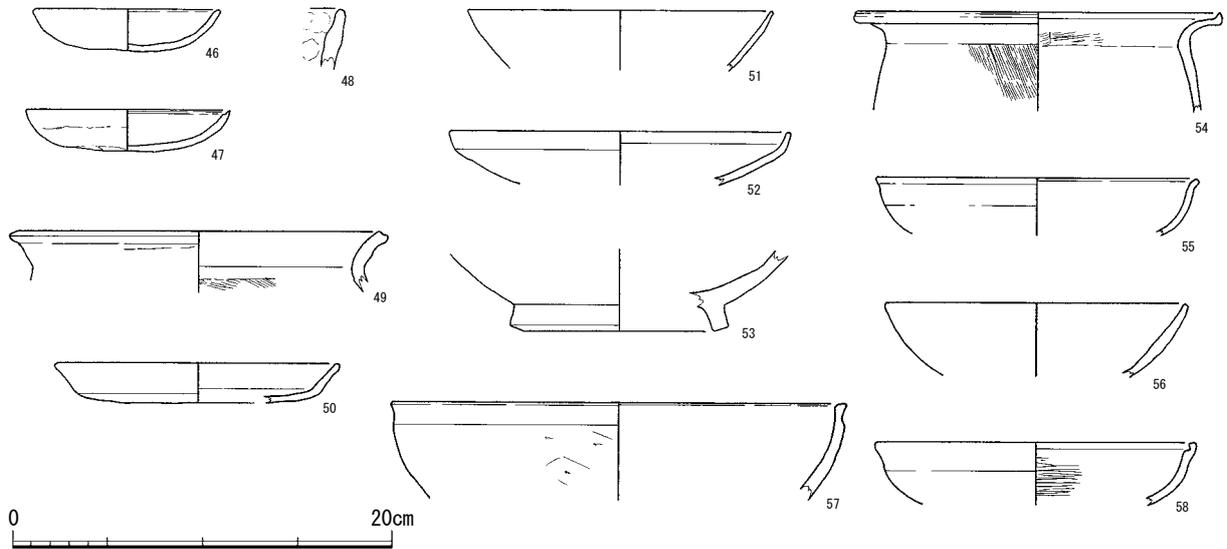


第18図 B区掘立柱建物5平面・断面図

柱) からなる側柱建物である。南側は調査区外にのびる。建物は南北に主軸をとり、梁行2間(4.0m)×桁行2間以上である。柱筋の通りが悪く、妻側の柱間隔は1.9m程度である。主軸方位はN-7°-W。柱掘りかたの規模は、2121以外は45～60cmの隅丸方形で、断面で確認できる柱痕跡は直径15～20cmである。柱穴2127から黒色土器A類が出土した他、多くの遺物が出土している。

出土遺物(第19図) 49・50は柱穴2118、51～53は柱穴2127、54・55は柱穴3023、56～58は柱穴3022から出土した遺物である。

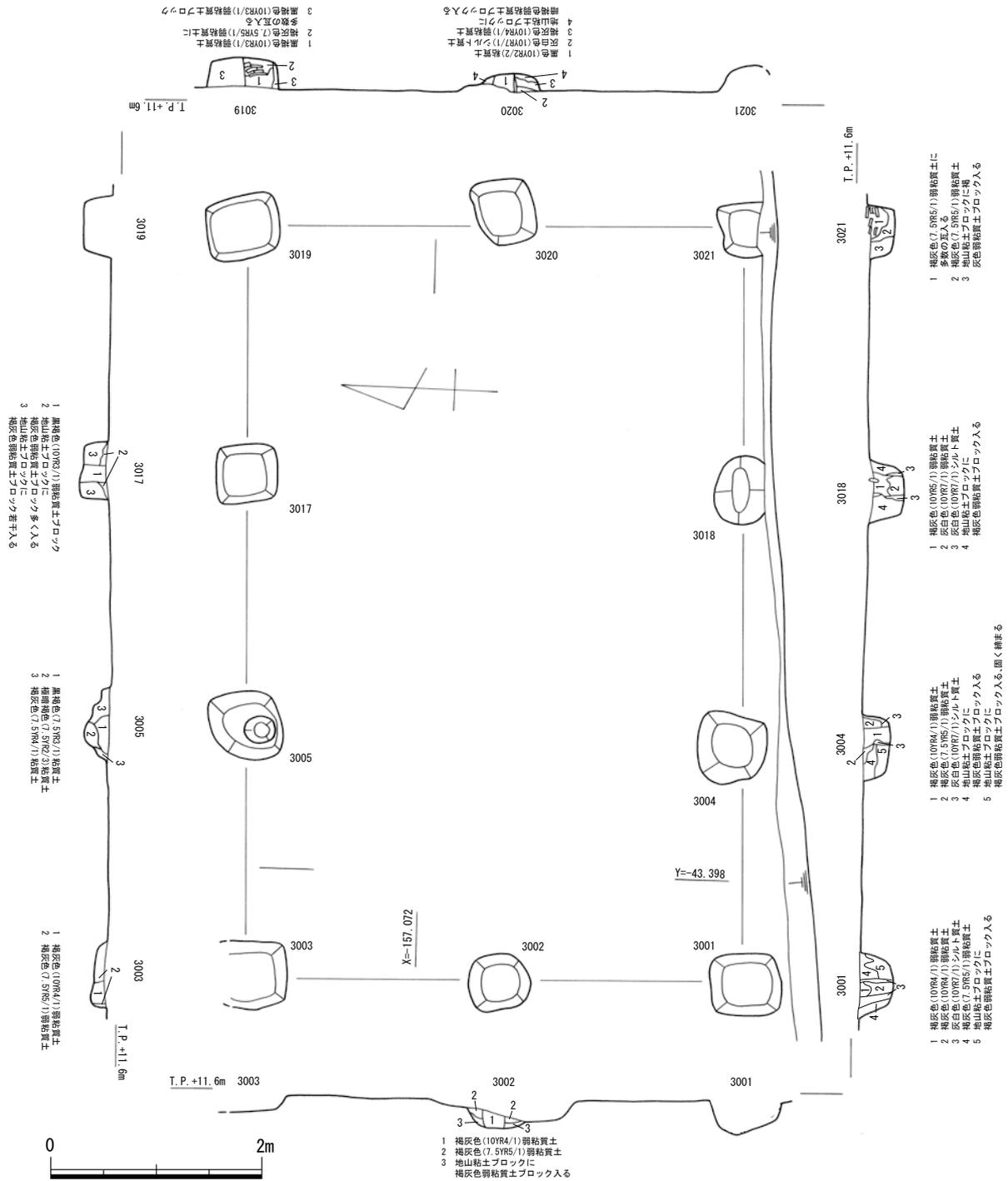
49・54は土師器の甕である。49は口縁部をやや外反させ、端面を持ち、外端部を外に張り出す。胎土に1～2mmの粗砂を含む。54は口縁部に強いヨコナデにより外反させ、端部をつまみ上げる。胎土は精良で、僅かの微細砂を含む。50は土師器の皿である。内外面とも口縁部ヨコナデ、体部ナデである。明赤褐色を呈する。51は黒色土器の椀である。A類で内面と口縁部外面1.5cmが黒色。52は土師器の椀と考えられる。口縁部を屈曲させる。粗製品で、暗赤褐色を呈し、胎土に1～4mmの粗砂を多く含む。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデである。53は須恵器の壺あるいは鉢と考えられる。55・58は土師器の坏である。いずれも胎土は精良で僅かの微細砂を含む。55は口縁端部内面に弱い沈線を巡らせる。58は口縁部を内面に折り返すことで内面に明瞭な段を有し、また口縁上端部を平坦面にする。58内面はヘラミガキである。56は土師器の椀である。器壁は厚く、口縁部外面ヨコナデ、体部ナデ、内面は剥離で調整不明である。57は土師器の鉢である。口縁部はヨコナデにより外面をくぼませ、端部に平坦面を有する。なお口縁部内面に半月状のくぼみがあり、片口であることがわかる。



第19図 B区掘立柱建物3・4・5出土遺物実測図

掘立柱建物6(第20図) 柱穴3001・3004・3018・3021(南側柱列)、3003・3005・3017・3019(北側柱列)、3002・3020(西・東中間柱)からなる大型の側柱建物である。周囲には他の遺構は希薄であり、掘立柱建物9と共に中心的な建物であった可能性が高い。

建物は東西に主軸をとり、梁行2間(4.8m)×桁行3間(7.3m)で、柱間隔は2.4m、床面積は35㎡、主軸方位はN-2°-Wである。柱掘りかたの規模は60～70cm四方の隅丸方形が主体であり、柱痕跡は直径18～23cm程度である。なお柱掘りかたは礫層まで掘り込まれており、柱穴3005で扁平な円礫が据えられていたが、それ以外は礫層表面の柱接地点が建物重量によって深さ数cm皿形に窪む状況が確認できた。また

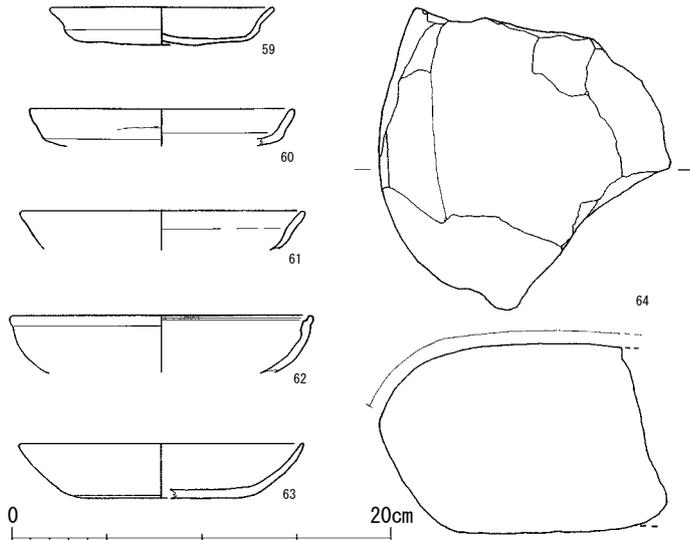


第20図 B-C-C区掘立柱建物6平面・断面図

柱穴3019・3021では、柱痕内に平瓦片を意図的に水平に詰め込む状況が確認できた。

出土遺物（第21～23図） 59は柱穴3017、60は柱穴3001、61・62は柱穴3003、63は柱穴3004、64は柱穴3005から出土した遺物である。また柱穴3021・3019の柱痕内から平瓦が出土している。

59は土師器の皿である。器壁は2～3mmと薄く、口縁部は強いヨコナデにより外反させる。60～62は土師器の杯である。60・61は口縁部ヨコナデである。60の胎土は精良。62は口縁端部を内面に丸めることで、外面を肥厚させ、内面に沈線を巡らせる。胎土は精良である。63は須恵器の杯である。生焼けであり、摩滅が著しい。64は柱穴3005の底面に埋め込まれ設置されていた砥石の破損品である。肌理の



第21図 掘立柱建物6出土遺物実測図1

細かい砂岩製で、上面と破面以外の側面に磨面がある。底面は整形時の敲打痕がある。なお全面に薄く煤が付着する。重量3.10kg。
65～68、図版16 iiiの①～③は柱穴3021出土瓦である。③は丸瓦、他は平瓦である。平瓦の成形・調整技法・法量は類似する。ほとんどが接合できるので、埋める段階で分割し敷き詰めたと考えられる。

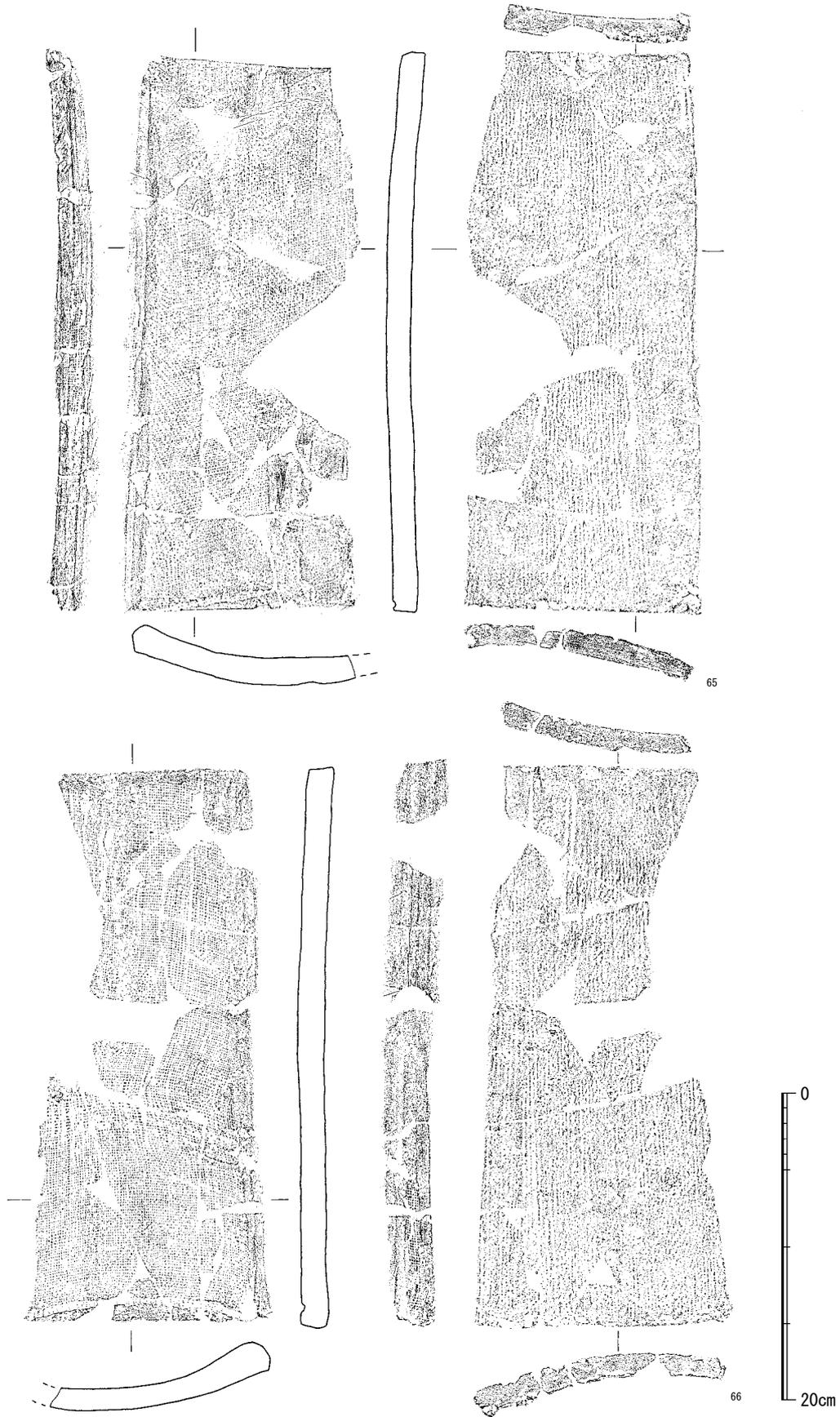
65をサンプルに報告する。平瓦を縦方向に半裁したもの。長さ36.5cm、厚さ1.5～1.6cm。凹面に布圧痕、凸面に縄叩きが残る。側縁部は肥厚する。側面は、凹・凸両

面側の縁を縦方向にヘラケズリで除去しており、側面のヘラケズリの及ばない部分には凹面と同様の布圧痕が残る（図版16 ii 下段）。広端面はほぼ直角にヘラケズリ、狭端面は凹面側斜方向にヘラケズリを施す。凹面端部側は横方向のヘラケズリを施すが、凸面端部側は無調整である。なお65のみ、狭端面のヘラケズリの及ばない部分に布圧痕が確認できる。本来、布圧痕は凹面から両側面、狭・広端面にあったことがわかる。なお67・68の横断面図に典型的にみられるように凸面側縁が下方に突出しており、製作台端部の痕跡と考えられる。色調は灰色、焼成はやや硬質である。

66は平瓦を縦方向に半裁したもの。法量は長さ36.5cm、厚さ1.3～1.5cm。色調は灰色、焼成はやや硬質である。65と長さ、技法、胎土、焼成等が酷似するが接合しない。67は平瓦を縦方向に半裁し、さらに横方向に半裁したもの。法量は厚さ1.6～1.7cm。色調は暗灰色、焼成はやや硬質である。67は平瓦を縦方向に半裁し、さらに横方向に半裁したもの。法量は厚さ1.7～1.9cm。色調はにぶい褐色、焼成はやや硬質である。

図版16 iii ①は平瓦の狭端部（図版上部）の一部と片方の側縁を残す。法量は長さ24.6cm、厚さ1.4～1.6cm。色調は暗灰色、焼成はやや硬質である。同②は平瓦を縦方向に半裁し、さらに横方向に半裁したもの。法量は長さ18.6cm、幅13.5cm、厚さ1.2～1.4cm。色調はにぶい褐色、焼成はやや硬質である。これらの平瓦の成形・調整は65と同じである。同③は丸瓦広端部の破片。幅11.0cm。凹面に布圧痕、同広端面ヘラケズリ、凸面はヨコナデである。色調は暗灰色、焼成はやや硬質である。

図版16 iii ④～⑦が柱穴3019出土瓦であり、すべてが平瓦である。成形・調整技法・法量は柱穴3021出土瓦と類似する。やはりほとんどの破片が接合できる。④は平瓦の片方の側縁を残すのみである。法量は厚さ1.6～1.8cm。色調は灰色、焼成はやや硬質である。⑤は平瓦を縦方向に半裁し、さらに横方向に半裁したもの。法量は長さ24.2cm、幅16.0cm、厚さ1.1～1.4cm。凸面に離れ砂が付着する。色調は暗灰色、焼成はやや硬質である。⑥は平瓦を縦方向に半裁し、さらに横方向に半裁したもの。法量は長さ21.9cm、幅18.0cm、厚さ1.6～1.8cm。凸面に離れ砂が付着する。色調はにぶい褐色、焼成はやや硬質である。⑦は平瓦を縦方向に半裁し、さらに横方向に半裁したものと考えられる。法量は厚さ1.6～1.8cm。色調はにぶい褐色、焼成はやや硬質である。

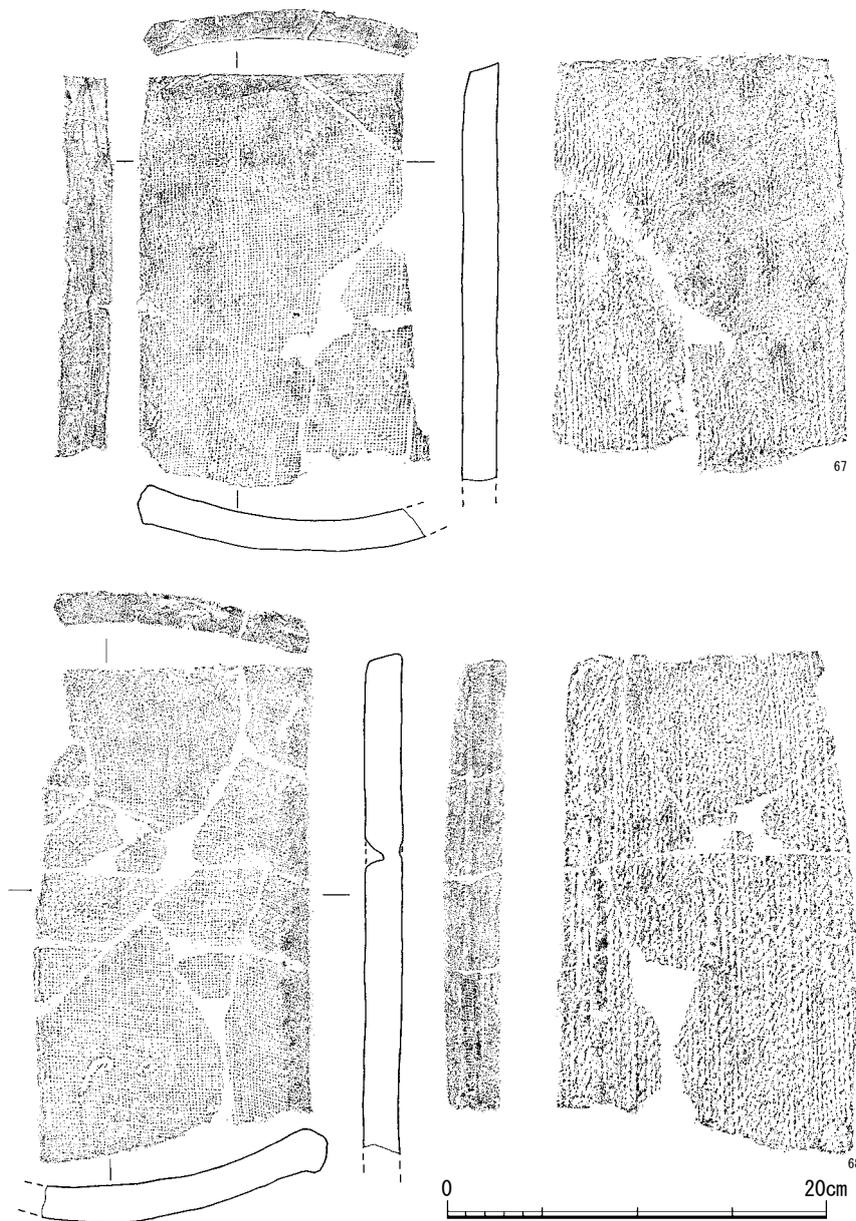


第22図 掘立柱建物6出土遺物実測図2

掘立柱建物9（第24図）

柱穴7002～7016からなる掘立柱建物である。柱掘方、柱痕跡の検討から東西3間×南北3間以上の掘立柱建物と考えられ、南は調査区外にのびる。そのように考えるのは西・北・東の柱列の柱掘り方が大きく、柱痕跡も25～28cm程度と太いのに対して、南柱列の柱穴7008・7012は柱掘り方がやや小型で、柱の直径も20cm弱と細いことである。その場合、柱穴7008・7012は、柱穴7007・7010・7011と共に東柱となる。

建物は南北に主軸をとり、規模は東西5.0m×南北5.6m以上で、柱間隔は南北が1.8m、東西が1.6mである。主軸方位はN-3.5°-W。柱掘方の規模は70～80cm四方程度の隅丸方形であり、断面で確認できる柱痕跡は直径25～28cmである。一方、身舎内の柱掘方の規模は50～70cm四方程度



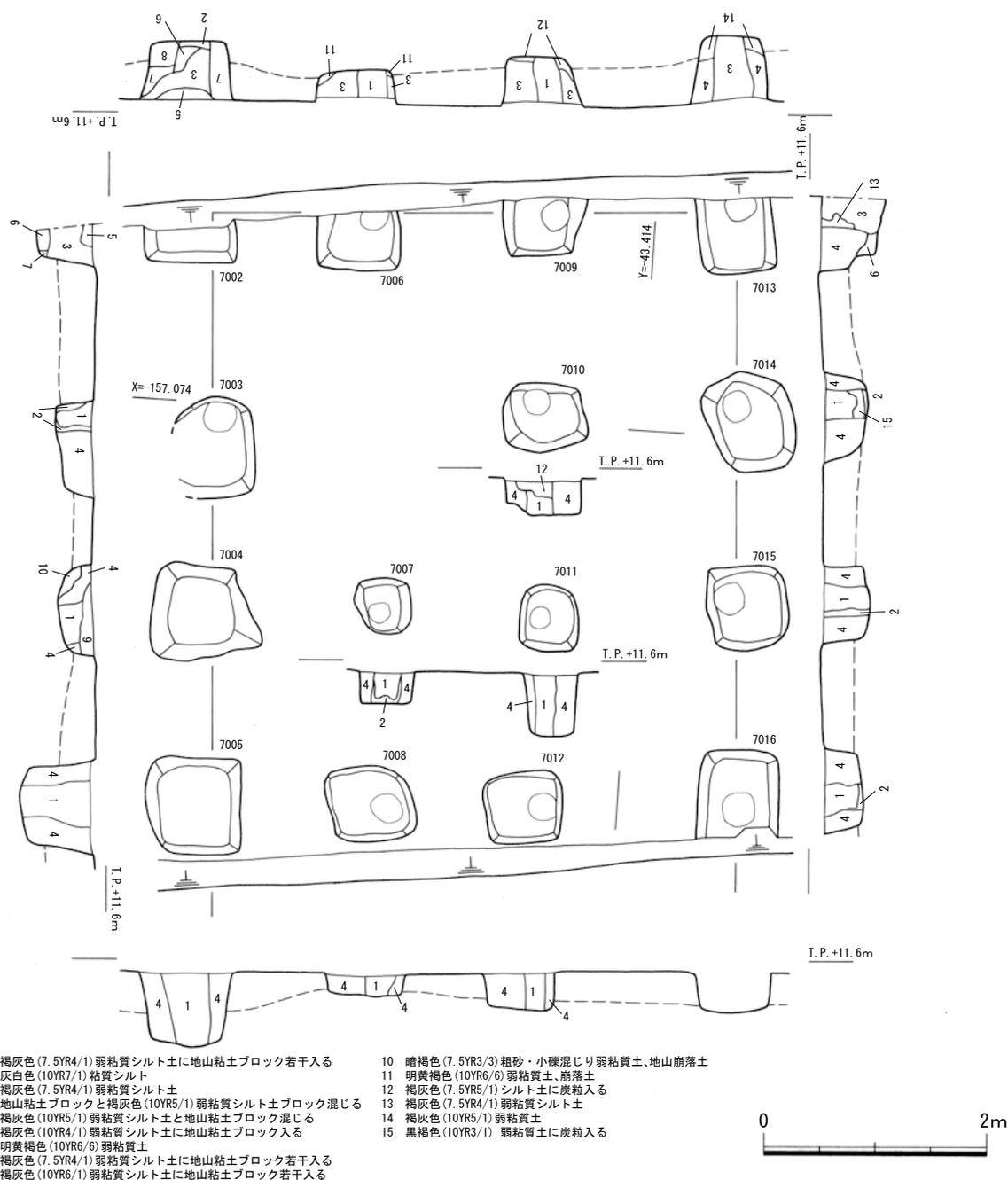
第23図 掘立柱建物6出土遺物実測図3

度、柱痕跡は直径15～20cmと小型である。なお柱掘方はすべてが礫層まで掘り込まれており、特に柱穴7002・7013は20cm、柱穴7005は30cm程度まで礫層を掘削する。礫層表面の柱接地部が建物重量によって深さ数cmで皿形に窪む状況が確認できた。

柱穴の柱痕埋土と柱掘方埋土は類似する。柱痕埋土は褐灰色弱粘質シルト土であり、柱掘方埋土は地山起源の明黄褐色粘土ブロックを主体に褐灰色シルト土がブロック状・筋状に入る。柱痕埋土は、柱穴7002・7005が抜き取りである以外は、柱材が腐って流れ込んだものである。なお柱掘方埋土の褐灰色弱粘質シルト土は耕作土的である。柱穴からの出土遺物は少なく図化しえたのは1点である。

本建物は掘立柱建物6と共に大型であり、周囲には他の遺構は希薄である。この二棟は屋敷地の中でも中心的な建物であった可能性が高い。

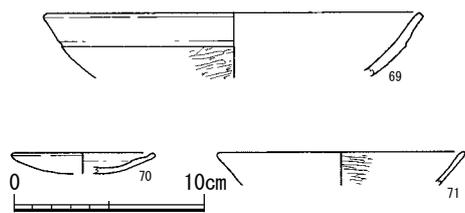
出土遺物（第25図） 69は柱穴7009の柱痕跡埋土から出土した。他に柱穴7013の柱痕跡埋土から黒色土



第24図 G区掘立柱建物9平面・断面図

器の細片が出土した以外は、他柱穴から土師器細片が少数出土したのみである。

69は土師器の椀、あるいは杯である。口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラ削りである。体部内面ヘラミガキと考えられ、煤が付着する。精良な胎土で、明赤褐色を呈する。



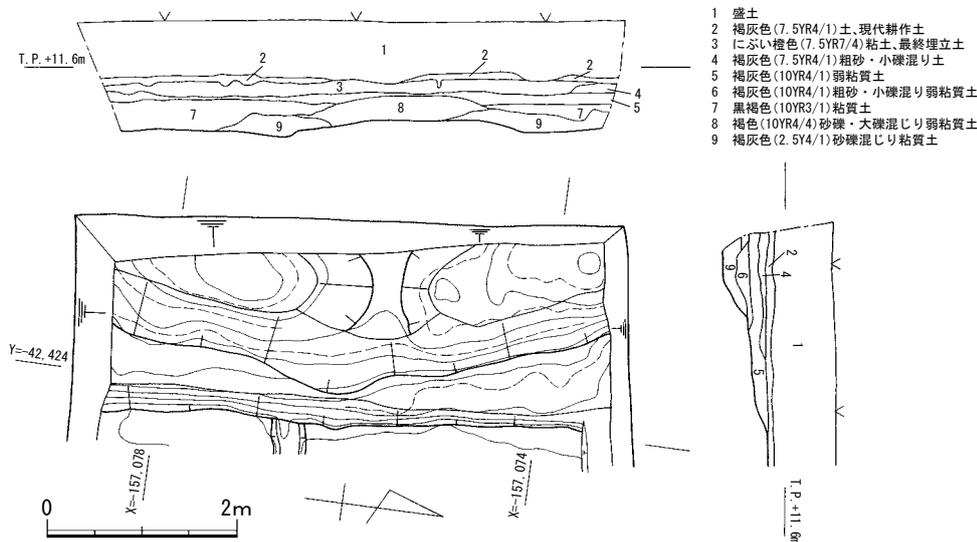
第25図 掘立柱建物9・10、溝7001
出土遺物実測図

掘立柱建物10 (第6図) 掘立柱建物9と重複・先行する掘立柱建物と考えられ、柱穴7021・7022 (南側柱列) からなる。

いずれの柱穴も掘立柱建物9の柱穴に一部を破壊される。両者の間隔は1.8mで、梁行2間とすると東隅柱は掘立柱建物9の柱穴7013と完全に重複することになる。北調査区外にのびる南北棟建物と考えておきたい。主軸方位はN-10°-W。柱掘方の規模は、柱穴7021は平面43×35cmの長方形で深さ5cm、柱穴7022は平面25cm四方の方形で深さ2cmである。埋土は褐色粘質土である。柱穴7021埋土から、土師器皿が出土した。

出土遺物（第25図） 70は柱穴7021の柱痕跡埋土から出土した土師器の皿である。口縁部内面は強いヨコナデによりくぼむ。精良な胎土で、明褐色を呈する。

掘立柱建物11（第6図） 柱穴7024・7029・C区柱穴3015・3016と土坑7028および現代井戸によって消失した柱穴2からなる掘立柱建物と考えられる。東・西・南に対応する柱穴がないので、北調査区外にのびる南北棟建物と考えておきたい。柱間隔は2.2mで、主軸方位はN-4°-W。柱掘方の規模は直径22×30cm程度の円形である。出土遺物なし。



第26図 G区溝7001平面・断面図

溝7001（第26図）

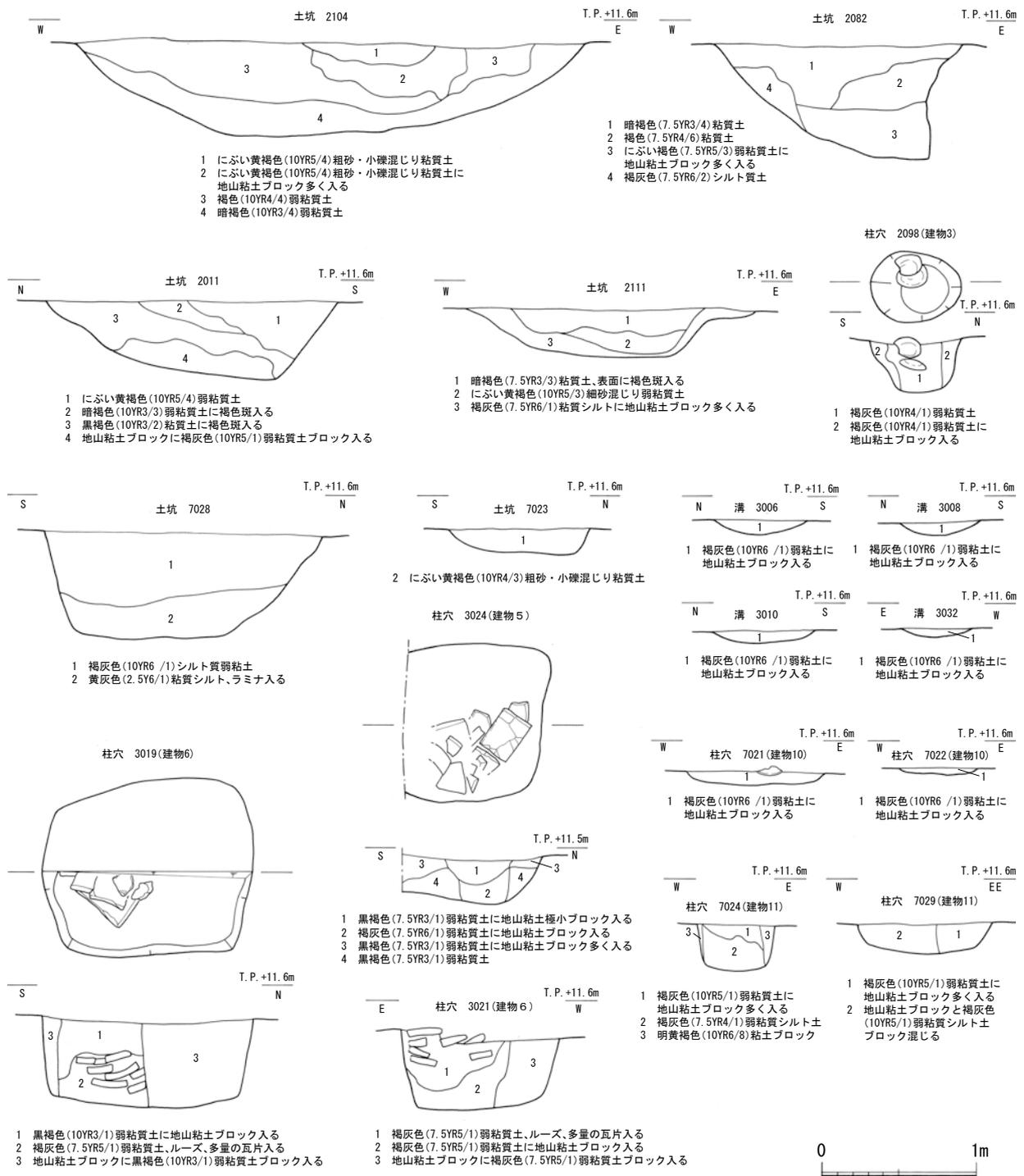
我堂の集落内の道路に平行する溝の東側を確認したものである。西側はD区の近世溝4001が対応する。方位はN-5°-W。埋土上部に多数の近世遺物が含まれているが、埋土下部では少量の中世以前の遺物のみとなり

数段階の堆積と考えられた。また渡り土手状の盛土も確認できた。層位ごとの遺物の出土状況は、上層（3～6層）では多数の近世以降の陶磁器や土器・瓦、中層（7層）では少数の中世以前の遺物と近世の瓦や焙烙等の土器、下層（8層）では瓦1、瓦器3、最下層（9層）では凸面縄叩き、凹面コビキ痕・布目の瓦3が出土した。

以下の3段階の変遷が確認できる。①段階：地山まで掘削した段階。地山を削り出して東西方向の渡り土手状に成形する。9層が埋土である。②段階：前段階の土手状の直上に盛土し、より大型の土手とする段階。中世の盛土と考えられる。③段階：溝を東に拡張させる段階。近世の溝であり3～7層はその埋土である。渡り土手状高まりは屋敷地周囲の溝をまたぐ出入口と想定しておきたい。溝底は西に向かって浅くなり小規模な溝である。なお①段階の溝は、9層出土遺物から平安時代に位置付け、溝2001に対応する屋敷地の区画溝と想定しておきたい。

出土遺物（第25図） 71は8層から出土した瓦器碗である。3cmの破片のため口径は不正確。内面ヘラミガキ、外面は摩滅により調整不明である。なお図示していないが、9層から凸面縄叩き、凹面コビキ痕・布目の瓦が3点出土している。

第3章 調査結果



第27図 B～G区その他遺構平面・断面図

その他の遺構（第6・27図） 上記以外で、その他の土坑、柱穴、溝等の遺構・遺物を報告する。

土坑2082（第27図） B区の井戸2130と重複、先行する長楕円形の土坑である。規模は長さ2.4m、幅0.9m、深さ0.4程度。断面形態は逆台形で、東側が急角度、西側が緩やかに傾斜する。井戸2130との関連の有無、遺構の性格は不明である。出土遺物なし。

土坑2104（第27図） B区で掘立柱建物3の柱穴2102と重複、先行する土坑である。調査区北壁に接して確認した土坑であり、調査終了直前に北半の状況を確認している。平面形態は、北東―南西に主軸を

持つ長楕円形で、規模は長さ約2.5m、幅1.0m、深さ0.3mで、断面形態は皿形である。埋土は下層が自然堆積で暗褐色・褐色弱粘質土、上層は地山起源の黄色粘土ブロックの入る人為の埋立て土である。図示し得ないが、土師器皿の細片が出土している。

土坑2011 (第27図) B区東部で確認した東西に主軸を持つ長楕円形の土坑である。規模は長さ3.1m、最大幅1.0m、深さ0.25mで、断面形態は逆台形で、南側がやや急角度、北側が緩やかに傾斜する。埋土は下層が地山崩壊土と自然堆積の黒褐色粘質土、上層は地山起源の黄色粘土小ブロックの入る人為の埋立て土である。出土遺物なし。

土坑2111 (第27図) B区西部で確認した楕円形の土坑である。規模は長さ0.95m、最大幅0.62m、深さ0.15m、断面形態は浅い皿形である。埋土は1・2層が褐色粘質土、3層が地山粘土ブロックの多く入る粘質シルトで、自然発生的な土坑と考えられる。土師器が出土するも時期不明である。

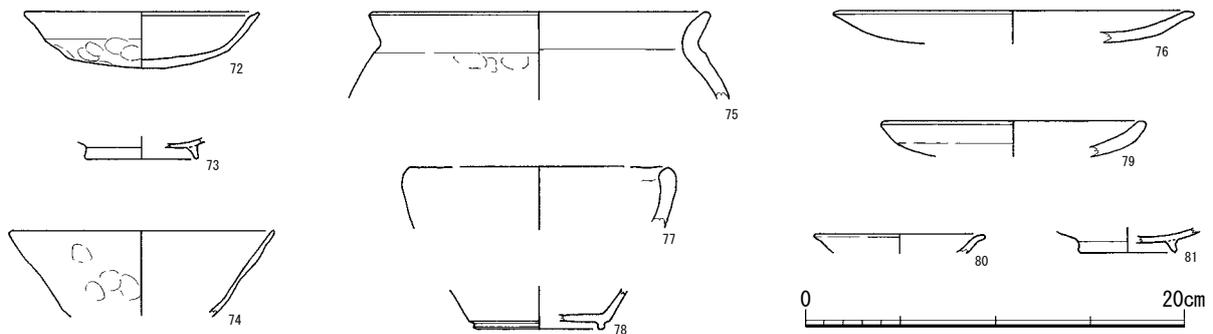
溝3006・3008・3009・3010・3011・3013・3032 (第27図) 掘立柱建物6の柱穴と重複する東西、南北方向の溝群で、溝3008と3010は柱穴より新しい。方位は南北がN-10°-Wである。規模は、溝3010が幅55cmとやや大きく、他が幅20~30cm程度、深さはいずれも2~5cm程度の浅い溝である。埋土は褐色灰色弱粘質土であり、地山面に耕具刃先痕が確認できる。溝3010埋土から瓦器碗が出土しており、中世以降の耕作に伴うと考えられる。

出土遺物 (第28図) 79・80は溝3008から出土した土師器の皿である。79は口縁部ヨコナデにより端部を丸くする。80は口縁端部を水平方向に引き出し尖らせる。砂粒を含まない精良な胎土で、橙色を呈する。81は溝3010出土の瓦器碗である。高台は径5.0cm、摩滅のため調整不明である。

土坑7023 (第27図) 掘立柱建物9の東で確認した東西方向の溝である。規模は長さ2.6m、幅0.5m、深さ9cm程度の浅い溝で、埋土は粗砂・小礫の混じる粘質土である。埋土から瓦器が出土しており、中世以降の遺構であるが、性格は不明である。なお埋土を除去した段階で、底面に11cm×9cm、深さ12cmの木杭先痕と考えられる穴が確認できた。杭孔の埋土は黄灰色粘質土である。

土坑7028 (第27図) G区東壁に接する不定形な土坑である。C区までのびない。規模は長さ2.8m以上、最大幅1.1mで、断面形態は逆台形で、南側が急角度、北側がやや緩やかに傾斜する。埋土は上層がシルト質弱粘土、下層がラミナを形成する粘質シルトである。底面の掘削途中で、樹木根に由来すると考えられる穴を複数確認しており、自然発生的な土坑と考えられる。出土遺物なし。

ピット7019・7025 (第6図) 両者は、掘立柱建物9を挟んで、同じ位置関係にある。いずれのピットも掘立柱建物の柱間中央から東と西に1.9mの位置にある。ピット7019は平面23×25cmの方形、深さ



第28図 その他遺構出土遺物実測図

第3章 調査結果

18cm。埋土は褐灰色粘質シルト土。ピット7025は平面28×24cmの隅丸方形、深さ10cm。埋土は褐灰色弱粘質シルト土。いずれも平面は方形気味で、柱痕の確認できないシルト土が埋土である。掘立柱建物9と何らかの関連を有すると推定できるが、詳細は不明である。出土遺物なし。

その他の遺構出土遺物（第28図） 72は柱穴2006埋土から出土した土師器の皿である。口縁端部内面は若干くぼむ。摩滅のため調整不明。73は柱穴2022埋土から出土した黒色土器の椀である。内面黒色のA類で、器壁は厚さ2mmと薄い。見込みはヘラミガキである。74は柱穴2028埋土から出土した土師器の製塩土器と考えられる。外面は指頭痕、内外面ナデである。外面は浅黄橙色を呈し、部分的にピンクに変色する。器壁は厚さ2～3mmと薄い。75は柱穴2055から出土した土師器の甕である。口縁部の強いヨコナデにより屈曲部がくぼむ。体部は摩滅のため調整不明。76は柱穴2048から出土した土師器の皿であり、高台が付くと考えられる。口縁端部は水平方向に引き出し尖らせる。体部は内面ナデ、外面は調整不明である。77・78は落込み2129から出土した。77は土師器の製塩土器である。浅黄橙色を呈し、1～2mmの粗砂を著しく含む。78は須恵器の杯である。回転ナデである。

第4節 D～F区の調査結果

我堂村内の東部を南北に走る道路より西の調査区である。調査区の規模は、Y＝－43,430～－43,474の間、東西長44m×南北幅5.0～5.5mである。

（1）遺構と遺物

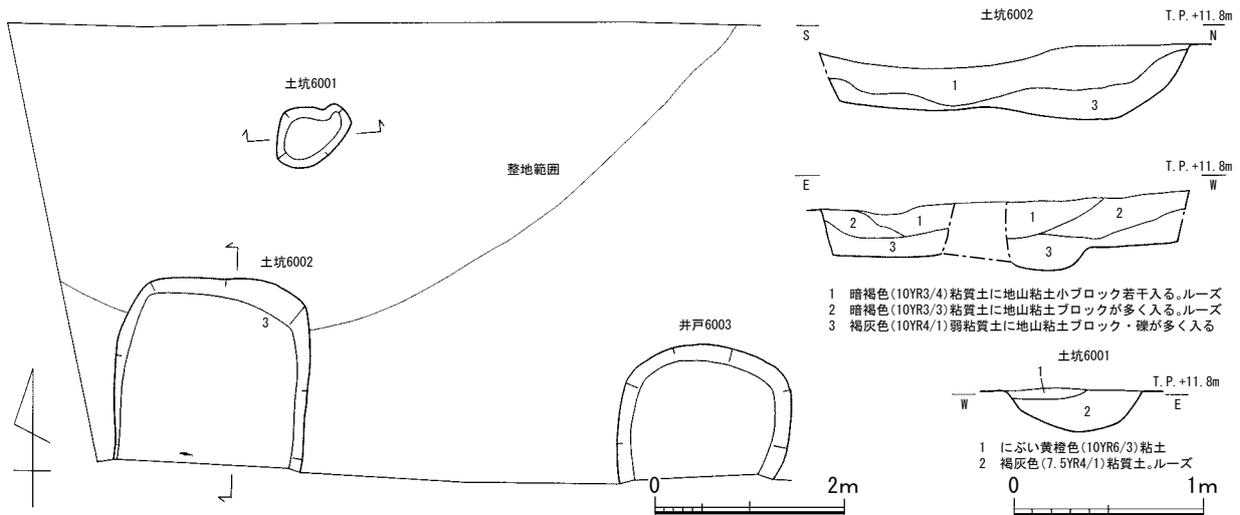
D区の遺構の多くは近世遺構であり、D－E区間で確認した中世の濠5001より西で濃密な中世の遺構・遺物が確認できる。またF区西半では、中世遺構面の直上に瓦・瓦器を含む整地土が確認でき、その上面から掘り込まれた中世後期の遺構が存在する。これを上面遺構として報告する。なお濠5001より西の範囲は、府道堺港大堀線を挟んで、現在の我堂八幡宮の範囲と対面する。

D区、近世以降の土坑・溝（第29図） D区東部4mの範囲で確認した土坑と溝の多くは近世以降に位置付けられる。また調査区南辺に沿う東西溝も近世である。土坑4008・4011・4012・4013、溝4001・4009・4010・4014、ピット4006からは、近世以降の瓦や陶磁器等が出土した。また、溝4007は重複関係から近世土坑4008より新しく、溝4015・4016は埋土が他の近世溝に類似することから近世以降に位置付けられる。なおD区東部での中世以前の遺構は、柱穴4002であり、4003～4005は出土遺物がなく時期は不明である。

上面遺構（第30図） F区の中世遺構面は、北西方向に低くなっており、その範囲の中世遺構面の直上に瓦・瓦器・土師器等を多量に含む土層が確認でき、整地土と考えられる。その上面で、土坑2、井戸1を確認しており、また北・西壁の断面観察によって井戸や柱穴等の遺構も確認できる。今回の調査において、複数の遺構面が確認できたのはF区のみである。これらの遺構の出土遺物には、瓦質土器が含まれており、中世後期に位置付けられる。

土坑6001（第30図） F区中央北寄りで確認した楕円形土坑である。規模は長1.65m、短1.4m程度、深さ0.45mである。埋土は2層で、1が黄色粘土、2が締りのない褐灰色粘質土である。出土遺物には、多数の瓦片と土師器・瓦器の他、瓦質土器破片1点が含まれる。

土坑6002（第30図） F区南西隅で確認した大型の長方形土坑であり、南は調査範囲外にのびる。規模

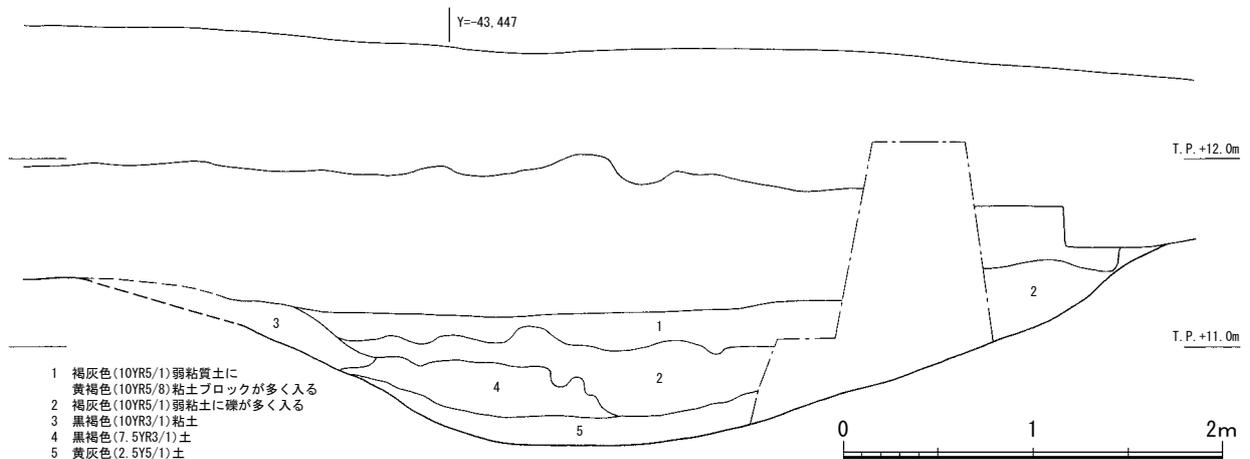


第30図 F区上面遺構平面・断面図

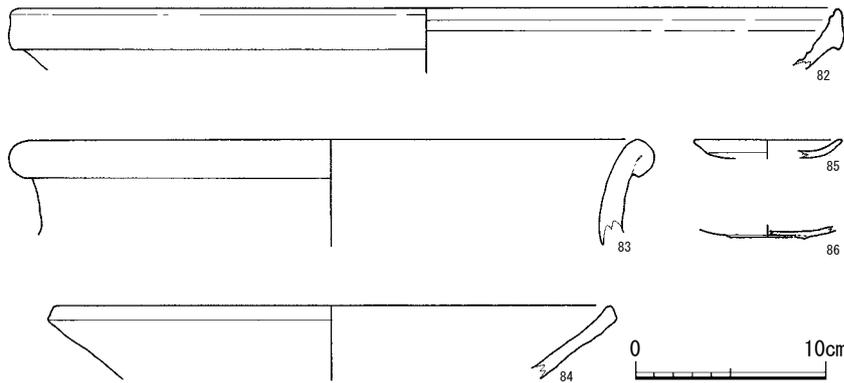
は東西幅2.05 m、南北長2.0 m以上である。南北方向の埋土堆積状況では、北端から1.25 m南のあたりで最深のレンズ状を呈するので、南北長2.5 m程度の土坑の可能性はある。土坑内部は、中央部を南北方向に浅く溝状にくぼませる二段掘りとなる。一段目が深さ30cm程度、中央部南北の幅50cm程を深さ40cm程度に掘削する。埋土は3層の褐色粘質土であり、地山起源の黄色粘土ブロックを含む。出土遺物には、多数の瓦片と土師器・瓦器の他、瓦質焼成の叩き甕体部破片1点が含まれる。

井戸6003 (第30図) F区とE-F区境界の南端で確認した土坑であり、南は調査範囲外にのびる。車道に接しており上層部のみの掘削にとどまる。ピンポールでも底には到達せず、井戸の可能性が高い。規模は1.8m程度の隅丸方形である。出土遺物には、瓦質焼成の播鉢1点 (第43図171) が含まれる。

濠5001 (第29・31図) D-E区間で確認した南北方向の溝である。本遺構は、E・F区で確認できる同時期の居住域を囲む可能性が高く、「濠」として報告する。この濠を境に、E区では現代の削平が深くおよび状況であり、遺構検出面の西が低くなる。なお遺構の調査は、濠の中央部を斜行するガス管部を掘り残し、また壁面の崩壊を避けるため、遺構中央の幅2.4mのみで行った。方位はN-5°-W。断面形態は浅いU字形で、東側斜面がいくぶん緩やかになる。規模は幅5.6 m、深さ1.05 mであるが、現



第31図 D-E区濠5001断面図

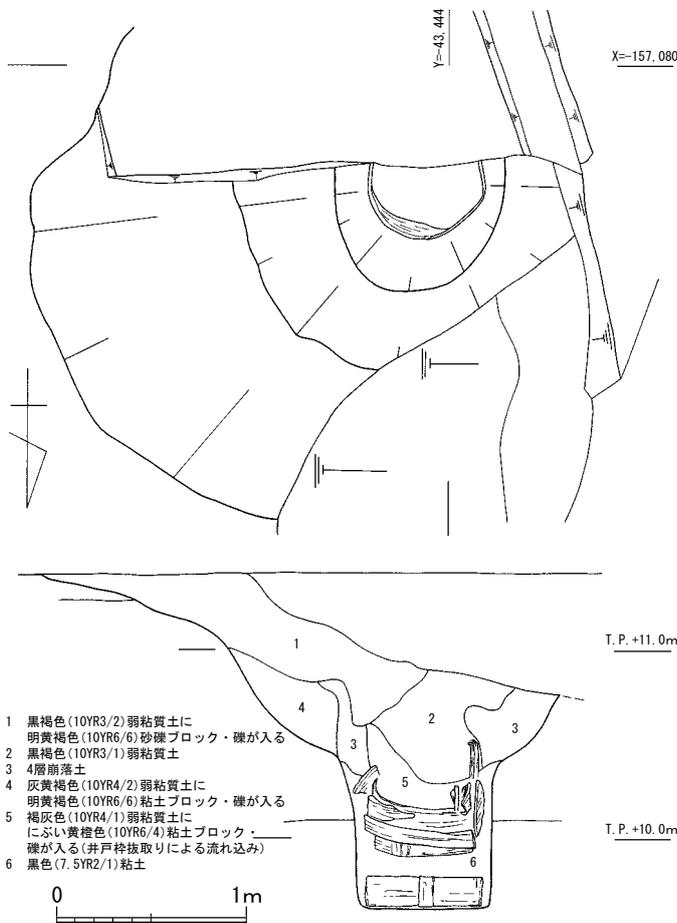


第32図 濠5001出土遺物実測図

代の削平がなければ幅6.0 m程度に復元できる。地山下部の礫層を40cm程度掘削しており、湧水がある。埋土は下半(3~5層)に自然堆積の粘土・粘質土、中層(2層)には多くの礫・粘土ブロックを含む粘土、上層(1層)は粘土ブロッ

クを主体にする埋立てと考えられる。層序は確定出来ないが、埋土下半から遺物が出土しており、14世紀前半の備前焼の壺83を含む。

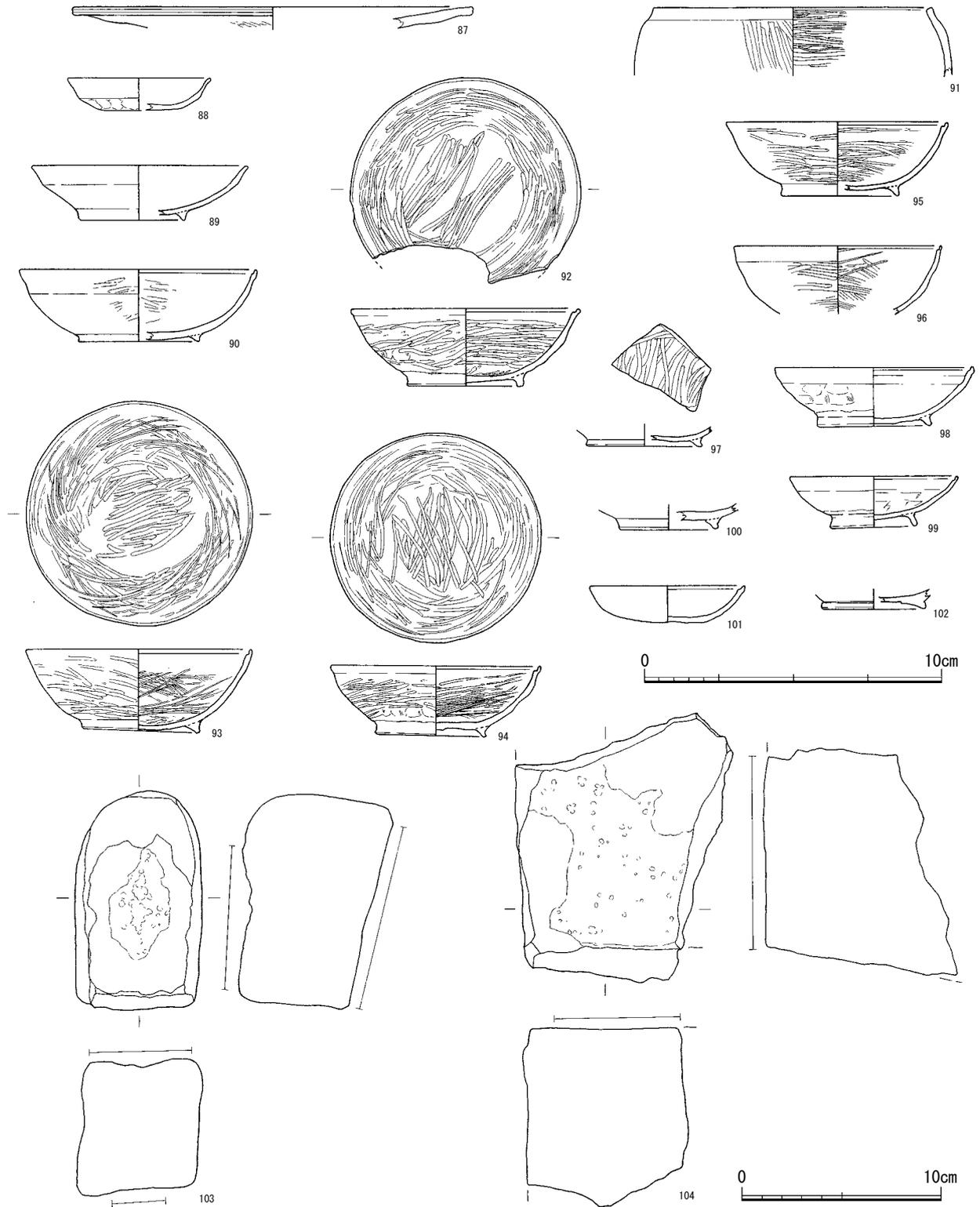
出土遺物(第32図) 82・84は東播系須恵器の捏ね針である。82は全面に自然釉が付着する。大型品であるが、9cm弱の破片であり口径は不正確。84は内外面横ナデ。6cm弱の破片であり口径は不正確。83は備前の壺である。頸部は外反し、口縁端部は外に折り曲げて丸い玉縁状の突帯にする。茶褐色を呈する。85・86は瓦器の小皿と椀である。85はナデ仕上げ。86は内面に渦巻き状ヘラミガキの一部が確認出来る。高台は直径2cm程度に復元できるが、全周しない。細い粘土紐を巡らせ、表面を指腹で挟んで擦り付けた雑な仕上げである。



第33図 D-E区井戸4019平面・断面図

井戸4019(第33図) D-E区間で、濠5001に破壊される状況で確認した。井戸の西半はガス管のため、また南半車道側は崩壊の危険があるため掘削し得ていない。平面図をもとに復元すると、掘方は直径4.0~4.2m程度の円形を呈する井戸で、検出面から1.8mの深度まで掘り込まれる。まず浅い皿状に掘削し、次に深くすり鉢状に掘削し、最後に湧水のある粗砂を急角度で掘削した段階で、曲げ物4段を設置し裏込めを行う。曲げ物はT. P.+10.6m以下で4段を確認しており、曲げ物の高さは16~22cm程度である。4層は裏込め土で、地山粘土ブロックを多く含む。なお曲げ物内の井戸底で黒色土器と土師器がまとも出土しており、祭祀行為によると思われる。

出土遺物(第34図) 87・88と104は井戸枠の裏込め土(3層)、89・90は上層(1層)、その他は中・下層(2・4・5層)から出土し



第34図 井戸4019出土遺物実測図

た。なおほとんどが完存する92・94・98・99・101は、井戸底において集中的に出土しており、人為的に入れられたと考えられる。

87は土師器の高杯である。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラミガキである。他遺物よりも古く混入品と考えられる。88は土師器の坏である。口縁部は指頭痕とヨコナデにより二段になる。89は土師器

第3章 調査結果

の椀である。口縁部ヨコナデ、体部は摩滅のため調整不明である。90は黒色土器の椀で、内面黒色A類である。摩滅が著しく、体部内外面にわずかに横方向ヘラミガキが残存する。

91は黒色土器A類の鉢である。口縁部外面ヨコナデ、口縁端面と内面は密な横方向ヘラミガキ、体部外面は縦方向ヘラミガキを施す。

92～97は黒色土器A類の椀である。これらはほぼ同様の特徴が見られるので、92でやや詳しく記述する。92の法量は口径15.4cm、器高5.2cm、高台径7.8cmである。口縁外面端部はわずかに丸く肥厚させ、内面端部に段状を形成する。体部内面はナデ調整の後、四分割の水平方向ヘラミガキ、見込みに平行線状のヘラミガキを施す。体部外面はヘラケズリの後、横方向ヘラミガキを施す。なお体部外面下半には指頭圧痕が巡り、またわずかに型作りによる二条単位の下駄歯状盛り上がりがある。底部外面は軽いナデである。高台は大きく厚い。色調は黄灰色を呈し、胎土は精良で、微細砂粒を含む。なお本個体のみ口縁部が欠損するが、破面は新しく調査中の破損と考えられる。

93は体部内面に右斜上方へのヘラミガキを施す以外、法量・成形・調整は92とほとんど同様である。ただ色調は、にぶい橙色を呈し、胎土に雲母、赤色斑を含む点が異なる。94の法量はやや小型で口径14.2cm、器高4.8cm、高台径7.5cmである。見込みに斜格子状のヘラミガキを施す以外、成形・調整は同様である。なお体部外面下半の指頭圧痕と二条単位の下駄歯状盛り上がりは明瞭である。

95・96は破片の図上復元である。92と法量・成形・調整、胎土・色調ともにほとんど同様に復元できる。95は見込みに平行線状のヘラミガキを施す。96は93と同様に体部内面に右斜上方へのヘラミガキを施す。97は高台部の破片で、高台径7.8cmである。見込みに平行線状あるいはジグザグのヘラミガキ、底部外面は軽いナデである。

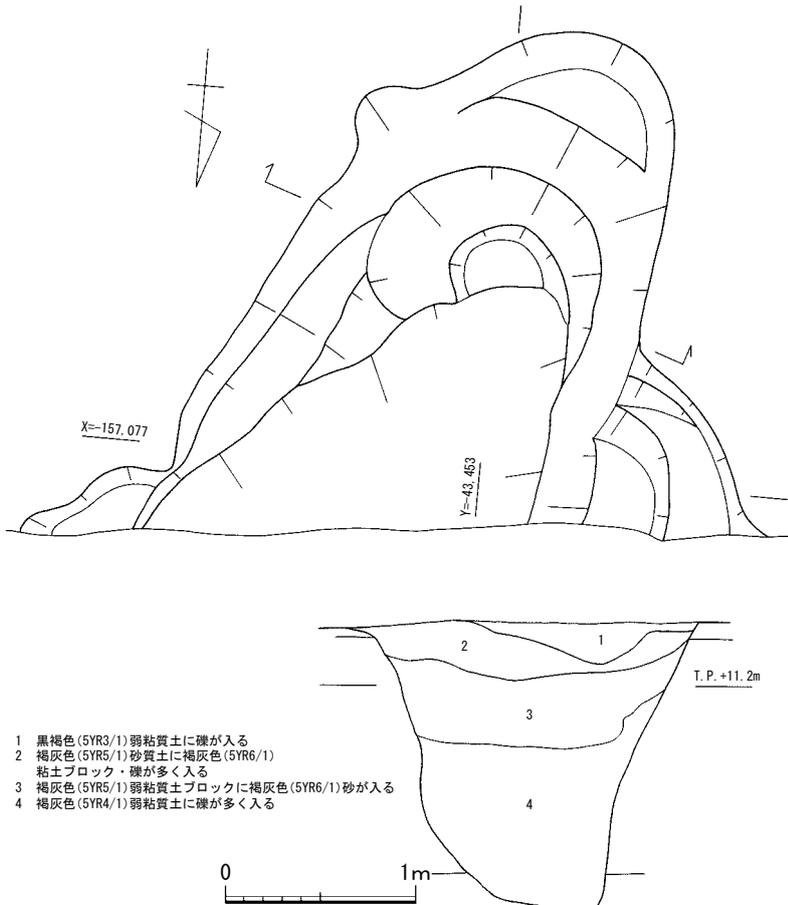
98～100は土師器の椀である。98の法量は口径13.2cm、器高4.0cm、高台径7.6cmである。口縁外面端部はわずかに丸く肥厚させ、内面端部に段を形成する。口縁部ヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面は指頭圧痕と、二条単位の下駄歯状盛り上がりがある。高台は大きく厚い。底部外面は軽いナデである。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に雲母、赤色斑を含む。99の法量は口径11.2cm、器高3.5cm、高台径5.8cmである。高台の形態以外、成形・調整・胎土・色調は98と同じである。以上のように、98・99は成形・調整において、体部内外面のヘラミガキと体部外面のヘラケズリを施さない以外は黒色土器と同様であり、特に口縁端部の状況は酷似することが特徴的である。

101は土師器の皿である。法量は口径10.3cm、器高2.5cmである。成形・調整・胎土・色調は椀98・99と同じである。

102は硬質焼成の緑釉陶器である。蛇の目高台であり、底面以外に施釉される。9世紀中頃の平安京近郊窯産と考えられ、混入品であろう。

103は肌理の細かい砂岩製で、上面と下面に磨面があり、さらに上面中央部に敲打痕がある。完存品であり、上面の磨面が主要面である。全面に薄く煤が付着する。重量0.90kg。104は安山岩製の磨面を持つ石材の破損品である。図面上面が磨面、手前面と左側面が本来の平坦面、それ以外は破損面である。殊に左側面の表面は細かなアバタ状の敲打痕があり、平坦に加工した痕跡が確認できる。また破損面以外に薄く煤が付着する。何らかの構造物の石材と考えておきたい。重量1.80kg。

井戸 5005 (第35図) E区北壁部で確認した不定形な大型土坑であり、井戸と考えられる。東北―南西



第35図 E区井戸5005平面・断面図

- 1 黒褐色(5YR3/1)弱粘質土に礫が入る
- 2 褐灰色(5YR5/1)砂質土に褐灰色(5YR6/1)粘土ブロック・礫が多く入る
- 3 褐灰色(5YR5/1)弱粘質土ブロックに褐灰色(5YR6/1)砂が入る
- 4 褐灰色(5YR4/1)弱粘質土に礫が多く入る

に主軸を持つ土坑で規模は長軸3.5 m以上である。調査区内は平面規模の半分程度と考えられる。二段に掘削されており、断面は一段目である。一段目以下で湧水が多くなる。壁際はピンポールにより80cm以上は深くなる事を確認している。2・3層は、粘土ブロックからなる最終的な埋立て土であり、4層には多くの礫が入る。なお2層下半～4層上半には、瓦器を主体にした遺物を多量に含んでおり、これらの遺物は中層として取り上げた。4層下半からの遺物は少ない。

出土遺物 (第36・37図) 最終的な埋立て土から、多量の遺物が出土している。

105～109は土師器の小皿である。

107のみ色調は橙色を呈し、底部に

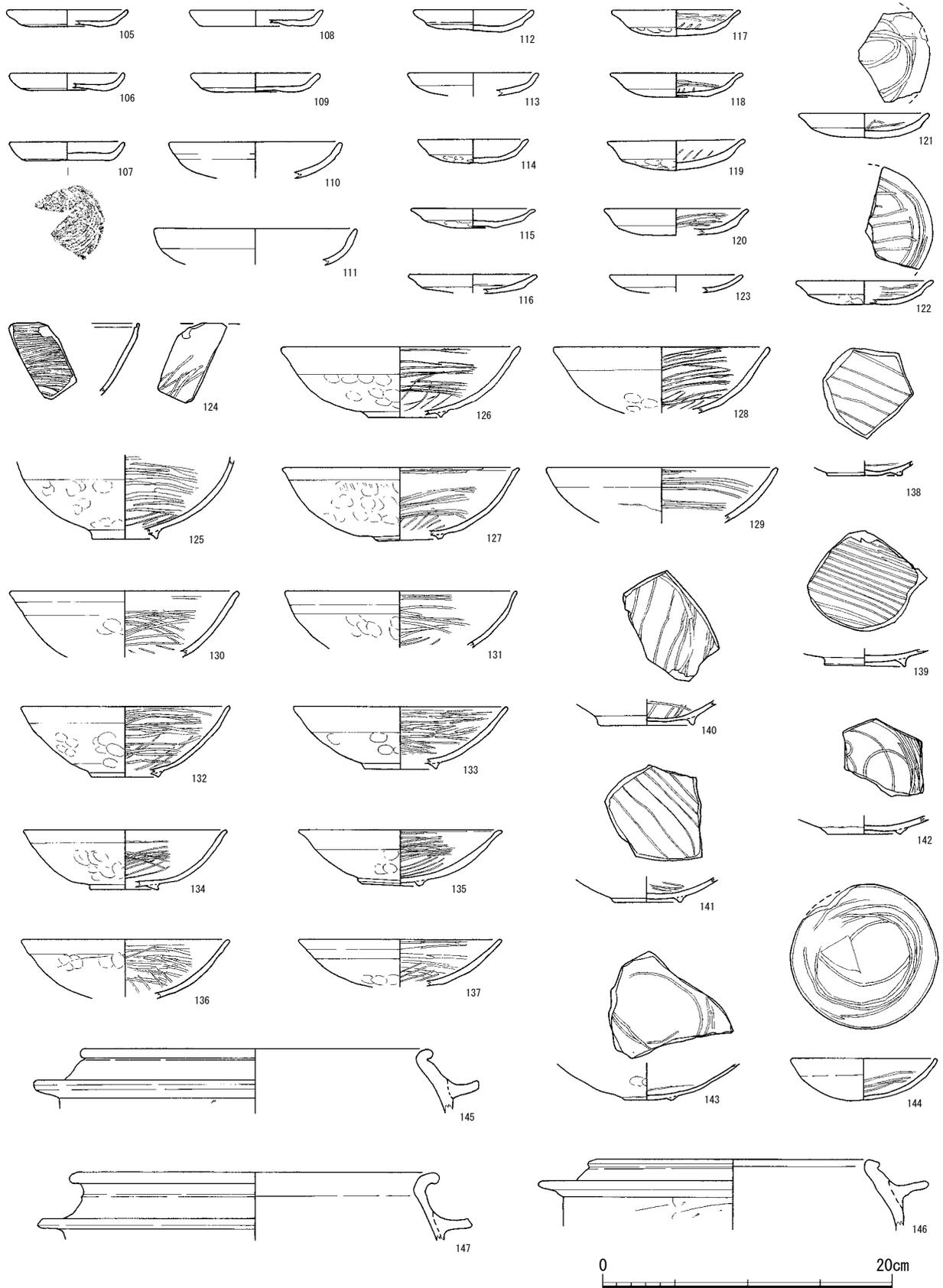
回転糸切り痕が残る。他は黄灰色～灰白色を呈し、口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面は成形段階の指頭痕と指ナデである。110・111は土師器の皿である。いずれも口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデである。110の色調は浅黄色を呈し、胎土は精良である。

112～123は瓦器の小皿である。口縁部はヨコナデにより外反させ、体部との境が明瞭であるものが一般的だが、123のみ境を持たず体部から口縁部にいたる。いずれも体部内面ナデ、外面は成形段階の指頭痕と指ナデである。その後、口縁内面に圏線ヘラミガキを数条巡らせ、見込みに平行線状の暗文4～6条施すもの(117、118、119、122)、らせん状の暗文を施すもの(121)の他、内面にヘラミガキを施さないもの(112、113、114、115、116、123)がある。

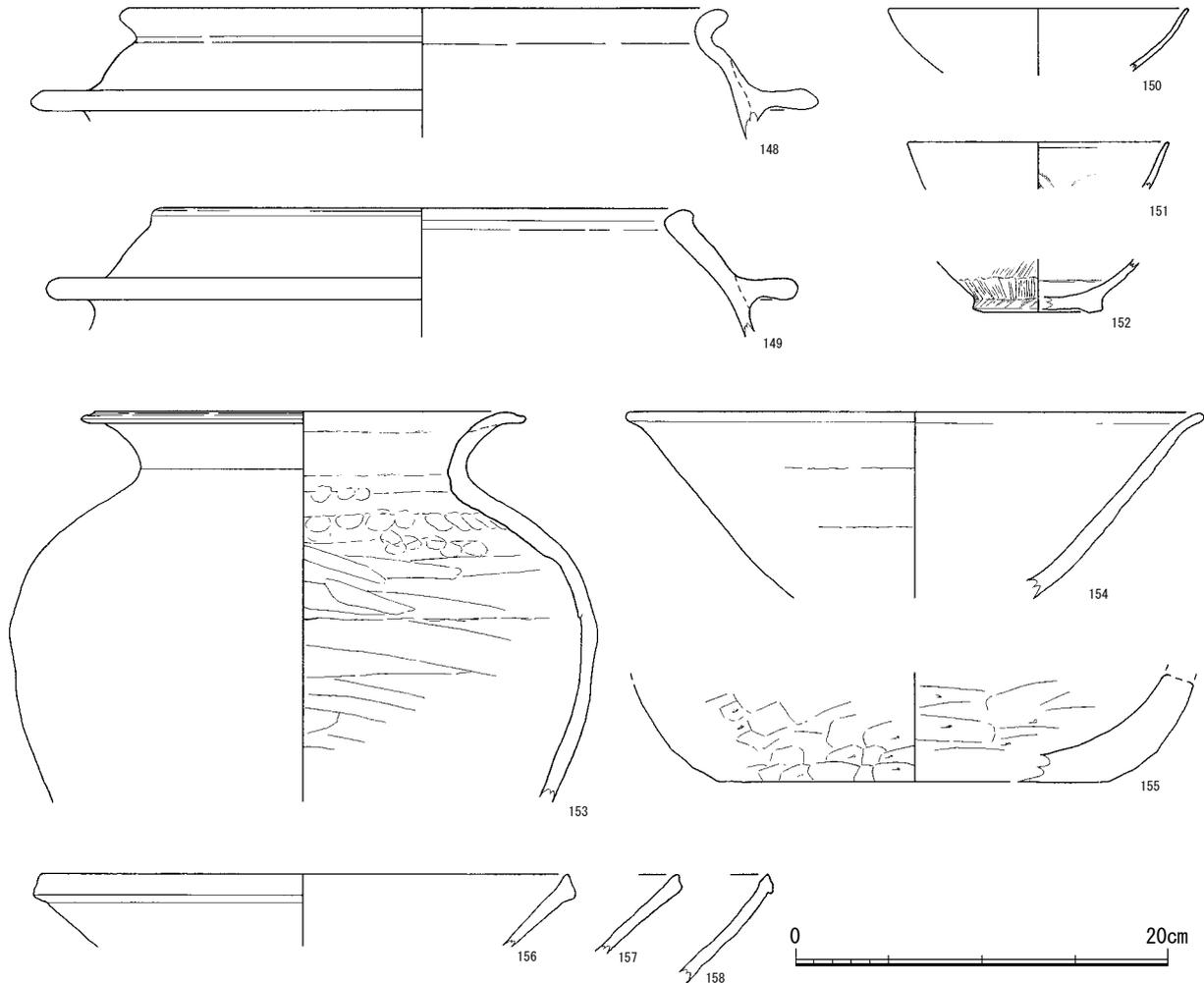
124～144は瓦器の椀である。124は大和型の瓦器椀。口縁部は若干外反させ、外面端部はわずかに丸く肥厚させる。内面端部を段状にする。体部内面は平行で密に圏線ヘラミガキを施す。ヘラミガキの幅は1mm程度。体部外面はナデで、下半に右斜上方のヘラミガキを施す。胎土は白色で精良である。

125～137は全形のわかる瓦器の椀である。器高は、高いものから低いものまでばらつきある。口縁部はヨコナデにより端部は丸くおさめるものが多いが、127・135は口縁端部に内傾する面をもつ。高台は先端の尖る断面三角形が一般的だが、127・135は逆台形である。体部内面の圏線ヘラミガキは、隙間があり疎に施すものが目立つ。また見込みの暗文は、129が不明である以外、すべてに平行線状の暗文(125～128、130～137)を施す。平行線状の暗文は、密に施すものから疎に施すものがあるが、圏線ヘラミガキの幅に関係なく、暗文の幅は1～2mmである。外面ヘラミガキは皆無。

第3章 調査結果



第36図 井戸5005出土遺物実測図1



第37図 井戸5005出土遺物実測図2

138～141は見込みに平行線状の暗文を施す瓦器碗の底部である。139の高台は先の尖った断面三角形で、外方に張り出すものである。暗文も例外的で平行線状の暗文14条を密に施す。138・140・141は一般的なもので平行線状の暗文5～6条を疎に施す。

142は高台が形骸化に向かうものである。体部内面ナデ、外面は指頭痕・指ナデである。高台は直径5.0cm、高さ3mmの断面三角形である。体部内面に圈線ヘラミガキ、見込みに連結輪状の暗文を施す。143は高台がさらに形骸化したものである。高台は直径3.0～3.6cm、高さ2mmの断面三角形で全周しない。暗文は見込みから体部に渦巻き状に施す。144は高台の消失した段階の瓦器碗で、本遺構では唯一である。法量は口径10.0cm、器高2.9cm。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデである。暗文は見込みから体部に渦巻き状に施す。

145～149は土師器の羽釜である。145が3～4層上部、他が4層上部から出土した。法量は、口径20～24cmの中型(145～147)と、30cm前後の大型(148・149)がある。形態は口縁端部を短く折り返すもの(145・146)、口縁部を屈曲させるもの(147・148)、口縁端部を外方に肥厚し面を持つもの(149)がある。体部外面の調整は、145・146が横方向のヘラケズリ、149がナデである。

150～152は磁器碗である。150は磁器の碗であるが、詳細は不明である。口径15.8cm、浅黄色を呈する。口縁端部近くに釉が溜まり、伏せ焼きであることがわかる。151は中国産の青磁碗である。中世後期に

第3章 調査結果

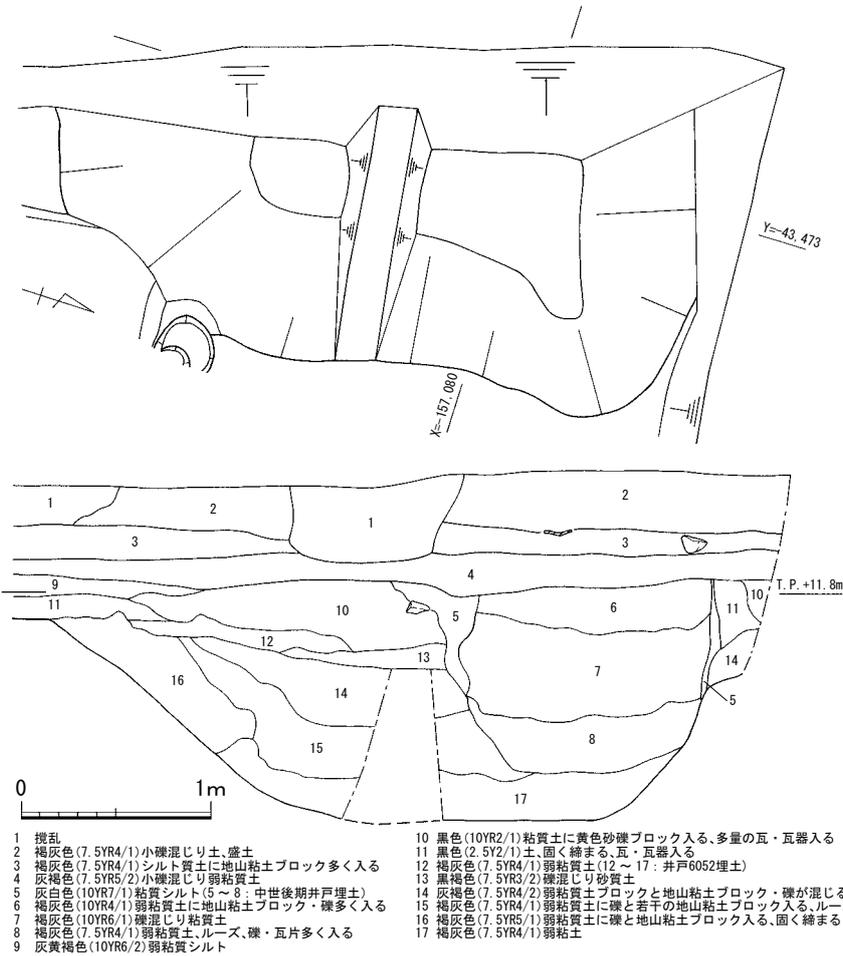
位置付けられる。152は中国産の白磁碗である。185と同様に口縁部外面を玉縁状にする碗であろう。底径7.0cm。見込み周囲に沈線が巡る。外面は二段のケズリ痕を巡らせる。

153は常滑窯の甕である。体部は倒卵形を呈し、肩部で屈曲させ口縁部は強く外反する。口径24.0cm

体部最大径31.6cmである。口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、肩部内面は成形時の指頭痕が巡り、それ以下は強い工具ナデである。外面は釉が剥がれ、灰白色を呈する。12世紀後半に位置付けられる。

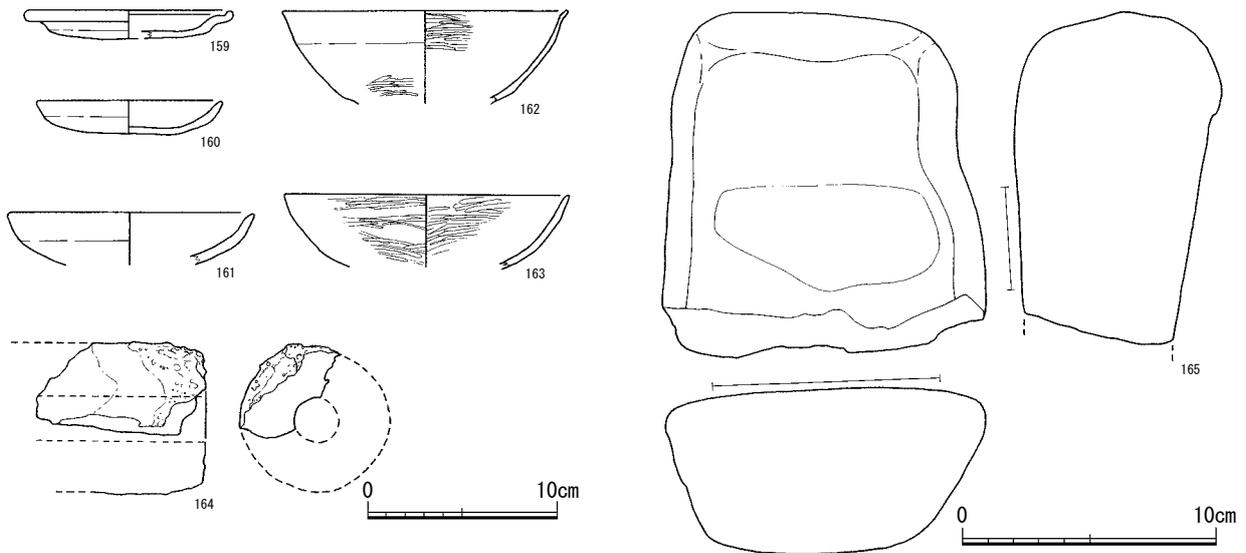
154は陶器の鉢である。内面は平滑に仕上げるが、外面は粘土紐の接合痕跡と条線を残す雑な仕上げである。口縁端部内面に自然釉が付着し、体部にはぶい黄橙色を呈する。

155は瓦質土器の底部であり、浅鉢か盤と考えられる。上端面は接合部ではがれた偽口縁。器壁は非常に厚く、底径21.0cm前後の大型品である。体部外面はヘラケズリの後に若干のナデ、底面はナデ、内面は工具に



- 1 攪乱
- 2 褐灰色(7.5YR4/1)小礫混じり土、盛土
- 3 褐灰色(7.5YR4/1)シルト質土に地山粘土ブロック多く入る
- 4 灰褐色(7.5YR5/2)小礫混じり弱粘質土
- 5 灰白色(10YR7/1)粘質シルト(5~8:中世後期井戸埋土)
- 6 褐灰色(10YR4/1)弱粘質土に地山粘土ブロック・礫多く入る
- 7 褐灰色(10YR6/1)礫混じり粘質土
- 8 褐灰色(7.5YR4/1)弱粘質土、ルース、礫・瓦片多く入る
- 9 灰黄褐色(10YR6/2)弱粘質シルト
- 10 黒色(10YR2/1)粘質土に黄色砂礫ブロック入る、多量の瓦・瓦器入る
- 11 黒色(2.5Y2/1)土、固く締まる、瓦・瓦器入る
- 12 褐灰色(7.5YR4/1)弱粘質土(12~17:井戸6052埋土)
- 13 黒褐色(7.5YR3/2)礫混じり砂質土
- 14 灰褐色(7.5YR4/2)弱粘質土ブロックと地山粘土ブロック・礫が混じる
- 15 褐灰色(7.5YR4/1)弱粘質土に礫と若干の地山粘土ブロック入る、ルース
- 16 褐灰色(7.5YR5/1)弱粘質土に礫と地山粘土ブロック入る、固く締まる
- 17 褐灰色(7.5YR4/1)弱粘土

第38図 F区井戸6052平面・断面図

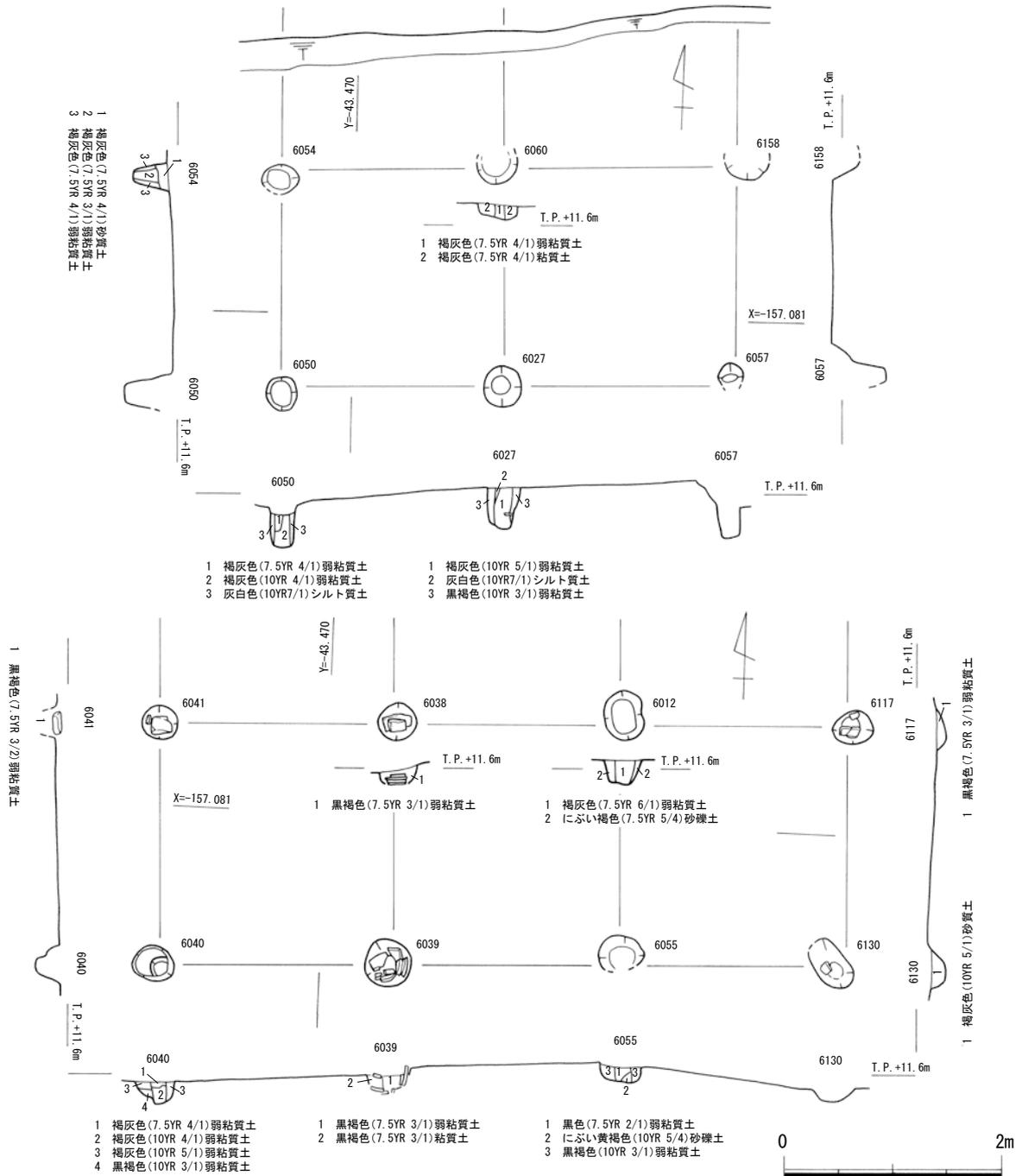


第39図 井戸6052出土遺物実測図

よる雑なナデである。12～13世紀に位置付けられる。

156～158は東播系須恵器の捏ね鉢である。156が1・2層、157・158が4層から出土した。158は体部が内湾し、口縁端部はやや肥厚すると共に下方にやや拡張する。156・157は体部が直線的である。また口縁端部は、156が大きく上下に拡張させ、157は上方に若干拡張させる。

井戸6052 (第38図) F区西端で確認した大型の方形土坑であり、素掘り井戸と考えられる。西側は調査区外にのびる。規模は南北の長さ3.6m程度、深さ1.1mで底は平坦である。埋土は14～16層が粘土ブロックの入る埋立て土、17層が自然堆積の褐灰色弱粘土である。本井戸は整地によって埋められ、その後、整地土上面から重複して新たな井戸が掘削されたことが西壁断面で確認できる。



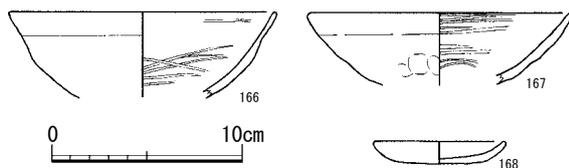
第40図 E-F区掘立柱建物7・8平面・断面図

出土遺物（第39図） 159・160は土師器の小皿、161は皿である。口縁部横ナデ、体部内外面ナデであり、160・161は体部外面に成形時の指頭圧痕を残す。いずれも乳灰色を呈する。159のみ胎土に赤色斑を多く含む。162・163は瓦器の椀である。いずれも体部は深い。162は磨滅により残存状況は悪いが、いずれも内外面とも密にヘラ磨きを施す。164はフイゴ羽口である。形態は円筒形、法量は直径8.0cm、孔径2.4cmである。胎土に多量の初殻を含んでおり脆い。165は中粒砂岩の自然礫を利用した磨石である。上面に磨面があり、底面以外に煤が付着する。なお上面には直径8cm程度の円形に煤が付着しておらず、建物の根石として再利用されたと考えられる。重量2.10kg。

掘立柱建物7（第40図） F区、E-F区で確認した。柱穴6050・6027・6057（南側柱列）、6054・6060・6158（北側柱列）からなる掘立柱建物であるが、北・西側の調査区外にのびる可能性がある。掘立柱建物8とは重複するが先後関係は不明である。建物周辺には柱穴が多数重複しており、他にも数棟の掘立柱建物が想定できる。頻繁に建替えを行ったエリアである。確認したのは1×2間分で、柱間隔は南北2.0m、東西2.1mである。主軸方位はN-2°-W。柱掘方の規模は25~30cmの円形であり、柱痕跡は直径15cm程度である。なお柱穴6054から瓦器椀が出土した。

出土遺物（第41図） 166は柱穴6054から出土した瓦器の椀である。口縁部はヨコナデにより外面がくぼむ。端部は丸くおさめる。体部内面は疎な圏線ヘラミガキ、外面はナデである。

掘立柱建物8（第40図） F区、E-F区で確認した。柱穴6040・6039・6055・6130（南側柱列）、6041・6038・6012・6117（北側柱列）からなる掘立柱建物であるが、北・西側の調査区外にのびる可能性がある。建物は東西に主軸をとると考えられ、確認したのは1×3間分で、柱間隔は南北2.2m、東西2.1mである。主軸方位はN-2°-W。柱掘方の規模は30~40cmの円形であり、柱痕跡は直径15cm程度である。北側柱列の全ての柱穴と南側柱列の柱穴6039で、根石か瓦敷きが確認できた。柱穴6041・6117では根石を据える。根石は平坦面を持ち厚みと重量感のある自然礫である。柱穴6012・6038では平



第41図 掘立柱建物7・8出土遺物実測図

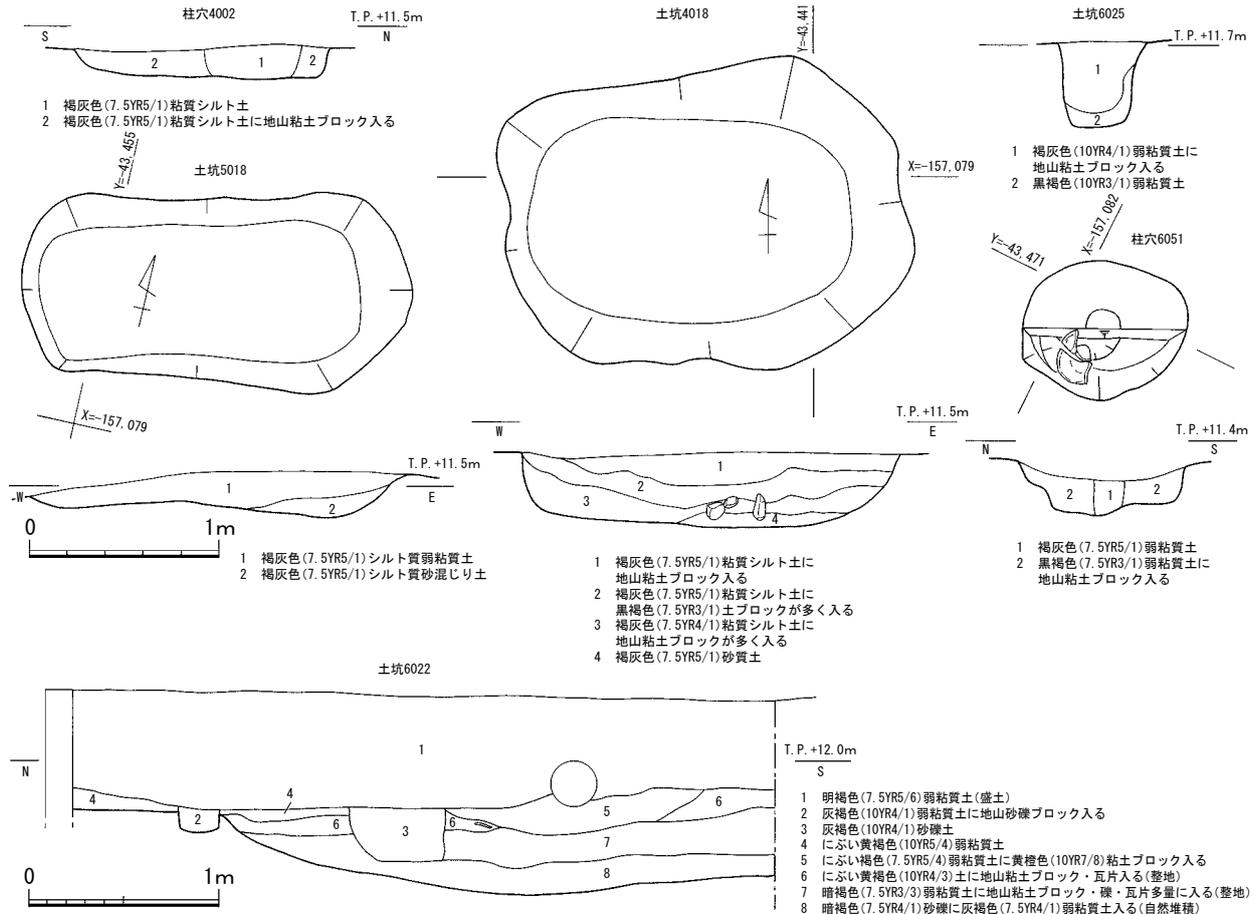
瓦片を敷きその上に柱痕跡が確認できた。前者は1枚、後者は2枚である。また柱穴6039では平瓦片を敷くとともに、柱周囲に平瓦片を差し込む。瓦はいずれも凹面布目、凸面縄目叩きの平瓦片である。なお柱穴6012・6038・6039・6040の埋土から瓦器が出土した。

出土遺物（第41図） 167は柱穴6012から出土した瓦器の椀である。口縁部はヨコナデ、端部は丸くおさめる。体部内面は疎な圏線ヘラミガキ、外面はナデである。168は柱穴6039から出土した土師器の小皿である。色調は浅黄橙色を呈し、口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面は指頭痕が残る。

その他の遺構 上記以外で、その他の土坑、柱穴等の遺構・遺物を報告する。

柱穴4002（第42図） D区北東端で確認した柱穴である。周囲は近世以降の土坑等で破損が著しい。平面形態は70cm四方の方形で深さ10cmが残存した。柱は直径20cm程度である。出土遺物なし。

土坑4018（第42図） 濠5001の東に隣接して確認した土坑である。平面形態は、東西に主軸を持つ隅丸長方形で、規模は長さ約1.1m、幅0.8m、深さ0.2mである。埋土は1~3層が地山起源の黄色粘土ブロック等の入る人為の埋立て土である。出土遺物なし。



第42図 D～F区その他遺構平面・断面図

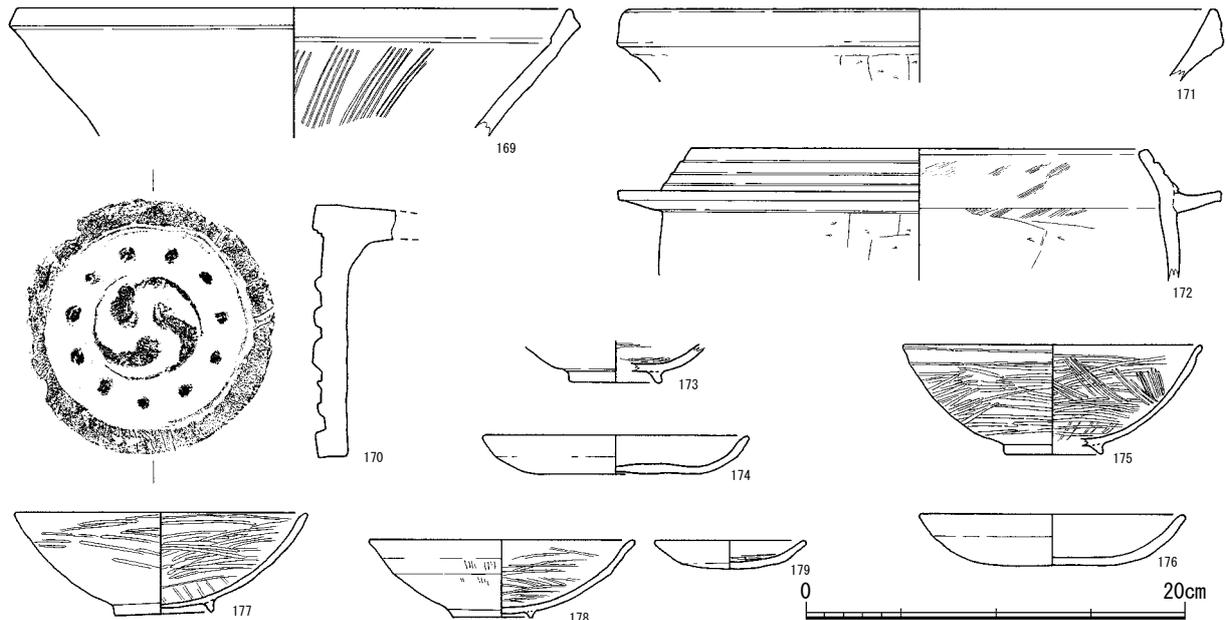
土坑5018 (第42図) 井戸5005の西に隣接して確認した土坑である。平面形態は、ほぼ東西に主軸を持つ楕円形で、規模は長さ約1.0m、幅0.5m、深さ0.1mである。断面形態は浅い皿形で、東側がやや深い。出土遺物なし。

柱穴6051 (第42図) 土坑6002に深く削平された状況で確認した。平面形態は45×35cmの楕円形で深さ10cmが残存した。柱掘方の埋土から瓦器碗が出土した。今回出土した瓦器では古相を示す。

土坑6025 (第42図) F区で確認した土坑である。平面形態は、ほぼ南北に主軸を持つ長方形で、規模は長さ約70cm、幅25cm、深さ23cm程度で急角度に掘り込む。埋土は1層が地山起源の黄色粘土ブロックの入る人為の埋立て土である。瓦器碗、土師器皿が出土している。

土坑6022 (第42図) F区東端からE-F区南半にかけて、大きくくぼんでおり、埋土は中世後半段階の埋立て土である。1層は現代盛土、2・3層は上面の遺構である。5～7層は中世段階の埋立て土で、地山起源の黄色・黄橙色粘土ブロックの混じり礫や土器・瓦片が入る。特に7層には多量の礫・瓦片が入る。8層は褐灰色砂礫に褐灰色弱粘質土の入る自然堆積層である。F区北西部の整地と同様に、一定の自然堆積の段階を示し、一連の整地作業と考えられる。

その他の遺構出土遺物 (第43図) 169はD区東部の近世土坑4010出土の丹波焼きの播鉢である。口縁部内面に段をもち、5条/1.4cmの播り目を巡らせる。17世紀後半に位置付けられる。170はD区東部の近世土坑の密集箇所の機械掘削で出土した軒丸瓦である。中央に右巻き三巴文、周囲に珠文11を巡らせる。胎土に粗砂をやや多く含む。直径13.4cm、焼成はやや軟質である。



第43図 その他遺構出土遺物実測図

171はF区上面遺構の井戸6003から出土した瓦質練り鉢である。5 cm程度の破片のため口径は不正確。口縁端部に幅5 mmの平坦面をもつ。口縁部ヨコナデ、体部外面は横方向のヘラケズリである。14世紀後半に位置付けられる。

172はE区の土坑5029から出土した瓦質羽釜である。口縁端部に幅6 mmの平坦面をもつ。口縁部外面はヨコナデにより4条の段を巡らせる。体部外面は横方向のヘラケズリである。内面は口縁部が右斜上方へのシャープなハケ目の後に強いヨコナデ、体部は左斜上方への板状工具ナデである。15世紀後半に位置付けられる。

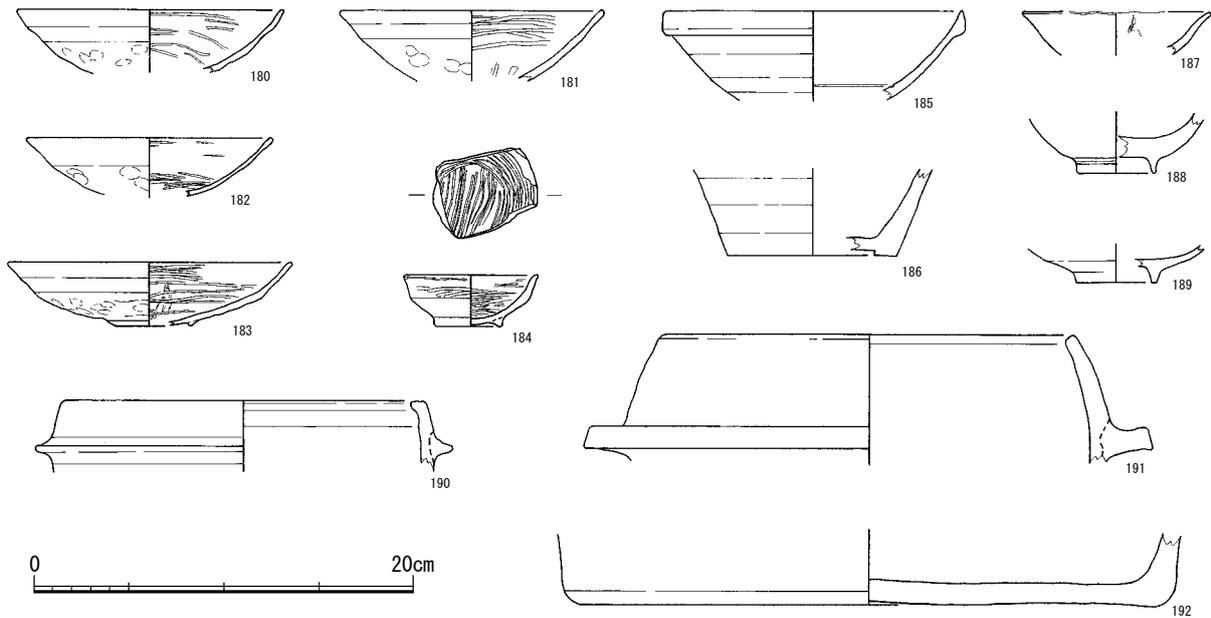
173・174は土坑6022から出土した瓦器碗と土師器皿である。173は小型の瓦器碗である。高台は径4.8cm、高さ0.7cmと安定感がある。体部外面上部と内面はヘラミガキである。174は底面がナデである。他は摩滅のため調整不明。

175・176は土坑6025から出土した瓦器碗と土師器皿である。175は器高5.8cm、口径15.6cmである。口縁部は強いヨコナデにより外反し、端部は丸くおさめる。体部内面は見込みに格子状の暗文の後、右斜上方への密なヘラミガキと左斜上方へのヘラミガキを施す。体部外面は分割ヘラミガキを密に施す。暗文幅2 mm、ヘラミガキ幅1 mm程度である。176は口縁部ヨコナデ、底面ナデである。

177はF区柱穴6051出土の瓦器碗である。器高5.2cm、口径15.1cmである。口縁端部は、内傾気味に丸くおさめる。体部内面は見込みに平行線状の暗文10条の後、横方向の分割ヘラミガキを密に施す。体部外面はナデの後、上半にヘラミガキを疎に施す。暗文幅2 mm、ヘラミガキ幅2～3 mm。

178・179は、E区の近世土坑5008から出土した瓦器の碗と小皿であり混入品である。178は口縁端部に二段の横ナデを施す。体部外面はナデ、体部内面の見込みに連結輪状の暗文を施した後、体部に圏線ヘラミガキを施す。179は口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデである。暗文は見込みから体部に渦巻き状4回転程度を施す。

E-F区整地層他出土遺物(第44図) 遺構面に薄く整地土が残存したが近世の混入品も多い。



第44図 E～F区整地土他出土遺物実測図

180～183は瓦器の椀である。器高は低く、外面ヘラミガキは施さない。口縁部ヨコナデにより端部は丸くおさめる。高台が残る183は、粘土紐を貼り付け周囲をナデて尖った断面三角形にする。高台は直径4.0cm程度で中心から離れて付く。体部内面の圈線ヘラミガキは大変疎である。見込み暗文は、平行線状(181)、不明(180・182)である。183は見込みから体部に渦巻き状のヘラミガキのみ施す。

184は瓦器の小型椀である。体部内面は圈線ヘラミガキ、見込みに細かなジグザグ状暗文を施す。外面は口縁部に横方向ヘラミガキを施す。胎土は灰白色で、非常に精良である。

185～189は陶磁器である。185は中国産白磁の椀である。口径15.6cm。体部外面は丁寧なケズリである。口縁部外面を玉縁状にし、見込み周囲に沈線が巡る。186は陶器の底部である。底径9.0cm。187は青磁の椀である。口縁部は輪花となり、端部に平坦面を持つ。188は肥前の磁器椀である。内面は蛇の目釉剥ぎである。18世紀に位置付けられる。189は肥前の陶器椀である。近世の所産である。

190は瓦質の羽釜である。口径19.0cmの小型品。口縁端部に平坦面を有し、内面は強いヨコナデによりくぼむ。

191は土師器の羽釜である。口径21.5cm。内外面ヨコナデ、羽部下面はヘラケズリである。羽部側面以下に煤が付着する。近世の所産であろう。192は陶器の湊焼き甕底部である。底径30.4cm。内外面ナデ、底面は無調整である。明赤褐色を呈し、内面に黄褐色の付着物がある。

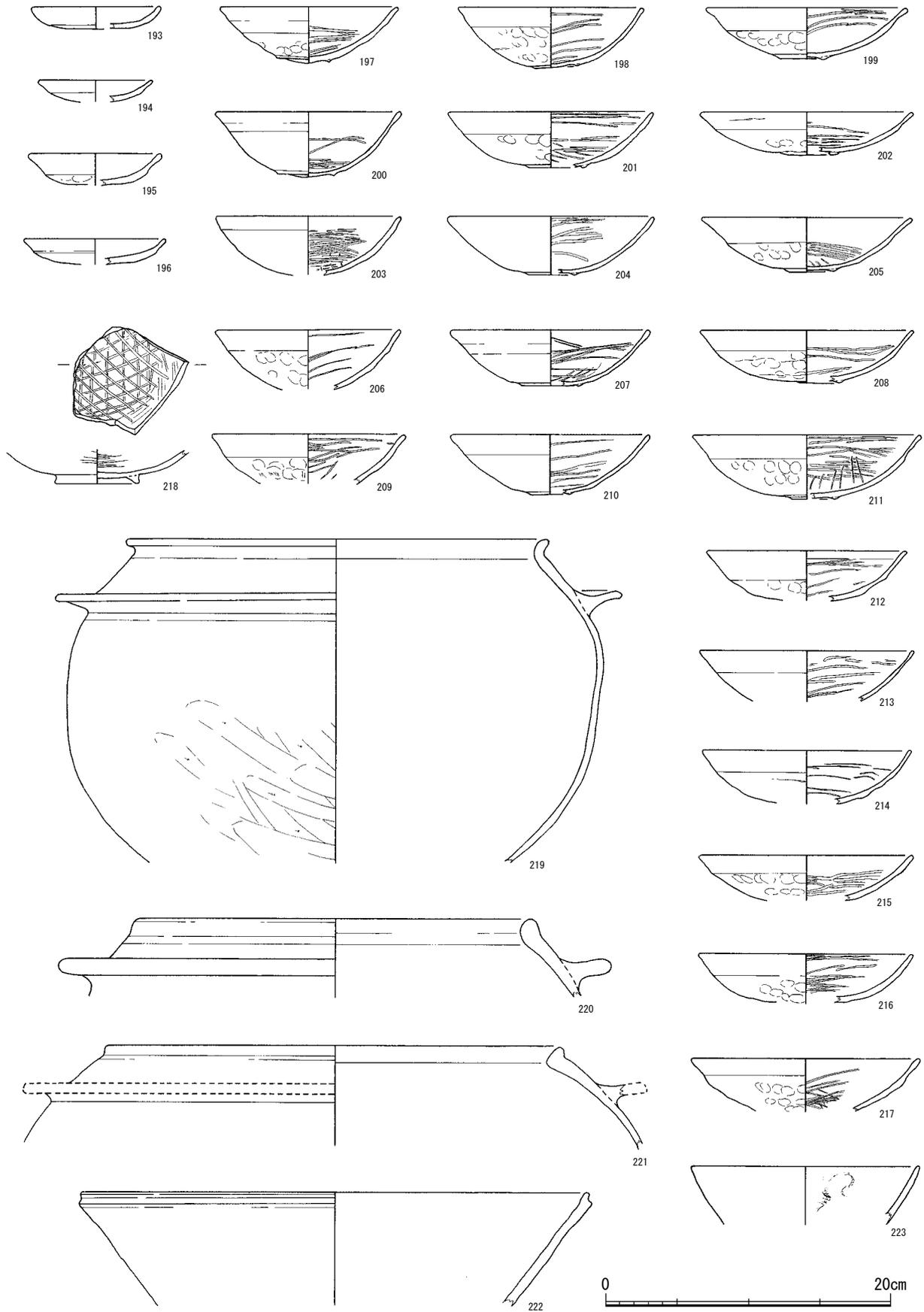
F区整地層出土遺物(第45～50図) 地山が北西に低くなり、そこに遺物を含む整地土が確認できた。

193は土師器の小皿である。色調は淡黄色を呈し、口縁部ヨコナデ、体部は摩滅のため調整不明。

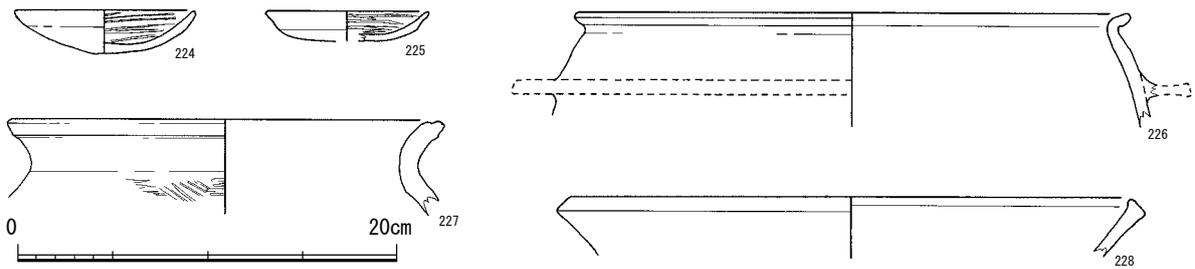
194～196は瓦器の小皿である。口縁部はヨコナデにより外反させ、体部との境が明瞭である。いずれも体部内面ナデ、外面は成形段階の指頭痕・指ナデである。内面にヘラミガキを巡らせるものはない。

197～218は瓦器の椀である。器高はほとんどが低く、高いものは少ない。外面ヘラミガキは明らかに混入と考えられる218以外は皆無である。口縁部はヨコナデにより端部は丸くおさめる。高台はすべてが形骸化に向かうもので、直径は3.0～3.5cm程度である。粘土紐を貼り付けただけで断面が半円～楕

第3章 調査結果



第45図 F区整地土出土遺物実測図1



第46図 F区整地土出土遺物実測図2

円形のもの（202・205・208）、さらにその周囲をナデ付けて先端の尖った断面三角形のもの（197・198・200・201・204・207・210・211）がある。なお197・198の高台は全周しない。また高台より底面が突出するもの（198・200・207）、高台が中央から離れた場所に付くもの（197・208）もある。体部内面の圈線ヘラミガキは、隙間が多く疎に施すものが主体である。見込みの暗文は、いずれも圈線ヘラミガキに先行するもので、平行線状（200・201・205・207・211・216）が多く、他に格子状（203）、輪花状（208）がある。見込みから体部に渦巻き状のヘラミガキのみ施すもの（197・198・202・206・214）も目立つ。なお、見込みが残存しておらず不明（204・209・210・212・213・215）のものもある。圈線ヘラミガキの幅に関係なく、暗文の幅は1～2mmである。

218は混入品であろう。高台は先の尖った断面三角形で、外方に張り出す。体部外面は上半にヘラミガキが確認できる。内面は見込みに格子状の暗文の後、体部に密なヘラミガキを施す。胎土は白色で精良である。

219～221は土師器の羽釜である。219は、口径29.7cmの大型品である。摩滅が激しく、底部のみ欠損する。体部下半は右斜方向へのヘラケズリを施す。羽部より下部に煤が付着する。220は口縁端部を短く外方に折り返すもので、口径27.5cmの大型品である。摩滅が激しく、羽部より下部に煤が付着する。221は口縁端部を短く外方に折り返し、端部に面を有するもので、口径31.6cmの大型品である。摩滅が激しく、羽部より下部に煤が付着する。

222は東播系須恵器の捏ね鉢である。体部が直線的に外傾し、口縁端部を上方に若干拡張させる。口径35cm程度。223は青磁碗。灰オリーブ色を呈する粗悪品で、福建省連江魁岐窯産と考えられる。

224～228は、遺構面直上の黒色砂質土から出土し、整地土以前の堆積として分離して取上げた。

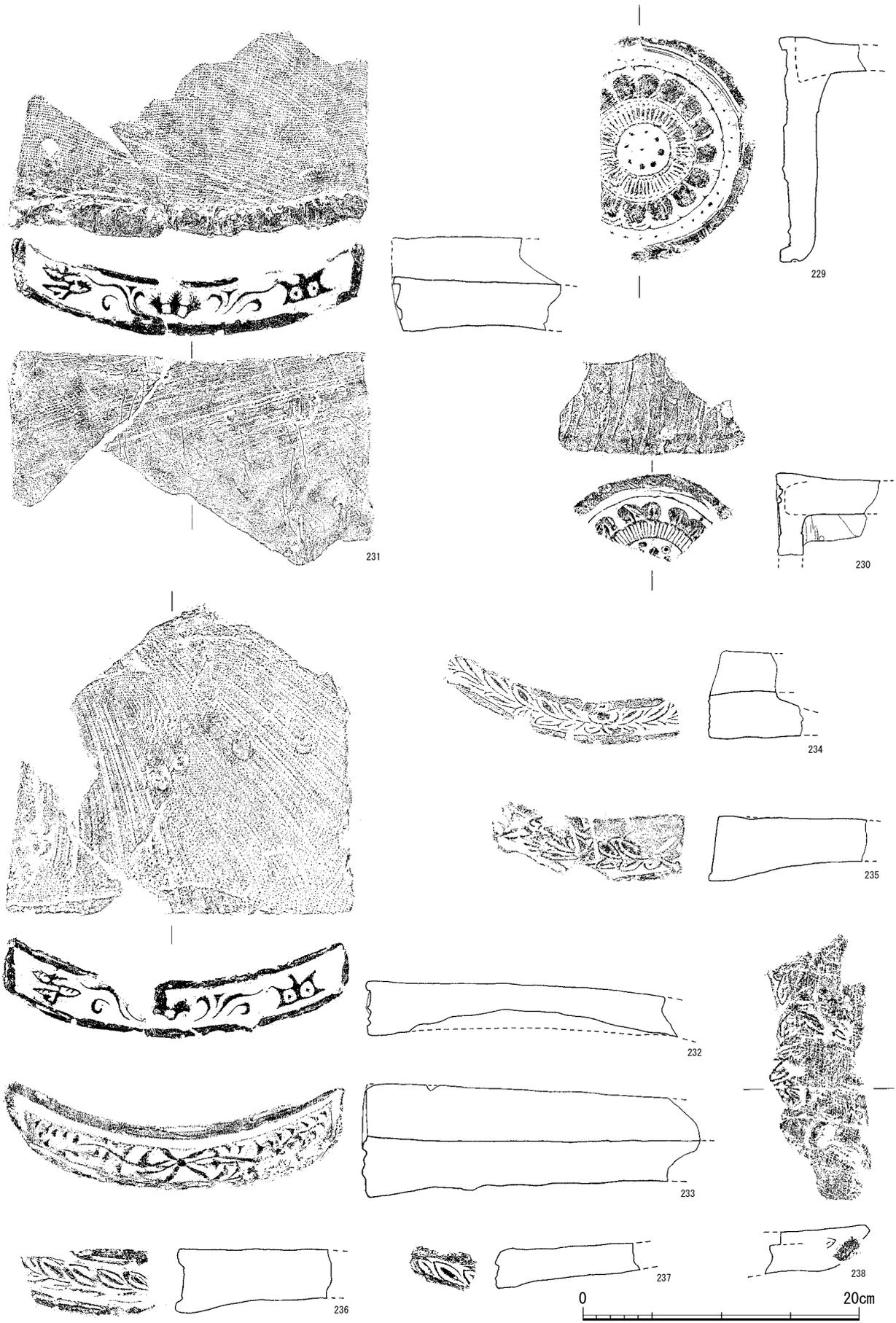
224・225は瓦器の碗と小皿である。224は口径9.5cm、高さ2.3cm、器壁は厚い。内面は圈線ヘラミガキ4条、見込みに渦巻き状の暗文を施す。225は口縁部に強いヨコナデ、内面はヘラミガキを施す。

226は土師器の羽釜である。口径30cm程度の大型品であろうが、9cm程度の破片で正確さに欠ける。内面ナデ、外面は摩滅により調整不明である。

227・228は東播系須恵器の甕・捏ね鉢である。227は口縁部を短く外反させ、端部を横に引き出す。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面は叩き（4条/cm）である。口径23cm程度である。228は体部が直線的に外傾し、口縁端部を上方に拡張させる。口径30cm弱である。

229～255は整地土から出土した瓦、塼である。

丸瓦の瓦当は2点が出土したのみである。両者は製作技法、胎土、色調が全く異なる。229は雄蕊帯を有する単弁16葉蓮華文である。瓦当径16.2cm。外区珠文は先端の尖る径4～2mmの小型で、40と推

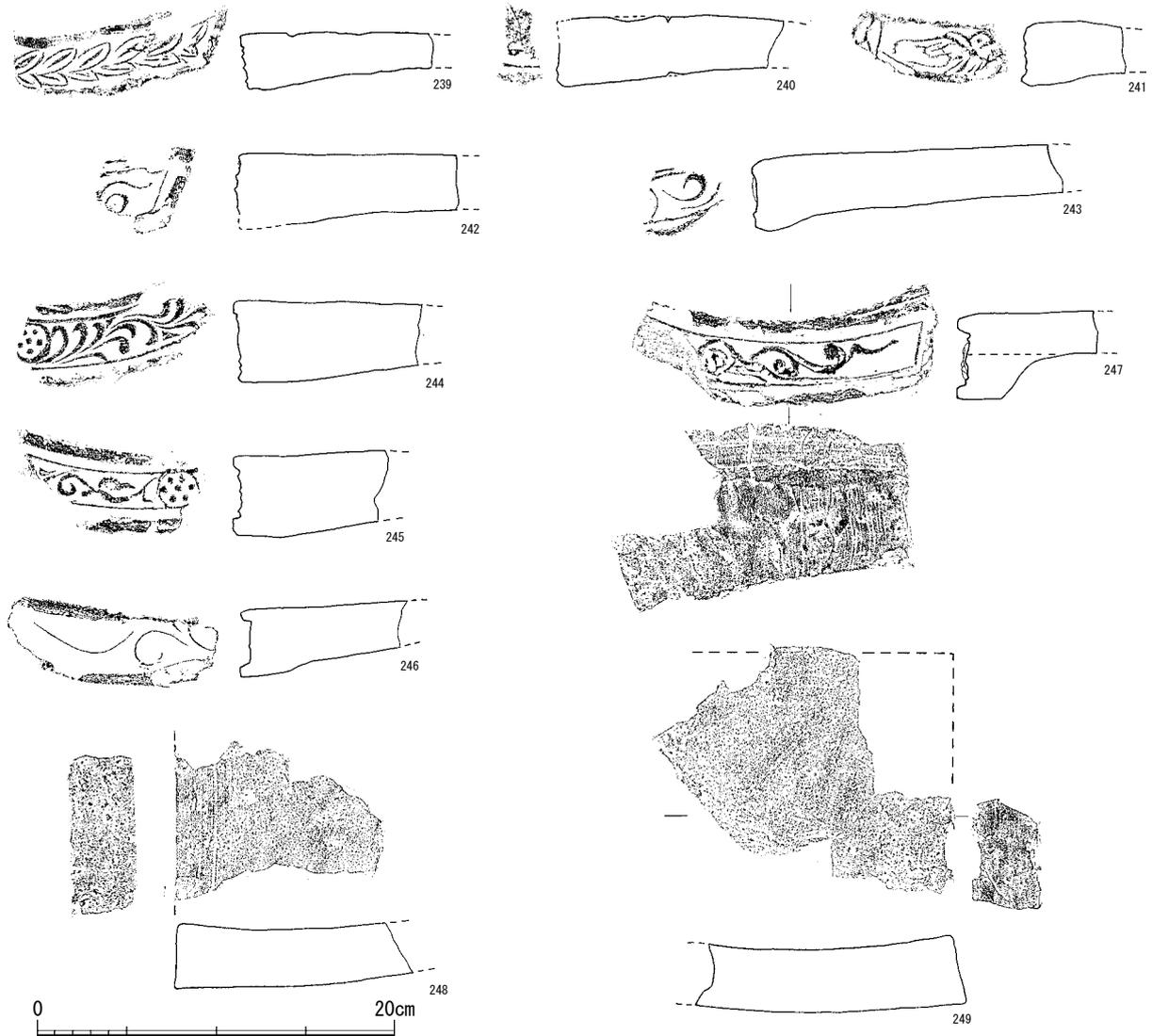


第47図 F区整地土出土遺物実測図3

定できる。雄蕊の先端には、花粉の入る葯が珠文で表現される。蓮子は1+8で、摩耗が著しい。瓦当側面に強い工具ナデの後、丸瓦部凸面に縦方向の強いヘラナデを施す。丸瓦部凹面は布目、ナデである。胎土には細砂と若干の粗砂を含み、破面の色調は灰白色。焼成はやや硬質である。

230は雄蕊帯を有する復弁8葉蓮華文である。瓦当径14.7cmに復元できる。蓮華は分離して配され、子葉を表現する。中房の雄蕊には、葯の表現はない。蓮子2が残存し8に復元でき、いずれも竹管文状を呈する。蓮子の内側に方形文2が残存しており、梵字の一部と考えられる。丸瓦部凸面に縦方向の強いヘラナデを施した後、瓦当側面下半に強いヘラナデを施す。丸瓦部凹面は布目が残る。胎土は精良で若干の微細砂を含み、破面の色調は橙色である。焼成はやや硬質である。

231・232は特異な文様の軒平瓦である。他に破片1点が出土している。同范であり文様は大変シャープである。中央と左右に特異な文様を置き、その間に唐草文を配する。左の文様は「寺」を図案化したと考えられ、そうすれば中央と右の文様も文字を図案化したもので、寺名を示す可能性がある。范型がシャープで少ない使用であることも、独自に造られた軒平瓦である事を示すと考えられる。顎は直線顎である。平瓦凹面にはコビキ痕と布目圧痕、上端面の幅2cm程度にナデを施す。平瓦凸面は231がコビ



第48図 F区整地土出土遺物実測図4

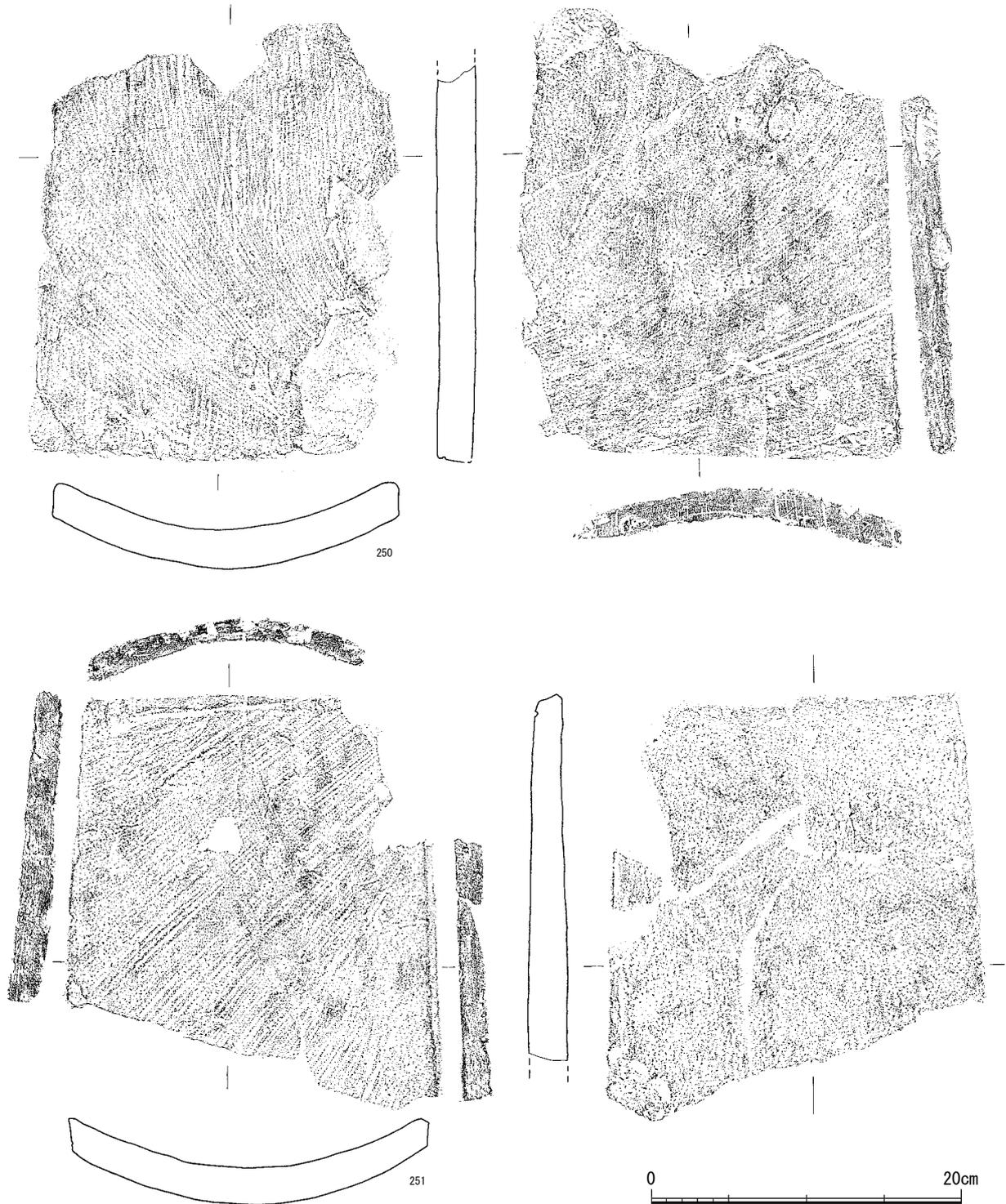
キ痕とナデ、232が縦方向のヘラナデを施す。焼成はやや硬質。

233は特異な文様の軒平瓦である。文様は今回調査で唯一であり、やや磨滅している。中心飾りとして草葉らしき十文字を置き、左右に葉か花のついた茎が展開する。顎は直線顎である。平瓦凹面にはコビキ痕と布目圧痕、凸面は粗雑な縦方向のヘラナデを施す。焼成はやや硬質。

234～239は特異な文様の軒平瓦であり、軒平瓦で主体的な文様である。ここでは木葉文軒平瓦と呼称しておきたい。中心飾りから左右に上・下段にそれぞれ5、あるいは6の木葉文を配する。234は中心飾りから左半部端部まで残り、文様はシャープである。左端部は木葉の途中で切断して側面としており、周縁は存在しない。顎は直線顎である。凹面には横方向ヘラナデ、凸面には指頭痕とヘラナデを施す。焼成はやや軟質。235は中心飾りから左半部端部付近までが残るが、文様部分の磨耗が著しい。顎は直線顎である。凹面には布目圧痕、凸面には縦方向のヘラナデを施す。焼成はやや軟質。236左半部が端部まで残るが、文様部分はやや磨耗する。顎は直線顎である。凹面にはコビキ痕と布目圧痕、凸面には縦方向のヘラナデを施す。焼成はやや軟質。237は左半部の端部までが残る。木葉は上段のみであり、文様はシャープである。瓦当の厚さ2.3cm、平瓦の厚さ1.8～2.3cmと薄く、小型品である。顎は直線顎である。凹面にはコビキ痕と布目圧痕、凸面には斜方向の強いヘラナデを施す。凸面の顎相当部は未調整である。焼成はやや硬質。238は瓦当の右端部が残る。顎は直線顎であろう。凹面には瓦当の文様である木葉文と布目圧痕、および横方向の粘土接合ラインが残る。生乾きの瓦当の失敗品をそのまま使用したものであろう。凸面にはコビキ痕とナデを施す。焼成はやや硬質。239は右半部端部までが残る、文様はシャープである。顎は直線顎である。凹面にはコビキ痕と布目圧痕、凸面には指頭痕とナデを施す。焼成はやや硬質。

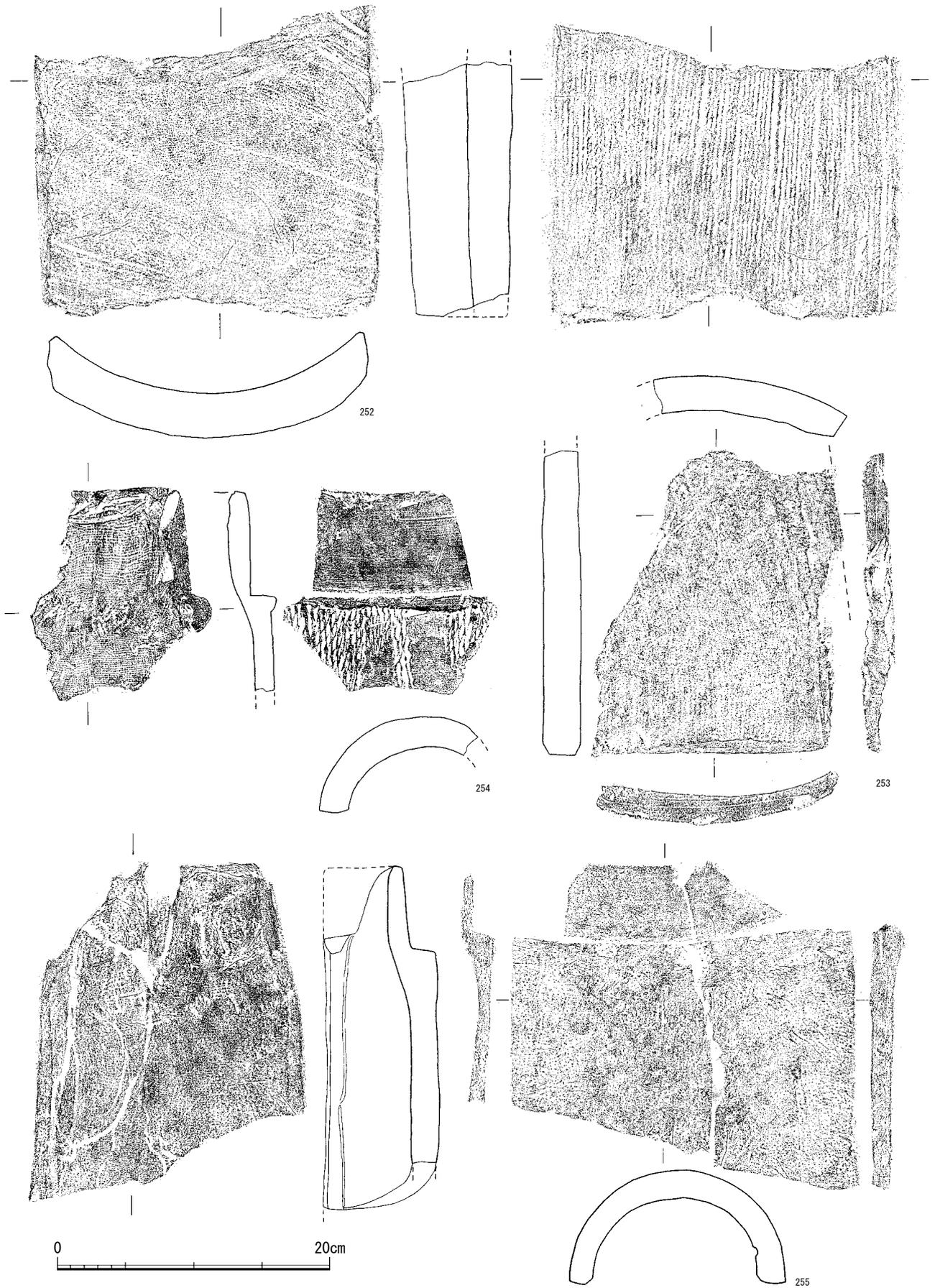
240の瓦当文様は不明である。顎は直線顎である。凹面には布目圧痕、凸面にはヘラナデを施す。なお凸面の端部から10cm部分に赤色顔料が付着する。焼成はやや軟質。241の瓦当文様は不明である。顎は直線顎である。凹面は縦方向ヘラケズリ、瓦当上面は横方向ヘラケズリを施し上部の周縁は残存しない。凸面は磨滅により調整不明である。焼成は軟質。

242～247は唐草文軒平瓦である。242は唐草文の右端部が残る。顎は直線顎である。凹面には布目圧痕と側縁に沿って幅5cm程度のヘラナデ、凸面には縦方向のヘラナデを施す。焼成はやや硬質。243は中心飾りと唐草が右に反転する部分が残る。顎は緩やかな曲線顎である。凸面の顎相当部は、磨滅している。平瓦凹面にはコビキ痕と布目圧痕、凸面には縦方向のヘラナデを施す。焼成は軟質。244はE区の井戸5005下層から出土した。中心飾りに1+5の連子を配し、唐草が右に反転する。顎は直線顎である。凹面は布目圧痕。凸面の顎相当部と平瓦部は区別してヘラナデを施す。焼成はやや硬質。245は中心飾りに1+6の連子を配し、唐草が左に4回反転する部分が残る。顎は直線顎である。凹面には布目圧痕、凸面の顎相当部は弱いヘラナデ、平瓦部は縦方向のヘラナデを施す。焼成はやや硬質。246は反転する細線により唐草文を表現する。顎は緩やかな曲線顎である。凹面は布目圧痕。凸面の顎相当部は横方向のヘラナデ、平瓦部はナデを施す。焼成はやや軟質。247は中心飾りを配し、唐草が右に3回反転する。顎は段顎である。凹面は布目圧痕と縦方向のヘラナデ、外縁上端面に横方向ヘラナデを施す。顎凸面には横方向ヘラナデ、顎裏面から平瓦部は縦方向ヘラナデを施す。焼成は硬質。整地土から出土した唯一の段顎であり、最も新しい資料である。



第49図 F区整地土出土遺物実測図5

248・249はE-F区整地土から出土した埴である。249は二側面の一部を残すもので、上面がやや反る。厚さは中央部で3.4cm、端部で4.0cmである。上面と側面にはヘラナデ、下面にはケズリ気味のヘラナデを施す。表面と側面にベンガラと考えられる赤色顔料が付着する。焼成は硬質。248は249とほぼ同様の成形・調整である。異なる点は、厚さが中央部で3.1cm、端部で3.7cmであり、側面のみに赤色顔料が付着することである。焼成は硬質。



第50図 F区整地土出土遺物実測図6

250～253は平瓦である。250は広端部と両側縁、251は狭端部と両側縁の残る平瓦であり、製作技法は類似する。凹面には強いコビキ痕と布目圧痕、凸面には強いコビキ痕が残り、著しく離れ砂が付着する。250の凸面は縦方向の弱いヘラナデを施す。側面と両端面は丁寧な面取りがなされる。焼成は硬質。252は両側縁と一方の端部の残る平瓦である。凹面にはコビキ痕と布目圧痕、凸面には縄叩きが残る。側面2回と凹面側縁1回の面取りがなされる。焼成は軟質。253は広端部と一方の側縁の残る平瓦である。凹面には布目圧痕と縦方向に弱いナデ、凸面には斜方向の丁寧なナデを施す。焼成は軟質。

254・255は丸瓦である。254は玉縁から接続部にかけての丸瓦である。体部凸面には縦方向縄叩きを施すが、端部1cm程は縄叩きがおよばず突帯状に残る。体部内面には布目圧痕が残る。焼成はやや硬質。255は体部下半と玉縁の一部が欠損する。丸瓦の全形のうかがえるものであるが、摩滅が著しい。体部幅16.0cm。体部凸面には縦方向縄叩き痕、内面には布目圧痕が残る。焼成は軟質。

第4章 木製品保存処理および各種分析

1. 木製品保存処理の概要

保存処理を行った木製品の種類は櫃・案などの板材（井戸に転用）10点、櫃持ち手1点、挟入り板2点、曲物1式（底板1点、側板1点）であり、その試料のうち樹種同定9点、X線撮影5点を行った。試料の詳細、および報告番号・名称の対応を表1に示す。

表1 対象遺物一覧

処理 番号	名 称		法 量 (単位：cm)	分 析		保存 処理	備 考
	報告 番号	名称		樹種 同定	X線 撮影		
1	8	櫃A側板	長さ 60.0 幅 35.5 最大厚 1.3	○	○	○	小口にウルシ
2	9	櫃A側板	長さ 56.0 幅 35.5 最大厚 1.2		○	○	
3	7	櫃A側板	長さ 43.0 幅 35.5 最大厚 1.3		○	○	小口・表面にウルシ
4	10	櫃A側板	長さ 37.0 幅 19.5 最大厚 1.2		○	○	
5	15	不明板材	長さ 69.0 幅 60.0 最大厚 1.8	○		○	
6	14	櫃B蓋板	長さ 56.5 幅 19.0 最大厚 1.7	○		○	小口・側面・表面にウルシ。 7と接合。
7	14	櫃B蓋板	長さ 62.5 幅 21.0 最大厚 1.7			○	小口・表面にウルシ。 6と接合。
8	13	櫃B蓋板	長さ 62.5 幅 26.0 最大厚 1.7			○	小口・側面・表面にウルシ
9	16	櫃C底板	長さ 66.0 幅 25.0 最大厚 2.5	○	○	○	小口・側面・表面にウルシ
10	17	案天板	長さ 78.0 幅 27.5 最大厚 3.5	○		○	
11	12	櫃A持ち手	長さ 61.5 最大幅 3.8 最大厚 3.3	○		○	
12	45	挟入り板	長さ 39.0 最大幅 3.8 最大厚 0.8	○		○	
13	44	挟入り板	長さ 39.5 最大幅 3.8 最大厚 1.0			○	
14	43	曲物	直径 17.5 側板1/3残存 高さ 5.0	○ ○		○	

1. 木製品保存処理の概要



1 オープン



2 使用薬品類



3 樹種同定



4 脱色処理中



5 トレハロース含浸中



6 風乾



7 表面処理



8 接合

第51図 木製品保存処理中写真

2. トレハロース含浸法による木製品保存処理

1. はじめに

遺跡等から出土した木製品を保存・展示するためには、木材の細胞内に侵入した過剰な水分を除去しながら破壊された細胞を強化する必要がある。近年、ヨーロッパではPEG(ポリエチレングリコール)にかわって、木材の構成要素でもある糖類を含浸させる方法が実用化されている。日本の高温多湿の環境や生物被害を考え、ヨーロッパで多用されているスクロース(蔗糖)に代わりラクチトールやトレハロースを用いることにした。これらの糖は、低吸湿性でありながら水に対する溶解性が高く、非腐朽性の性質を持ち、アリなどに食べられる生物被害も少なく、比較的安価である。通常食品にも使用されるように人体においても安全である。

2. 方法

トレハロース含浸法は、基本的には今津(九州国立博物館)および伊藤(大阪文化財研究所)の方法を参考にして、試料に以下の処理を施した。

- 1) 処理前記録を写真等で記録する。
- 2) 防腐処理(0.02% ケーソン溶液に浸漬)の後、水に浸け、刷毛や筆などで表面の砂粒や汚れを落とす。
- 3) 脱色処理(1% EDTA溶液に浸漬)する。
- 4) 2・3日を目安に色が出なくなるまで水洗する。
- 5) 20%トレハロース溶液に浸漬する。
- 6) 含浸の様子をみながら10%づつ濃度を上げていき、最終濃度70%完了で糖液よりあげる。
- 7) 風乾し結晶化を促す。
- 8) こびりついた糖を除去し、仕上げる。
- 9) 接合にはエポキシ樹脂の接着剤を使用し、欠損部分にはエポキシ樹脂のパテを充填した。エポキシ樹脂の彩色にはアクリル絵の具を使用した。
- 10) 十分乾燥の後できるだけ高温多湿を避けて保管する。

3. 取扱及び保管上の注意

- 1) 取扱は、乾いた手、又は手袋を使用し、乱暴に扱わない。
※手から発せられる水分により表面に色の違いが表れる可能性がある。その場合は素早く水分を取り除き、風通しの良い日陰で乾燥させる。
- 2) 遺物は梱包せずに湿気を帯びにくく空気の流れがあるような場所で保管する。
例) コンテナの底に気泡緩衝材の凹凸を上向きに敷き、その上に薄葉紙を敷き、遺物を静置し、埃がかぶらないように薄葉紙を1枚かぶせる。
※木材本来の持つ水分が残存する遺物が多いため、密封および厳重な梱包を行うと湿気がたまり適さない。糖の表出やカビの発生などの問題が起こることがあるので、水分が抜けきらない状態での密封保管は厳禁。
- 3) 保管場所は、室内及び通常の保管庫で良いが、高温多湿は避ける。

※換気等が難しい場合、多湿の時期には湿度が溜まらないように扇風機などで空気を流す。

- 4) 長期保管は、直射日光、高温多湿、過乾燥、低温環境下にならぬよう定期的に管理する。
- 5) 水が付着した場合は、素早く水分を取り除き、風通しの良い日陰で乾燥させる。
- 6) 接合箇所に負荷をかける置き方を避ける。
- 7) 破損箇所の接着は、セメダインやエポキシ樹脂など、ほとんどの接着剤が使用可能である。ただし、水溶性の接着剤（木工ボンドなど）は、結晶化した木材断面の糖が溶出するので不適切である。また、欠損部分は、エポキシ樹脂のパテなどで補う。

3. 樹種同定

1. はじめに

本報告では、大和川今池遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

2. 方法

試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。なお、ここに記載するNoおよび第52～54図のNoは、表1の処理番号である。

1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 No. 1、2、3、4、5、6、7、8、9、11

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 No. 10、12、13、14（曲物の底板、側板とも）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築などに広く用いられる。

4. 所見

同定の結果、大和川今池遺跡の木製品は、スギ10点、ヒノキ5点であった。

スギは、木櫃板材、不明板材、持ち手に使用されている。スギは温帯に広く分布する針葉樹で、加工工作が容易なうえ、大きな材がとれる良材である。ヒノキは、案板材、挟入り板、曲物底板、曲物側板に使用されている。ヒノキは温帯を中心に分布する常緑高木で、特に温帯中部に多く、木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。

板材10点 (No.1 から10) は井戸枠であり、スギ9点、ヒノキ1点であった。近畿において、井戸枠の板材に使われる樹種としてはスギやヒノキが多く、大阪府では讃良郡条里遺跡 (古墳時代末期～平安時代初期) や久宝寺遺跡 (古墳時代末期～平安時代初期) などに報告例がある。また、井戸材は建築部材などを転用した出土例が多い。No.1 から9の板材は収納用の木箱である櫃の材を再利用した転用材とみられるが、これらの転用材 (No.1 から9) と、櫃の把手とみられるNo.11はいずれもスギであった。なお、大阪府の野々上遺跡 (古墳時代末期～平安時代初期) でも、櫃の材を井戸材に転用したスギ材が報告されている。案板材1点、挟入り板2点、曲物の底板と側板はヒノキであった。なお、ヒノキに同定された板材 (No.10) は他の板材と異なり机の転用材と考えられている。古代以降、近畿では曲物にヒノキが多用され、次いでスギが多い。特に側板はヒノキを多用する傾向がある。大阪府でも曲物の底板・側板ともにヒノキを用いた例は、西ノ辻遺跡 (中世) などで多く見られる。

本遺跡で同定されたスギとヒノキは温帯に広く分布する樹木であり、地域的な用材または流通によってもたらされたと考えられる。また、櫃と案の転用材はいずれもスギまたはヒノキであり、これらの樹種が井戸の用材として恣意的に選定されたと推察される。

4. X線撮影

1. はじめに

X線発生装置 (フィリップス社製) およびX線透過撮影装置NAOMINX04 (アールエフ社製) を使用して、X線透過撮影を行った。

2. 結果

No.1) 釘穴と考えられる部分を確認した。内部に木材とは異なる金属質のものが確認できるが、釘状のものが残存しているのか、痕跡のみかは判然としない。

No.2) 肉眼観察においても釘穴が確認できるが、金属質のものは確認できない。

No.3) 釘穴と考えられる部分を確認した。板材1同様、内部に木材とは異なる金属質のものが確認できるが、釘状のものが残存しているのか、痕跡のみかは判然としない。

No.4) 釘穴を確認した。そのうち1か所で、金属質のものが残存していると考えられる部分を確認した。

No.9) 釘穴を確認した。そのうち1か所には僅かであるが、金属質の残存部分を確認した。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学, 雄山閣, p.449.

小原二郎 (1962) 木製品「平城宮発掘調査報告Ⅱ－官衙地域の調査－」, 奈良国立文化財研究所10周年記念学報 (学報第15), 奈良国立文化財研究所p.41-43, p.75-76.

財団法人大阪府文化財センター (2004) 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI 大阪竜華都市拠点地区

竜華東西線建設に伴う発掘調査.

財団法人大阪府文化財センター(2004) 讃良郡条里遺跡(その3) 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書.

財団法人東大阪文化財協会(2002) 出土木製品一覧表, 西ノ辻遺跡第16次発掘調査報告書(遺物編).

佐伯浩・原田浩(1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.

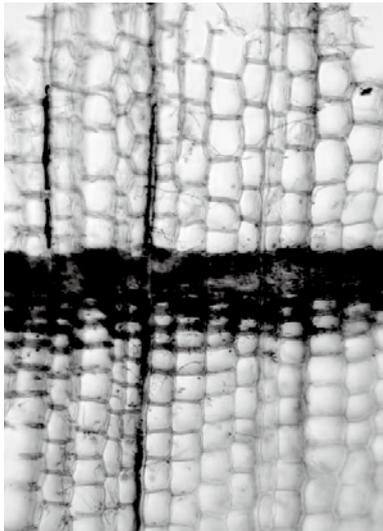
佐伯浩・原田浩(1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296.

羽曳野市遺跡調査会(1998) 第3節木製品「野々上VI-野々上遺跡出土遺物整理報告書-」, p.3-4.

山田昌久(1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, p.242.

第4章 木製品保存処理および各種分析



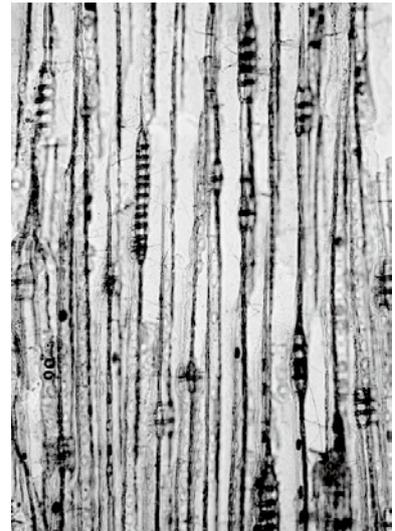
横断面
No. 1 スギ

0.1mm



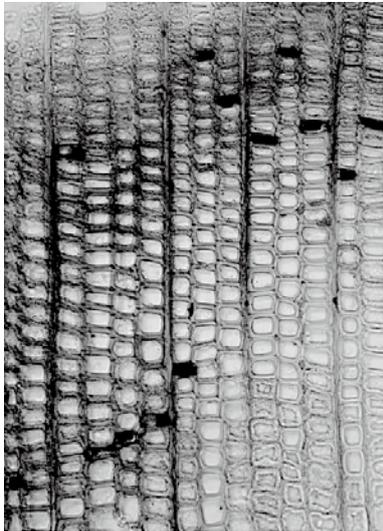
放射断面

0.1mm



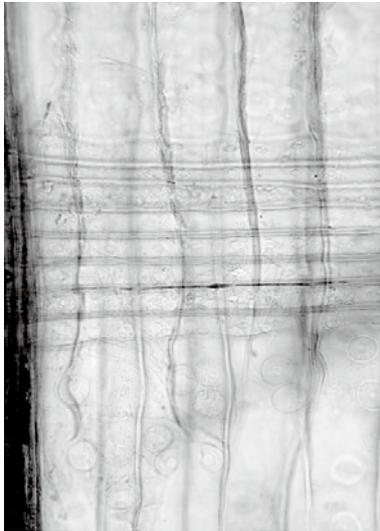
接線断面

0.1mm



横断面
No. 5 スギ

0.1mm



放射断面

0.1mm



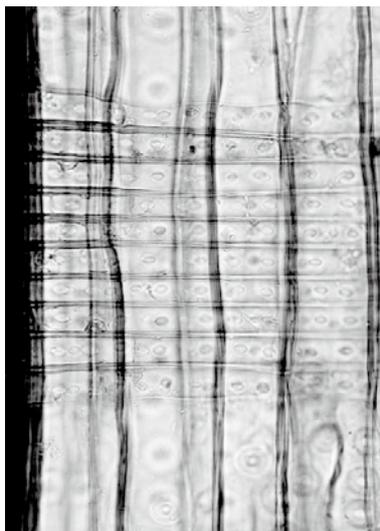
接線断面

0.1mm



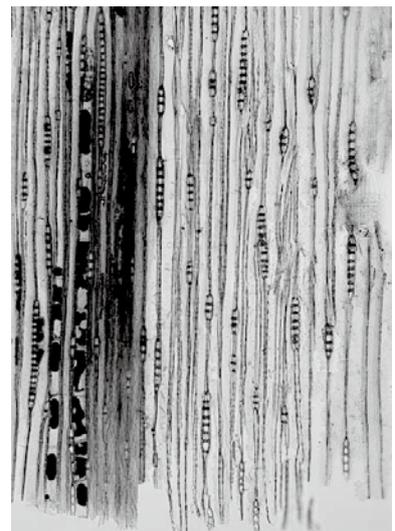
横断面
No. 6 スギ

0.1mm



放射断面

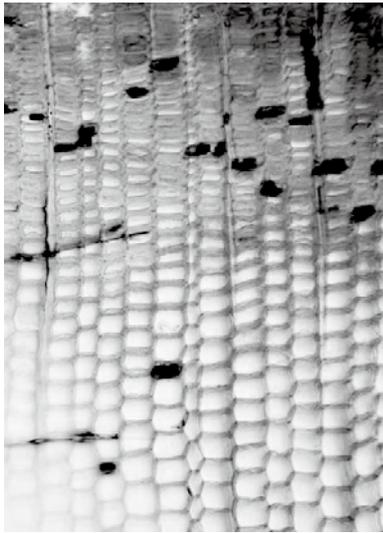
0.1mm



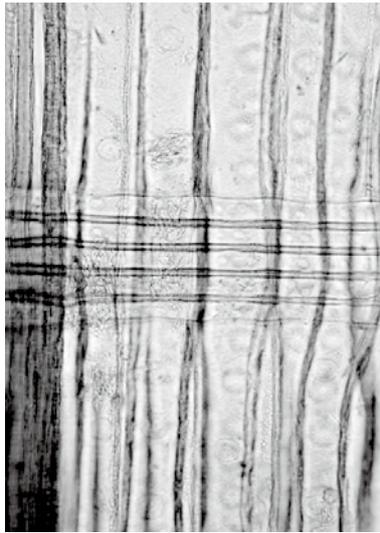
接線断面

0.1mm

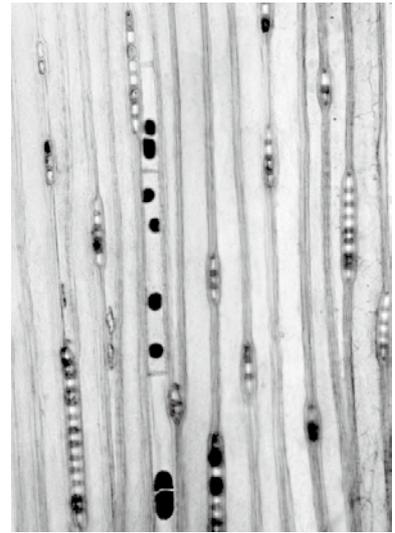
第52図 木製品顕微鏡写真1



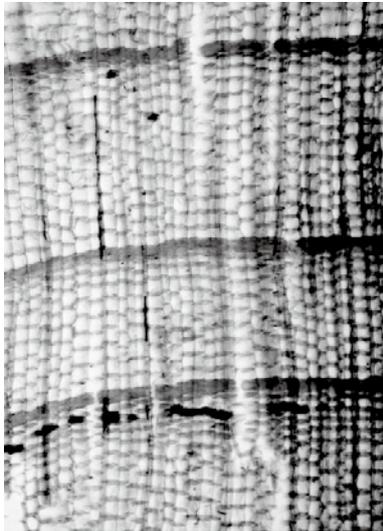
横断面
No.9 スギ



放射断面



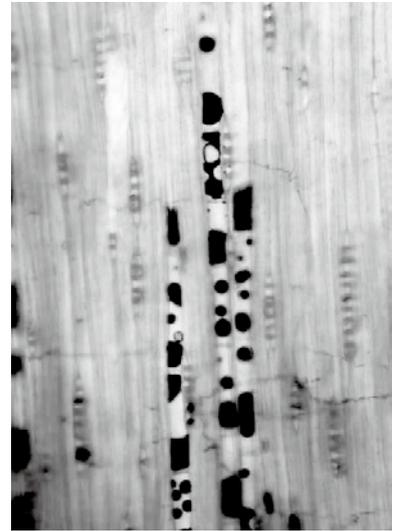
接線断面



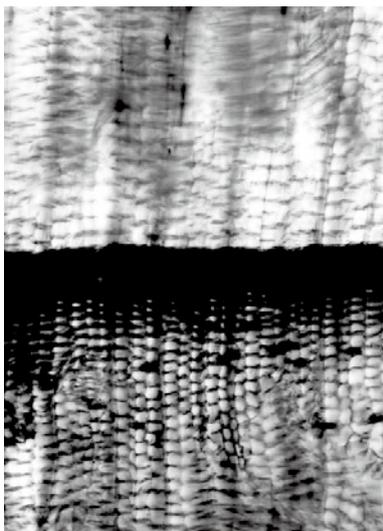
横断面
No.10 ヒノキ



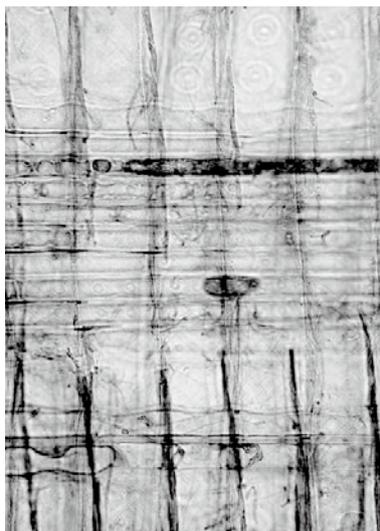
放射断面



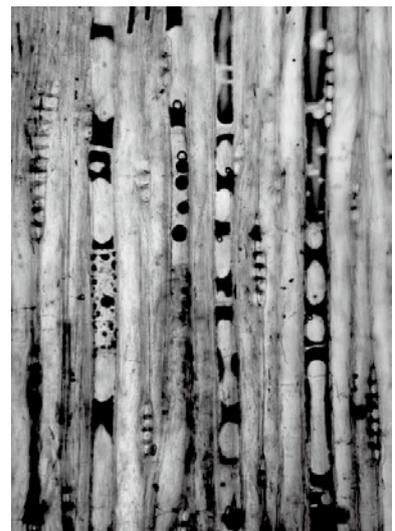
接線断面



横断面
No.11 スギ



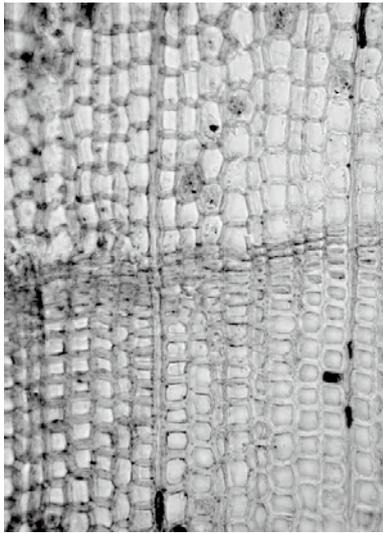
放射断面



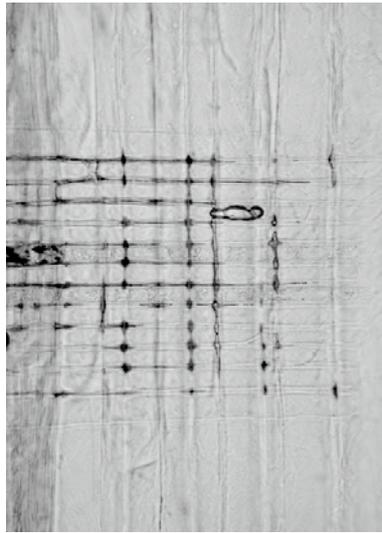
接線断面

第53図 木製品顕微鏡写真2

第4章 木製品保存処理および各種分析



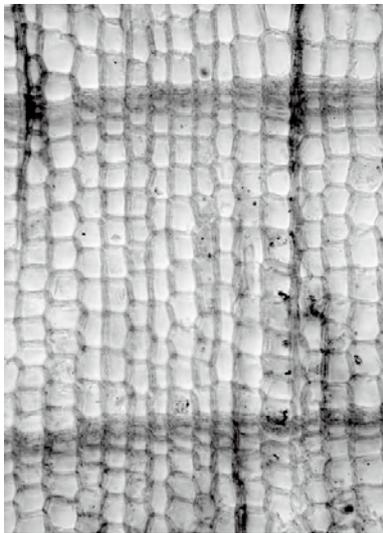
横断面
No.12 ヒノキ



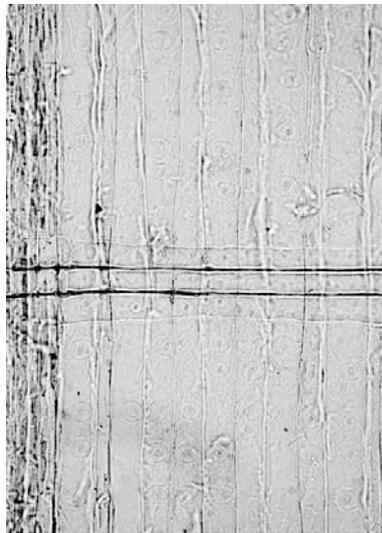
放射断面



接線断面



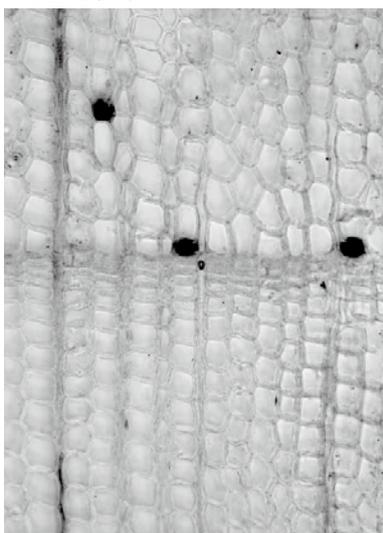
横断面
No.14 ヒノキ



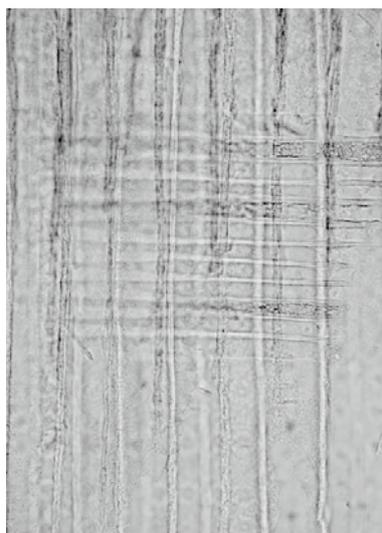
放射断面



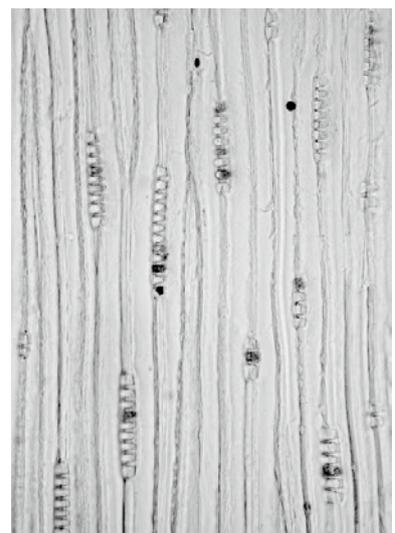
接線断面



横断面
No.14 ヒノキ

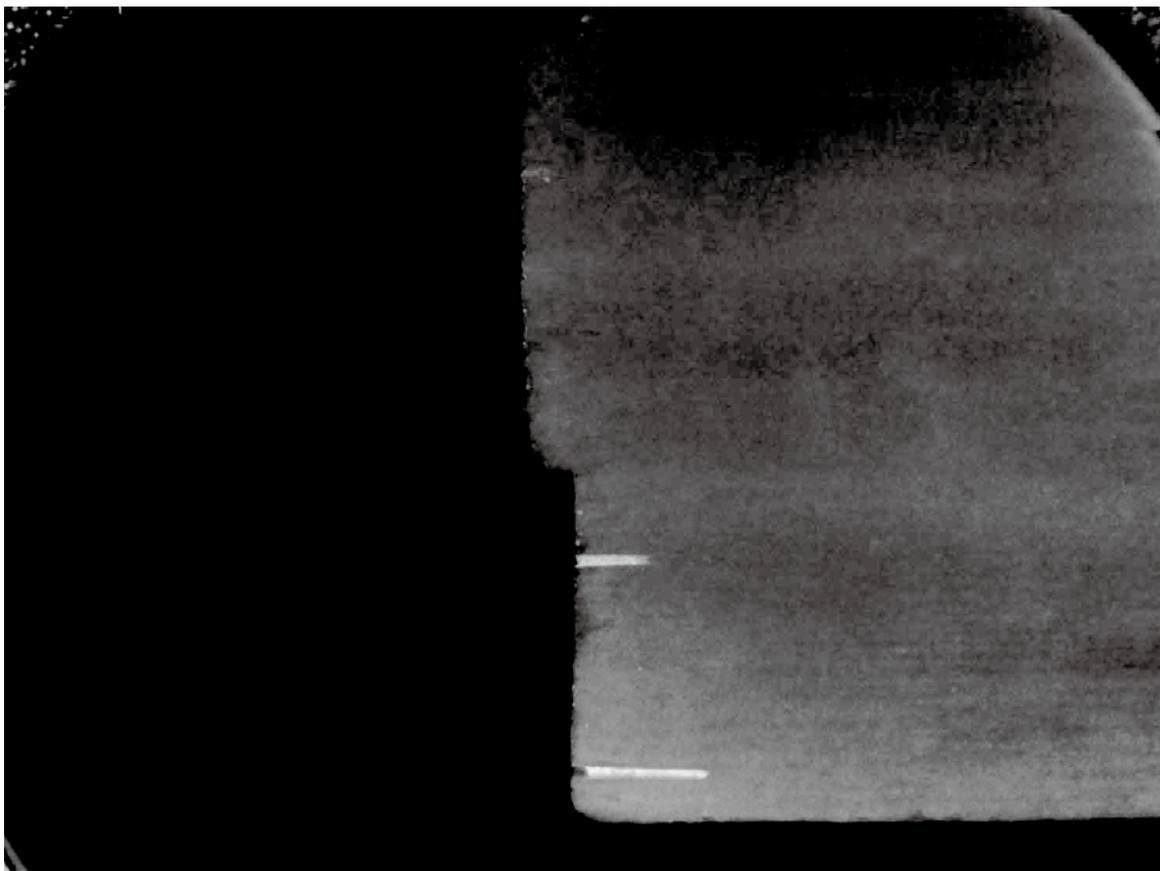


放射断面



接線断面

第54図 木製品顕微鏡写真3

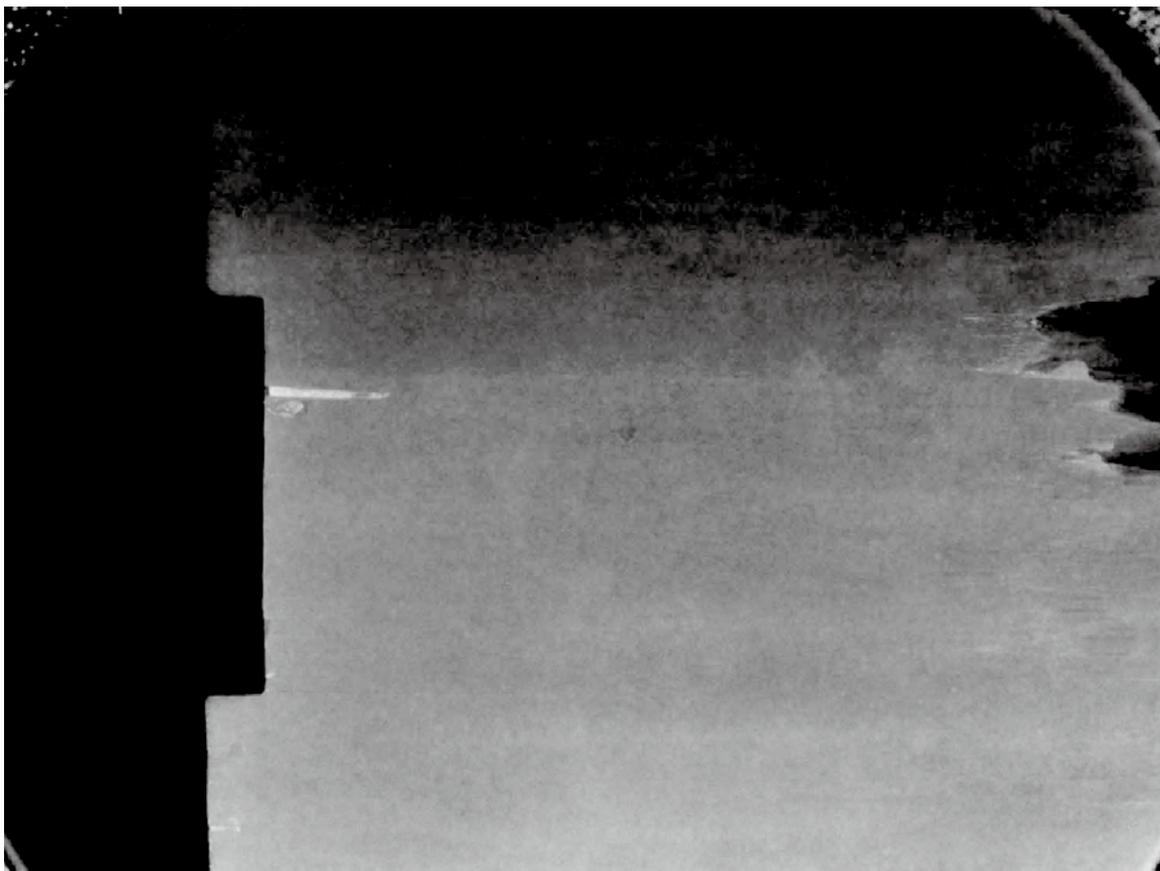


No.1-1 (報告番号8)

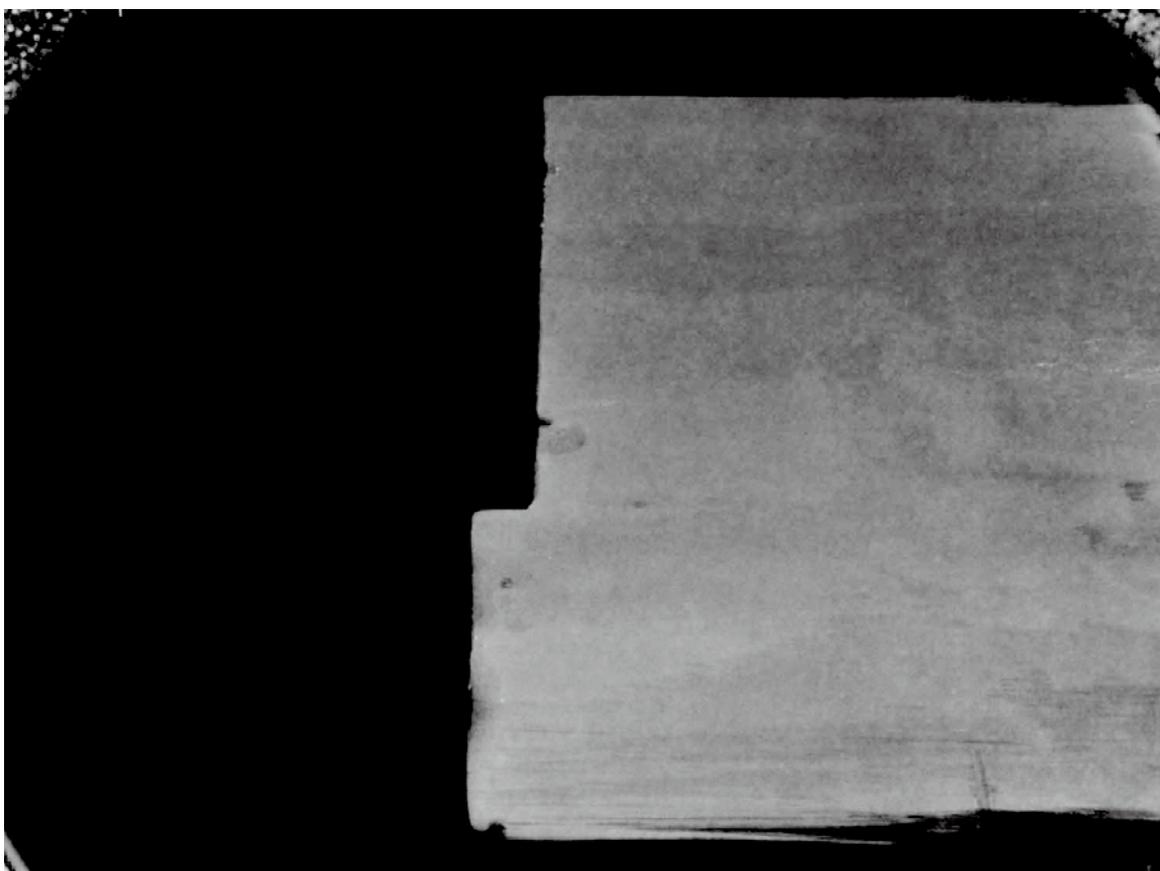


No.1-2 (同上)

第55図 木櫃X線写真1

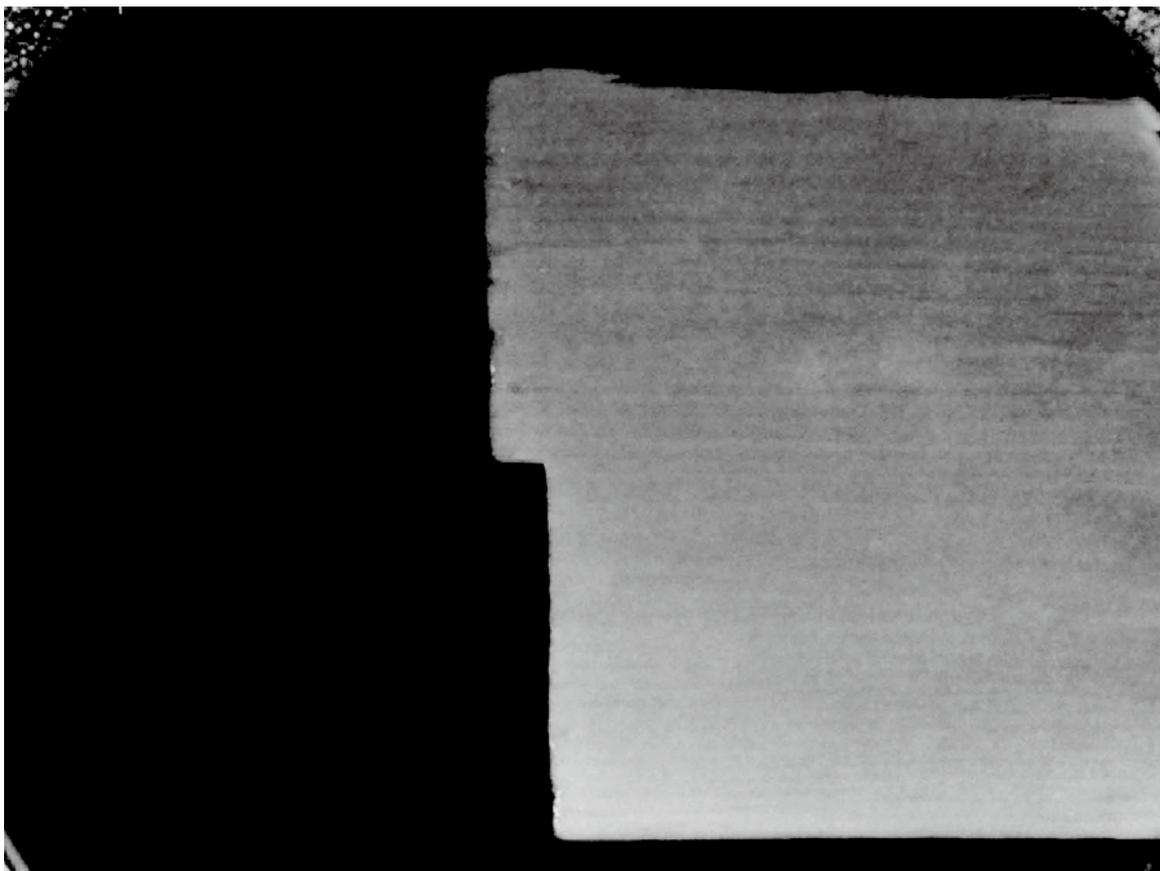


No.1-3 (報告番号8)



No.2-1 (報告番号9)

第56図 木櫃X線写真2

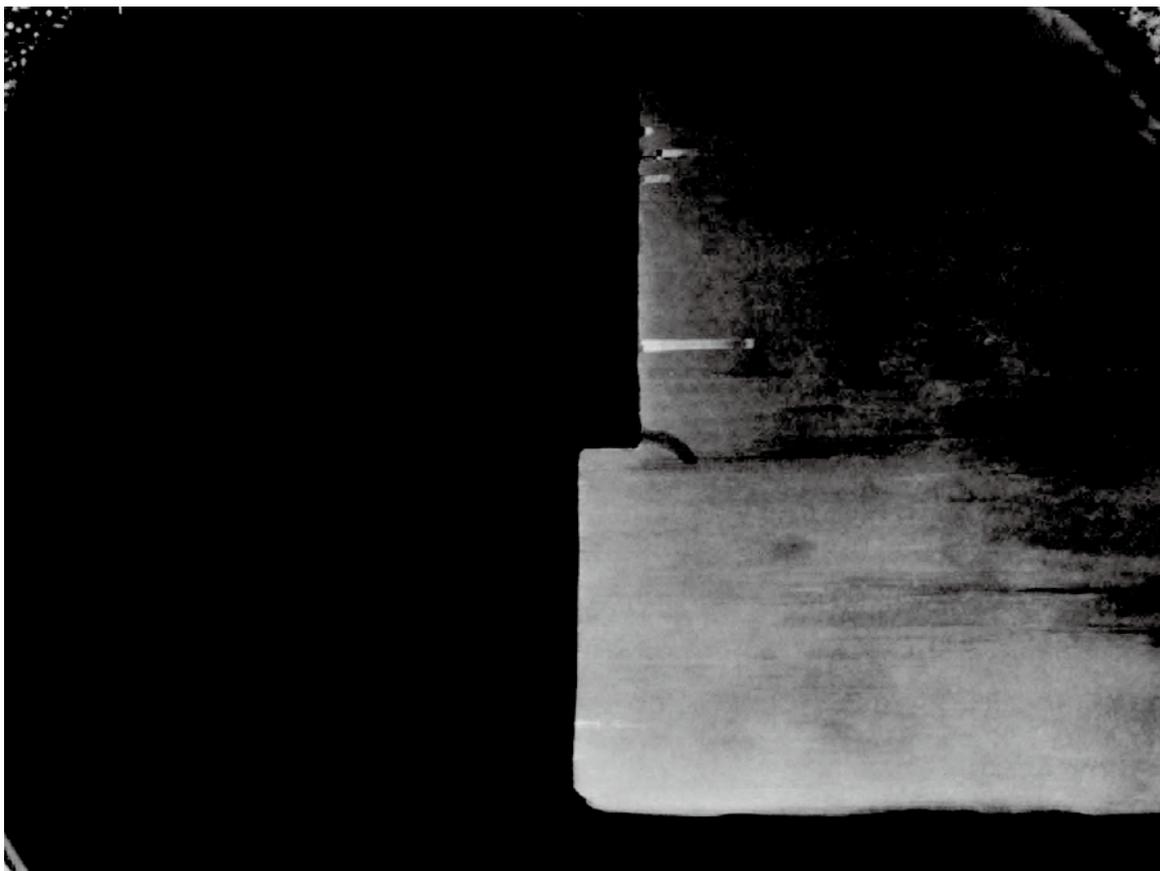


No.2-2 (報告番号 9)

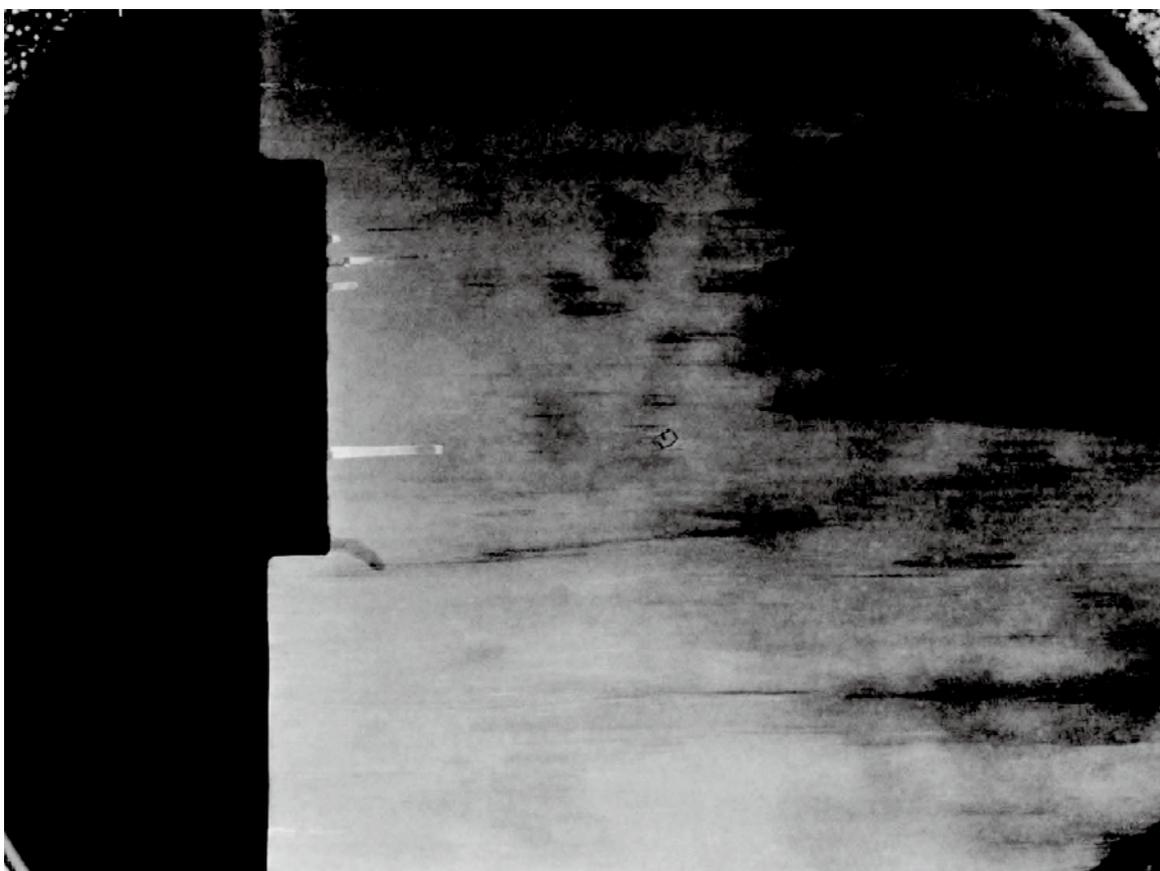


No.3-1 (報告番号 7)

第57図 木櫃X線写真3

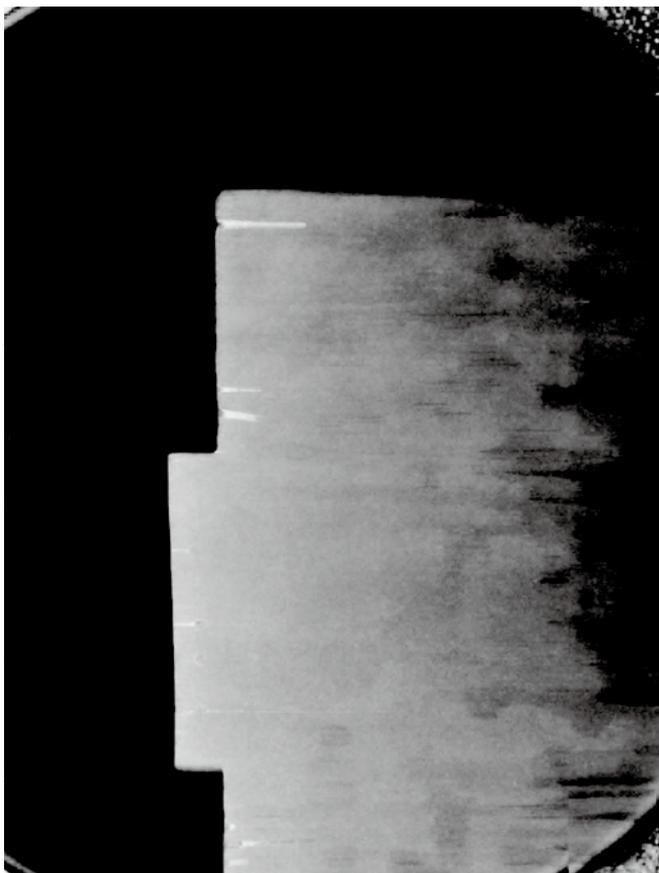


No.3-2 (報告番号7)

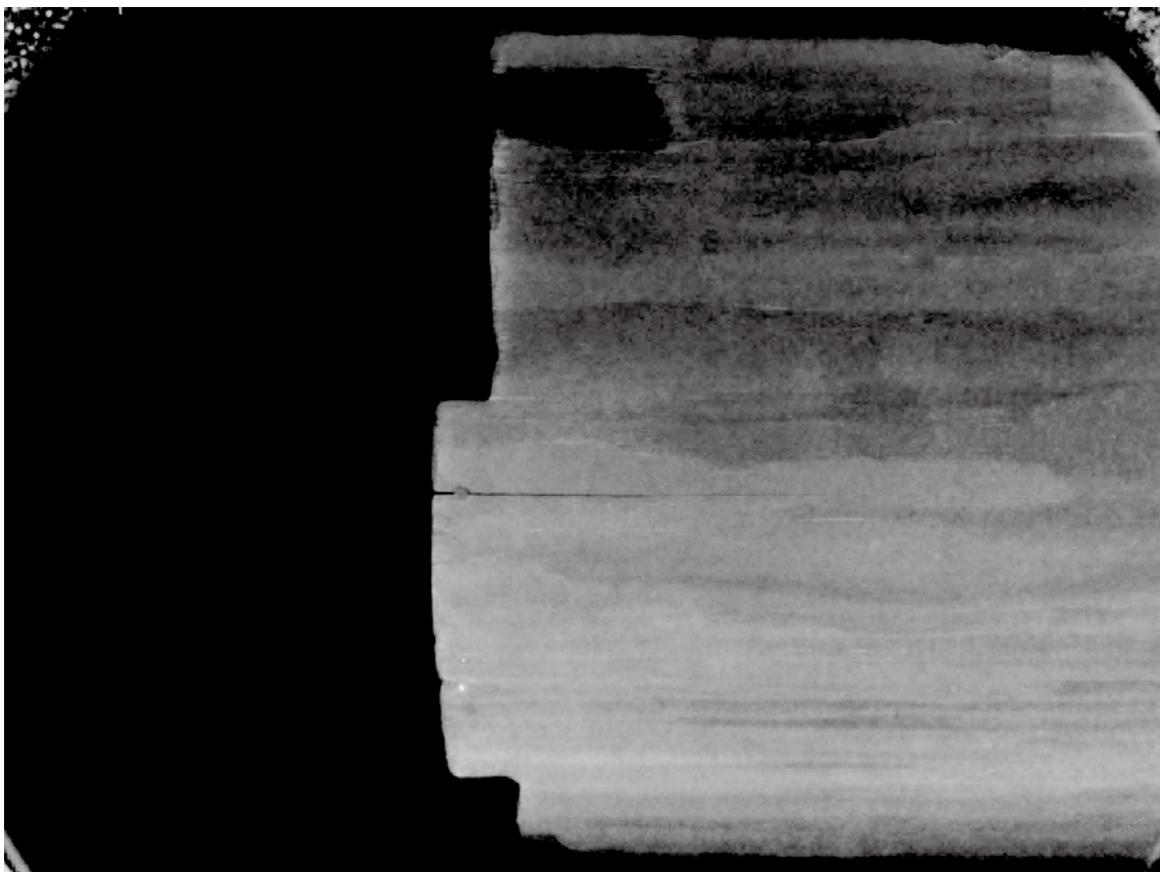


No.3-3 (同上)

第58図 木櫃 X線写真4

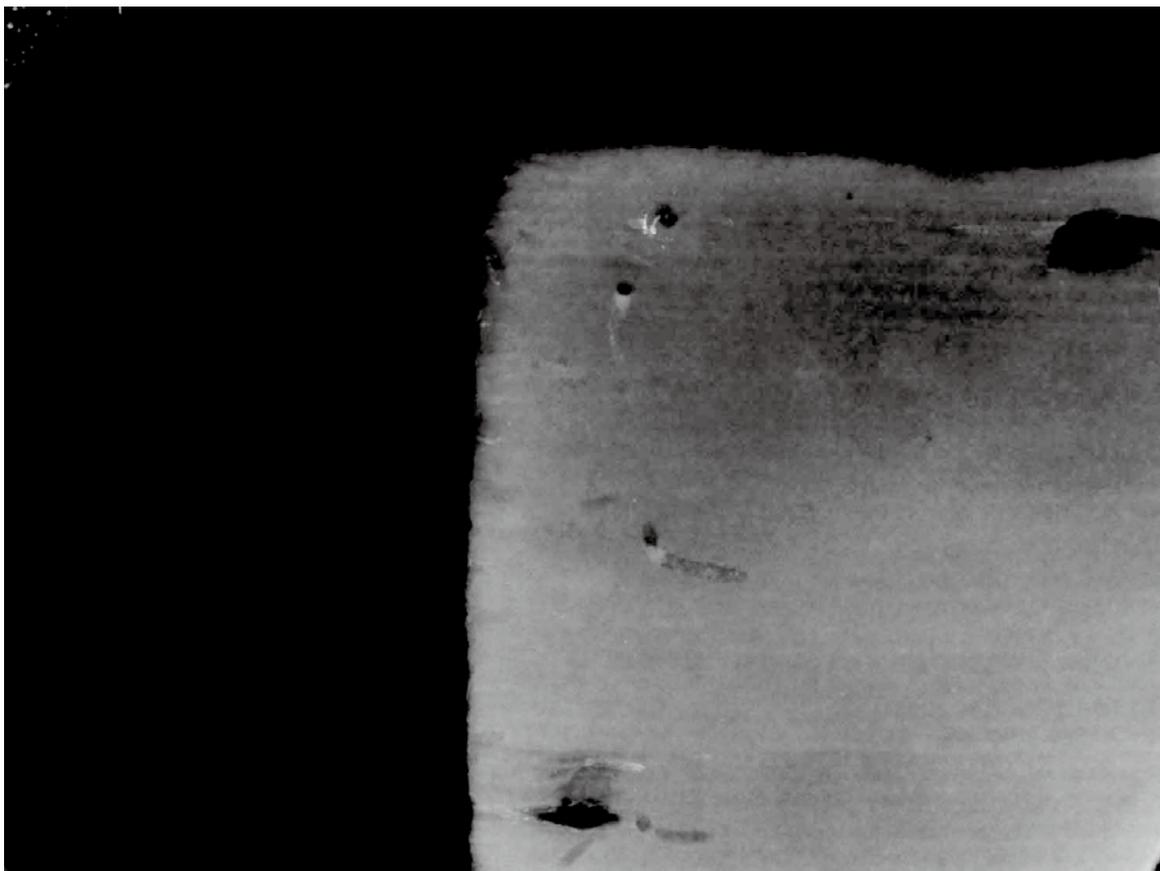


No.3-4 (報告番号 7)

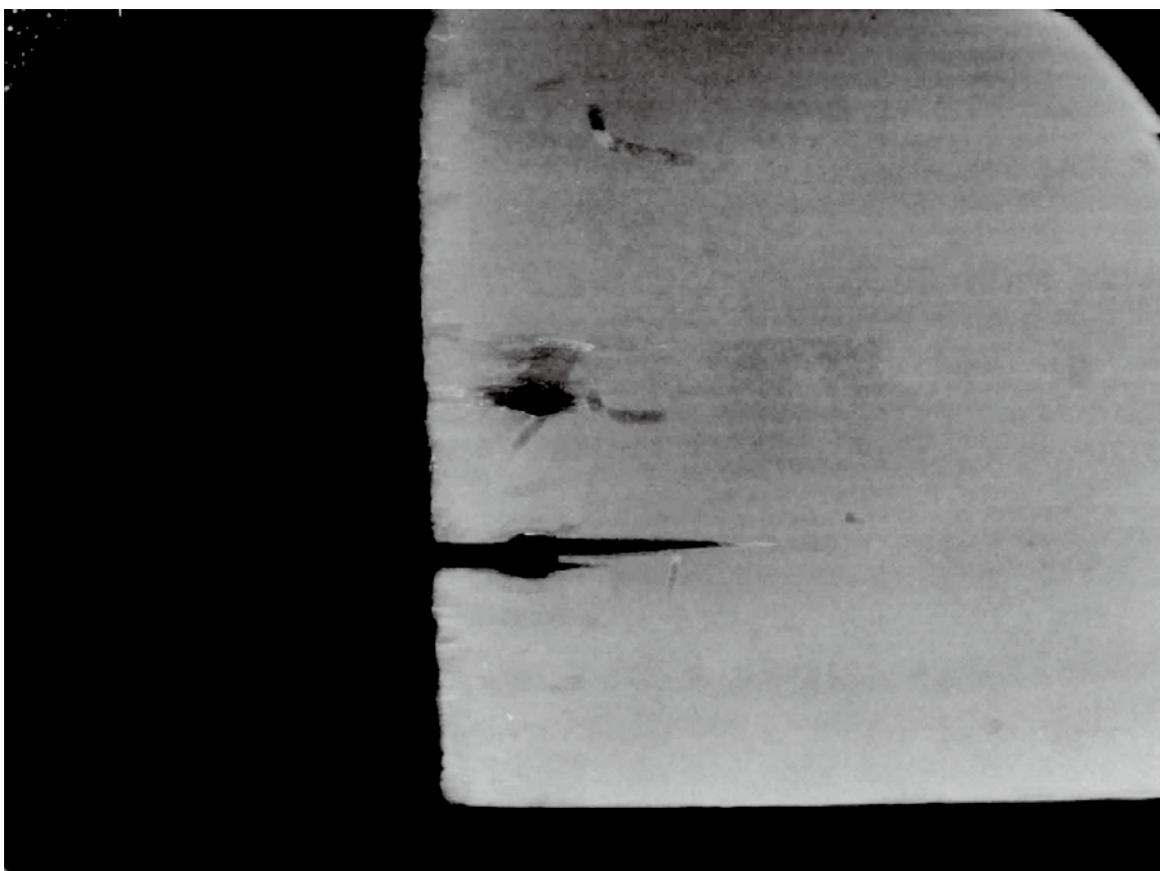


No.4-1 (報告番号10)

第59図 木櫃X線写真5



No.9-1 (報告番号16)



No.9-2 (同上)

第60図 木櫃X線写真6

第5章 まとめ

今回の調査は、道路の拡幅工事に伴う小規模なものである。しかし、調査地である我堂の集落部分は近世には集村化していたこともあり、遺跡としての実態は全く知られておらず、新たに判明した事は少なくない。小規模な調査のため、詳細は将来の調査に委ねるにしても、平安時代と鎌倉時代の屋敷地の確認できた事が大きな調査成果である。ここでは明らかになった事を列記し、まとめとする。

(1) 遺跡の変遷 報告した遺構・遺物から以下のような変遷が確認できる。

①平安時代 9世紀が本調査地の盛行期である。一部に8世紀後半に遡る土器が出土しているも、明確になるのは9世紀初頭以降である。A区の生産域とB～G区の屋敷地からなる。屋敷地の範囲はB区東端の溝2001とG区西端の溝7001の間と考えられ、その間の遺構は濃密である。この屋敷地は9世紀前半に主体があると考えられ、10世紀には続かない。

10世紀の遺構としては、屋敷地からは離れた西区の井戸4019がある。西区で唯一の平安時代の遺構であり衰退傾向にあると考えられる。本段階の評価は今後の周辺での調査成果によりたい。

平安時代後期の瓦が多く出土している。西区西半で確認された中世後期の整地土からの出土であり遺構は明確でない。平安時代後期を主体にしつつも、中世初期の軒平瓦(247)も1点含まれる。特異な瓦当文様が多い。後述する中世初期段階には、周辺に寺院が存在したと考えられる。

②中世 遺構は濠5001より西側に集中する。11世紀後半～12世紀の遺構(井戸6052、土坑6025、柱穴6051等)があるが希薄である。遺物量から見ると、盛期は13世紀以降であり、その段階には濠5001も機能していたと考えられる。遺物の大部分は本段階であるが部分的に14・15世紀の遺物も含まれる。F区の整地土上面は明確な中世後期を含む遺構面である。その上面で土坑と井戸を検出しており、いずれからも瓦質土器が出土した。また他にもE区西端で残存した土坑5029も本段階の遺構である。遺物量は少ない。中世初頭には出現し、中世前期を盛期にしつつ、中世後期前半の15世紀程度まで衰退傾向を示しつつ存続したと考えられる。

③近世 D区の東端で近世の民家に関わるであろう土坑や溝、E～F区で若干の遺物を確認した。またB区溝2001の埋没後に同じ位置で確認された盛土、G区溝7001上層は近世の我堂集落内の区画に関わる遺構である。平安時代初頭の屋敷地の区画溝である溝2001直上の盛土は、近世以降に築造された集落内の道と考えられる。また溝7001は、平安時代初頭の屋敷地の区画溝として掘削された可能性が高く、それ以降中世から近世にかけてその位置が踏襲されてきたものである。いずれの溝も平安時代に出現した区画が、近世の我堂集落の区画として踏襲されていることが確認できた。

(2) 平安時代の屋敷地について 平安時代の遺構は調査区の東半に集中する。調査区西半では、平安時代の遺構は希薄で、井戸4019の他いくつかの柱穴があるにすぎない。平安・鎌倉時代ともに、同時代の居住域を示す遺構が広がりを持って分布するわけではない。

屋敷地は、周囲を区画する溝と考えられるB区溝2001とG区溝7001の範囲であり、その規模は東西約58.5mである。その間が掘立柱建物群や井戸・土坑等からなる居住域であり、溝2001より東が田畑と考えられる生産域である。生産域での同時期の柱穴、居住域での鋤溝等は確認できず、土地利用の在り方

は、当初から明確に分かれていたと考えられる。溝7001より西には、10世紀後半の井戸4019が確認できるのみで土地利用の在り方は不明である。なお溝2001は、条里地割の坪界に位置するが、軸は条里地割より若干西に振る。

A区南北溝群は畑の畝溝と考える。通常の鋤溝は、無数の東西南北方向の耕作痕の集積であるに対して、この南北溝群は地山粘土面に規則的に掘り込まれる。削平により本来の耕作土は残らない。形成時期は不明であるが、畝溝の埋土から須恵器、土師器と黒色土器A類の細片が出土している。瓦器等の中世以降の遺物は含まれておらず、平安時代屋敷地に対応する生産域と考えておきたい。

屋敷地では9棟の掘立柱建物が復元できた。建物には時期差があり、建物3・4・5、建物9・10は重複し、また建物2・3周囲の多数の柱穴から重複する建物が想定できるので、数回の建て替えが見込まれる。建物1～5の建つ範囲には小型・円形の柱穴が密集し、規模の大きな建物6・9の周囲には柱穴は疎らである。前者の内、位置関係から井戸2130は建物2に伴う井戸の可能性が想定できる。これらは屋敷地内における、建物の機能差・ランク差を示すと考えられる。

屋敷地の時期については、屋敷地内の井戸2130からの出土遺物が参考になる。井戸2130からは糸切り底の須恵器細頸壺や緑釉陶器などから9世紀中頃に位置付けられる。また他の柱穴や土坑からも9世紀代の遺物が出土している。この屋敷地の存続時期の主体が9世紀にあることは確かであろう。一方、屋敷地から離れる井戸4019からは10世紀後半の黒色土器・土師器が出土している。衰退傾向を示しつつも周辺に10世紀に存続する集落があったと考えておきたい。この事は出土遺物において、黒色土器は内面黒色のA類のみで、内外面黒色のB類は確認できないこととも合致する。

溝2001については、埋没後に直上に粘土ブロックによる盛土が確認でき、同じ位置に造られた道の可能性が高い。また溝7001については、中世・近世にかけても溝として機能していたことが確認できる。この位置は、両者共に少なくとも近世以降、現在に至る我堂集落の中を走る南北道路である。つまり現在の南北道路は、区画溝の位置を踏襲しているのである。古代に設定された区画が、近世我堂村の区画割に反映されていることが確認できる。

(3) 中世の屋敷地について 調査区西半に中世の遺構が集中する。遺物の内容からは中世前期が主体である。中世後期の瓦質土器の出土は、土坑3を確認したのみである。なお調査区東半では、G区の溝7001より東に性格不明の土坑7023とC区の耕作によると考えられる溝数条がある。濠5001と溝7001の間の空白域を挟み、溝7001より東が生産域、濠5001より西が居住域と考えておきたい。

中世の遺構面はF区西半において2面を確認している。濠5001より西の地山面は起伏が激しく、F区では北東部が高く南西に向かって急激に低くなる。この低い部分に多量の瓦や瓦器等を含む粘質土で整地が確認できた。整地土から出土した瓦器(第46図224)により、整地は13世紀末頃以降になされたと考えられる。この整地土上面で検出した遺構には瓦質土器が入り、中世後期の遺構を含んでいる。なお下面の井戸6052等は11世紀後半～12世紀初頭に位置付けられる。

屋敷地は、周囲を区画する溝と考えられる濠5001より西である。この溝は幅5.6m、深さ1.05mの大規模な南北溝で、防御性を備えた事を重視して「濠」とした。この濠5001より西では居住域を示す柱穴、井戸、土坑等が集中し、遺物量も多い。以上の状況から濠5001は屋敷地の区画溝と考えられ、本屋敷地はいわゆる居館・城館の景観を示すものである。なお濠の埋没時期は、出土遺物から14世紀前半以降で

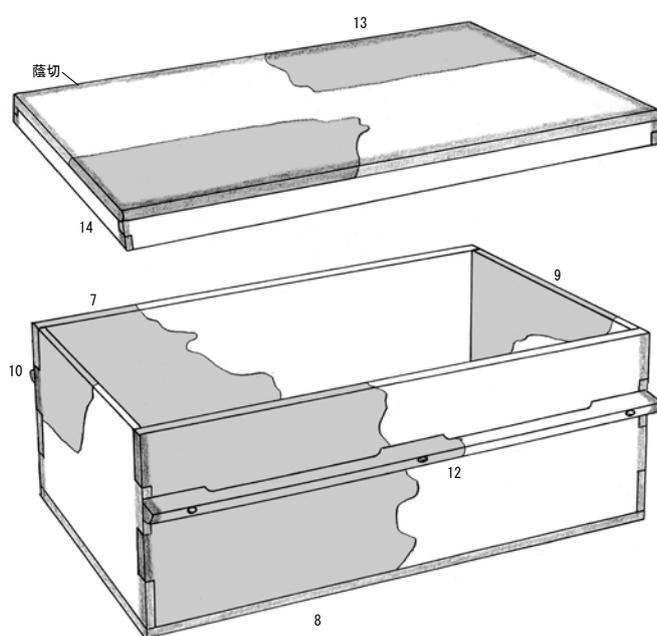
ある。屋敷地内には総柱の掘立柱建物2棟を含む多数の柱穴や数基の井戸・土坑等が検出されたが、出土遺物には11世紀後半～14・15世紀の長期間の遺物を含む。屋敷地は、同じ位置で中世前期を中心に中世後期に踏襲され続けたことを示しており、多数の遺構はその最終形態であって細かく遺構の変遷を追うことは難しい。特に居館・城館としての性格を決定付ける濠5001は当初から存在したとは考えられず、その出現時期は不明であることは明記しておきたい。なお下面で確認できる11・12世紀の遺構は、整地土から出土した瓦に関わる可能性も想定できる。

(4) 木櫃について B区の井戸2130の井戸枠を囲う板材は、複数の家具や不明品を解体して再利用した板材である。井戸自体は9世紀中頃には廃絶しているため、その家具などは9世紀前半あるいは奈良時代のものである可能性もある。井戸最下段を囲う板材には、木櫃の他、案と不明の板材からなる。他に井戸枠内から、木櫃の持ち手が出土しており、井戸枠を構成した材が井戸内に落込んだ可能性が高い。木櫃の板材が特に豊富である。本章では、まとめて出土した木櫃AとBから、形式や規模等の復元を行う。なお木櫃Aとは側板の板材と井戸内から出土した持ち手、木櫃Bとは蓋の天板である。

古代から見られる木櫃には代表的な二つの形式がある¹⁾。身側板に、縦方向に脚を付ける「唐櫃(からびつ)」と、横方向に持ち手を付ける「倭櫃(やまとびつ)」である。木櫃Aには、持ち手がともない、また身側板には持ち手を打ち付ける釘穴の痕跡が確認できるので、「倭櫃」である。なお両者の釘穴は、それぞれの端部から9cmの位置にあるので、同じ個体の部材と考えて間違いない。

木櫃Aの復元 第61図は木櫃A・Bをもとにした復元図であり、そこに出土した板材の位置関係を示したものである。正確には木櫃Aの幅は、短側板9の残存長56cm以上と云うのみであるが、木櫃Bから復元できる72cmに近いと推定して作図した。第3章と重複するが簡単に記載する。

持ち手 持ち手とは木櫃の長側板に横位に装着するものである。両端近くと中央の三箇所を銚あるいは鉄釘で留め、その間の二箇所を刳り方を入れる。持ち手と木櫃の長さは等しい。木櫃Aは一方の先端と中央部が残る。先端部から中央の釘孔までの長さ52.5cmなので、木櫃Aの長さは105cmである。側板の7と8に持ち手を装着した釘孔が残る。釘孔の位置は、上から11.3、11.6cmである。持ち手は、木櫃



身の長側上から11.5cm程度に装着されたことがわかる。

側板 側板が4枚出土した。7と10が組み合う。7と8に持ち手の釘孔が残るので長側板であることがわかる。3枚は短辺が完存しており全て35.5cmである。底板は残らないが、側板の厚さ1.2～1.3cm程度を加算して、木櫃身の高さは37cm程度であろう。なお各側板の内外面は、組み手部分の釘孔の摩耗具合によってわかる。外面側の釘孔の輪郭は磨滅するが、板材どうしが組み合う内面側の釘孔はシャープな方形である。そして外面側の釘孔はすべて木取りの表面となっている。よっ

第61図 木櫃復元図

て木櫃は木表を外面、木裏を内面にして組まれたことがわかる。組み手外面と小口面に黒漆が残る。湿気除けや装飾を目的とする「蔭切（かげさい）」という技法である。

蓋板 蓋は天板と側板からなるが側板は出土していない。1枚の天板を分割し、その内の3枚が板材として出土したもので14は2枚が接合した。なお13と14の間には幅12cmの板材があったと考えられるが残存しない。両者には隅部が残っており対角の位置関係である。蓋側板の装着状況は裏面に付着した黒漆から復元できる。蓋側板は天板と同じ厚さ1.7cmで、天板縁辺から0.3cm内側に天板上面からの鉋で固定される。短辺側の鉋孔によって蓋板の幅が推定できる。報告したように、短辺側には同じ関係で鉋孔があるとすれば蓋板の幅は76cmとなる。天板の法量から木櫃Bの身幅がわかる。身幅は、天板の幅76cmから両側板分の4cmを引いて72cmである。なお天板の長さは、木櫃Aの長さに両側板分4cmを加算して109cmに近いと考えて作図した。蓋上面は木取りの表面である。また蔭切の黒漆は小口面・側面と上面端部の幅2cm程度の範囲内、および蓋側板にかけて施す。

以上の検討から、木櫃Aは長さ105cm、幅72cm、高さ37cm程度の倭櫃と考えておきたい。

遺跡出土の木櫃としては15例が確認できる。時期は7世紀中頃から9世紀であり、脚のみが溝から出土した2例以外は全て井戸枠として出土している。今回の資料には少なくとも3合の木櫃があり16～18例目になる。一つの遺構から複数の出土は初例である。また木櫃底板の可能性のある板材15も含めれば4合になるのだが、木櫃Bと板材15は同じ厚さの板材なので、同一個体の可能性がある。なお木櫃Aは倭櫃であるが、他は倭櫃か唐櫃かわからない。

木櫃の中で全体の法量がわかる事例が8合ある。その内4合は長さ92～90cm、幅64～60cm(内1例は56cm)、高さ46～40cm程度で最も多い。形式不明の1合以外は倭櫃であり規格化された一群であることを示している。一方でそれ以外の4合は法量に統一性のない状況であったのだが、平城京跡左京五条四坊十六坪出土の8世紀後半の事例²⁾が今回出土資料の法量と近似する。その法量は長さ105.0cm、幅69.5cm、高さ39.0cmである。スギの白木材であることも共通する。しかし側板が8枚組接ぎであり唐櫃であることは異なる。その他の事例としては、正倉院に伝わる木櫃³⁾にも同様の法量の櫃がある。そこには唐櫃、倭櫃を問わず、大和川今池遺跡や平城京跡出土資料と近似する法量を示す木櫃が散見される。今回の資料も規格化された一群の資料の範疇でとらえることができよう。

註

- 1) 鶴山まり「櫃—その系譜と展開—」『古事』天理大学考古学研究室紀要第2冊 1998年 鶴山氏からは、遺物整理の段階から、他遺跡の事例や文献等多くの教示を得た。
- 2) 奈良市埋蔵文化財調査センター「1. JR奈良駅南特定土地地区画整理事業に係る発掘調査」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成22(2010)年度』2013年
- 3) 関根真隆「正倉院古櫃考」『正倉院の木工』日本経済新聞社1978年

報告書抄録

ふりがな	やまとがわいまいけいせき							
書名	大和川今池遺跡							
副書名	都市計画道路堺港大堀線整備事業に伴う発掘調査							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2016-6							
編集著者名	山田隆一							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351(代表)							
発行年月日	2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
やまとがわいまいけ 大和川今池 いせき 遺跡	おおさかふまつばらしあまみ 大阪府松原市天美 がどうごらくちようめ 我堂五・六丁目	27217	12	34° 34' 59"	135° 31' 36"	20150201～ 20150331 20150401～ 20150529 20160105～ 20160129	290㎡ 220㎡ 110㎡	記録 保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大和川今池 遺跡	集落跡	平安 鎌倉	畑、溝、柱穴、 土坑、井戸ほか 濠、溝、柱穴、 土坑、井戸ほか	土師器、須恵器、 陶磁器、木器、瓦 ほか 土師器、須恵器、 瓦器、陶磁器、瓦 ほか				
要約	<p>調査によって、新たに平安時代と鎌倉時代の屋敷跡が確認できた。</p> <p>調査区の東側では、平安時代の屋敷跡が見つかった。南北溝を境にして、東が畑と考えられる生産域、西が建物の建つ居住域に分かれる。居住域では掘立柱建物9棟や土坑、溝、井戸等が見つかった。</p> <p>調査区の西側では、鎌倉時代の屋敷跡が見つかった。南北方向に掘られた濠は、屋敷のまわりを方形に囲む濠の一部と考えられる。濠に囲まれた範囲では、掘立柱建物2棟を含む多数の柱穴や土坑、溝、井戸等が見つかった。</p> <p>なお整地土から平安時代後期から鎌倉時代の瓦が多量に出土しており、付近に寺院が存在したと考えられる。</p>							

大阪府埋蔵文化財調査報告2016-6

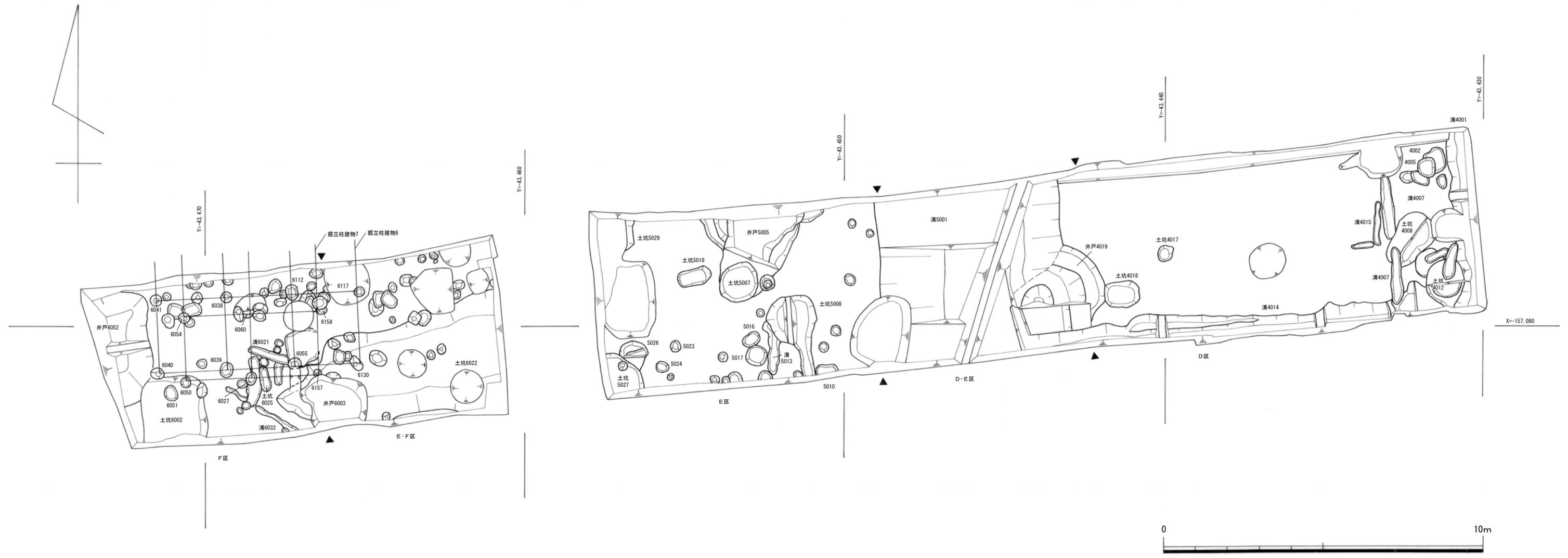
大和川今池遺跡

—都市計画道路堺港大堀線整備事業に伴う発掘調査—

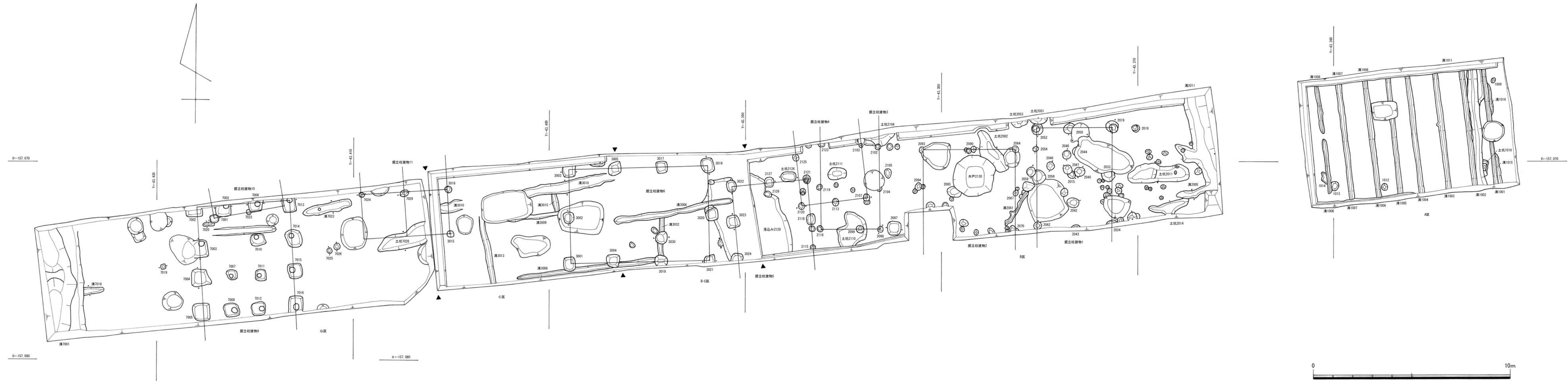
発行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成29年3月31日

印刷 株式会社 近畿印刷センター
〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号



第29図 西区遺構平面図

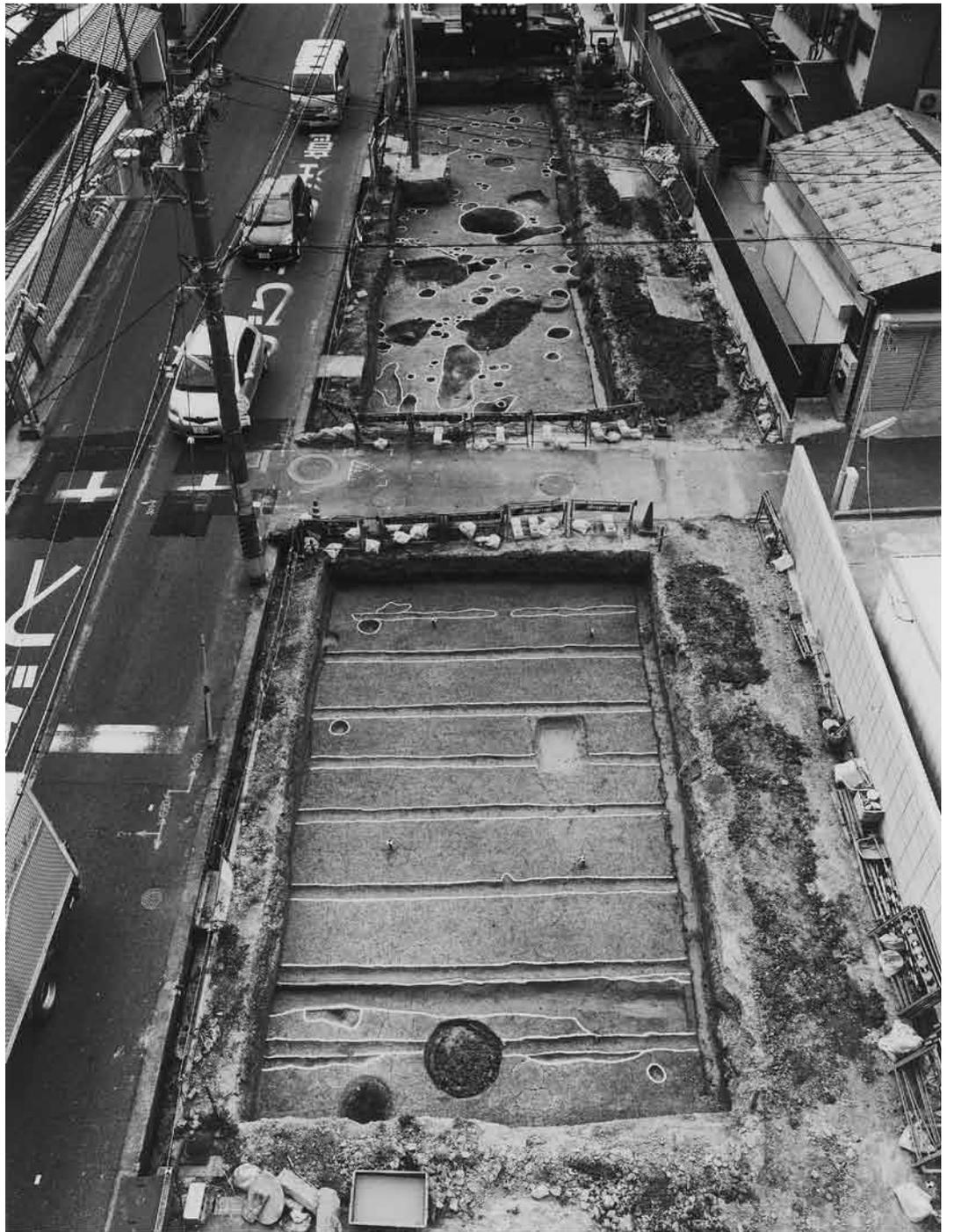


第6図 東区遺構平面図

図 版

遺物図版については、文化財保護課ホームページ埋蔵文化財情報からカラー版がダウンロードできます。

<http://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/index.html>



a. A・B区全景
(東から)



b. A区北壁土層断面
(南西から)



a. B区全景(西から)



b. B区北壁土層断面
(南西から)



a. 溝2001全景
(南から)



b. 溝2001断面
(南から)



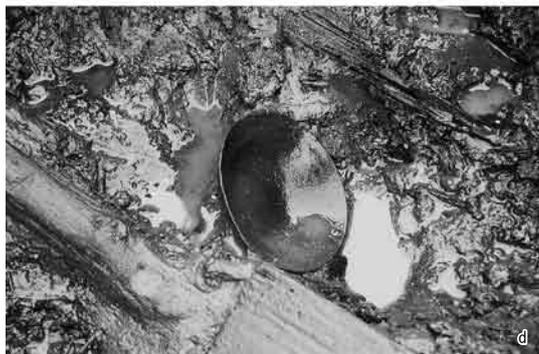
c. 落込み2129全景
および断面 (東から)



a. 井戸2130(東から)



b. 井戸2130埋土
上半断面(西から)



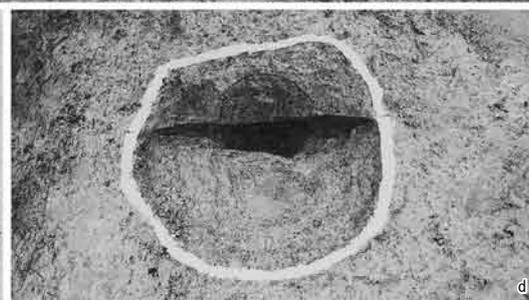
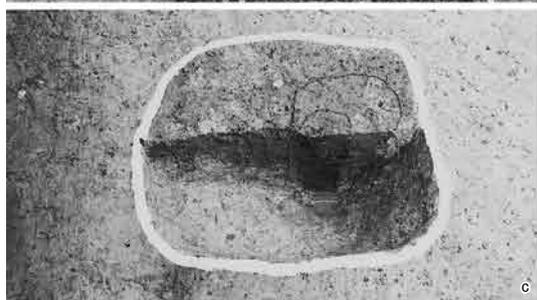
c ~ e. 井戸2130
下半の掘削状況



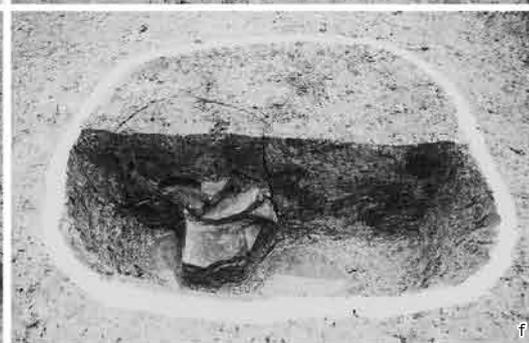
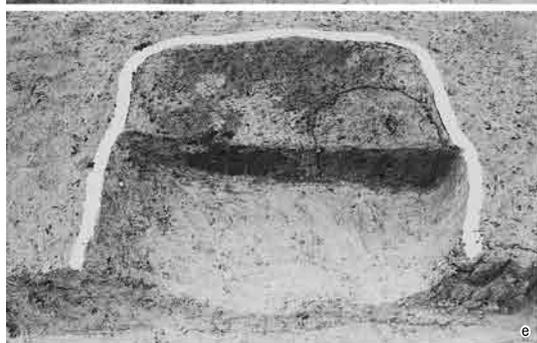
f ~ h. 井戸2130下半
の構造(北東から)



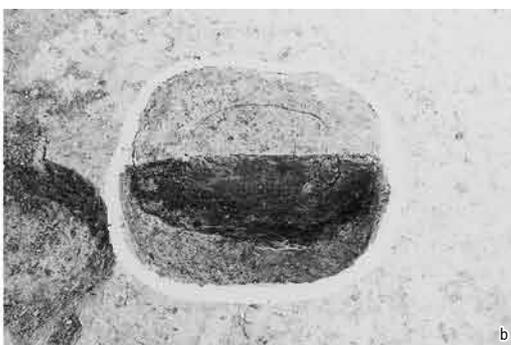
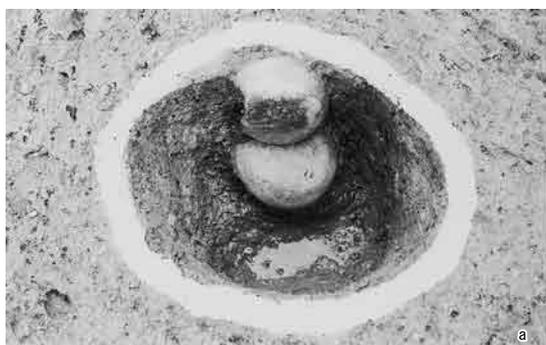
a・b. 掘立柱建物6
(西から)



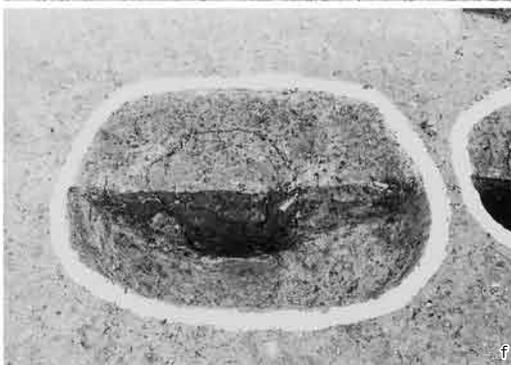
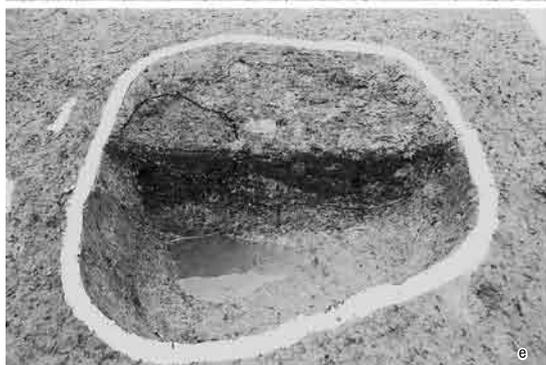
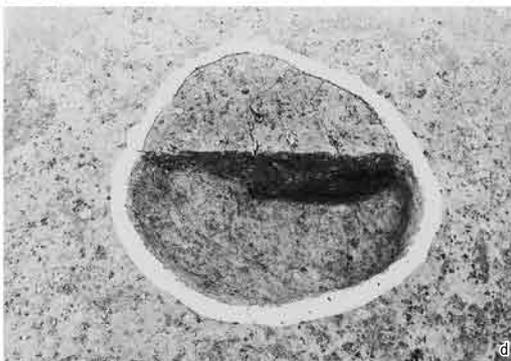
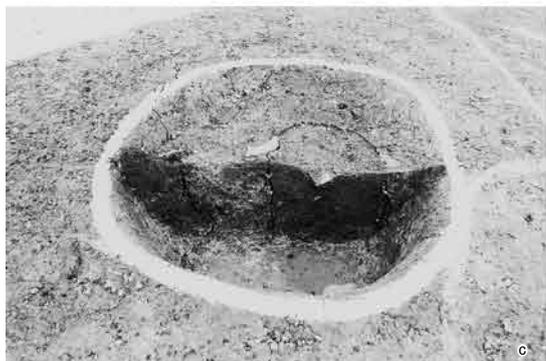
c～g. 掘立柱建物6 柱穴断面
(c.3001、d.3002、e.3003、
f.3019、g.3021)



h. 掘立柱建物6 柱穴3021
検出状況 (北から)



a. 掘立柱建物3柱穴2098
遺物出土状況(東から)



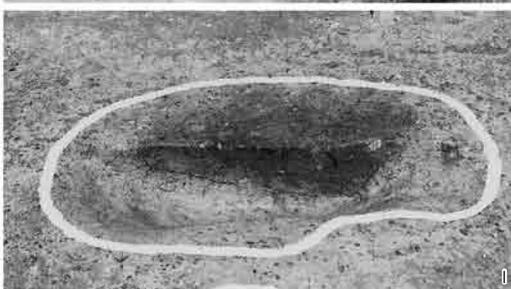
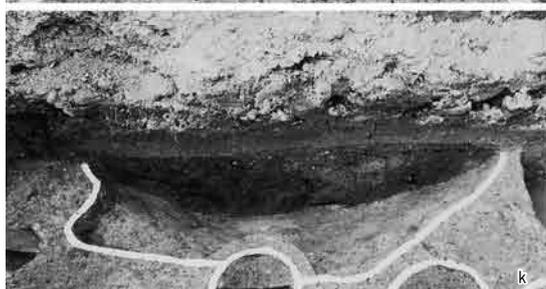
b ~ f. 掘立柱建物5柱穴断面
(b. 2127、c. 3022、d. 2121、
e. 3023、f. 2118)



g. 柱穴2048遺物
出土状況(南から)



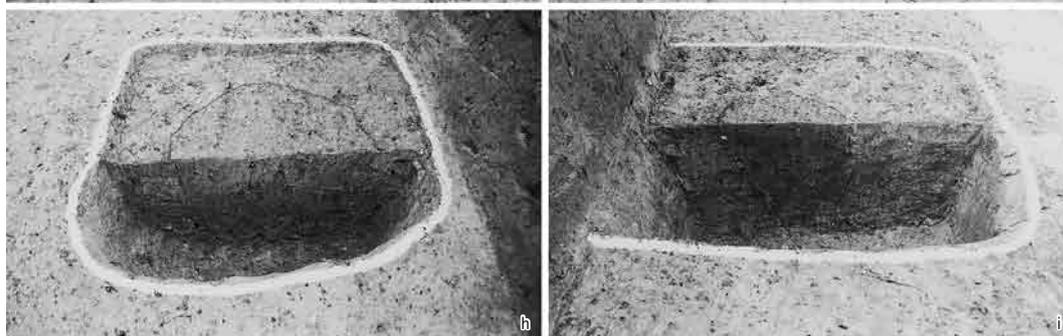
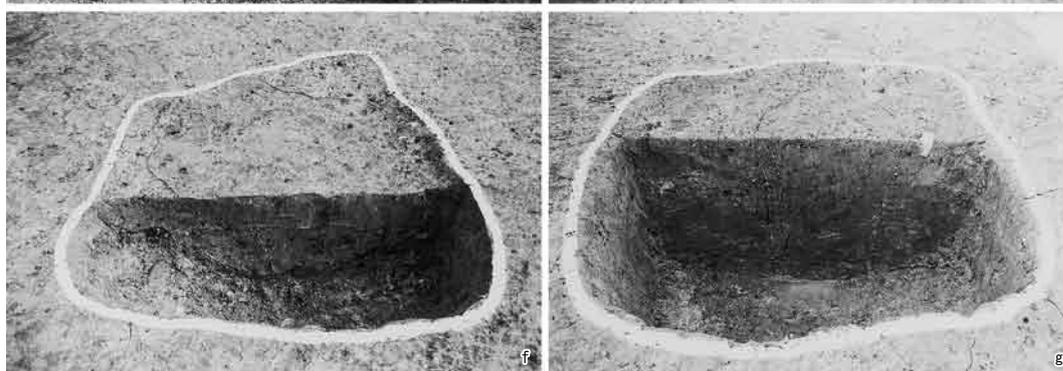
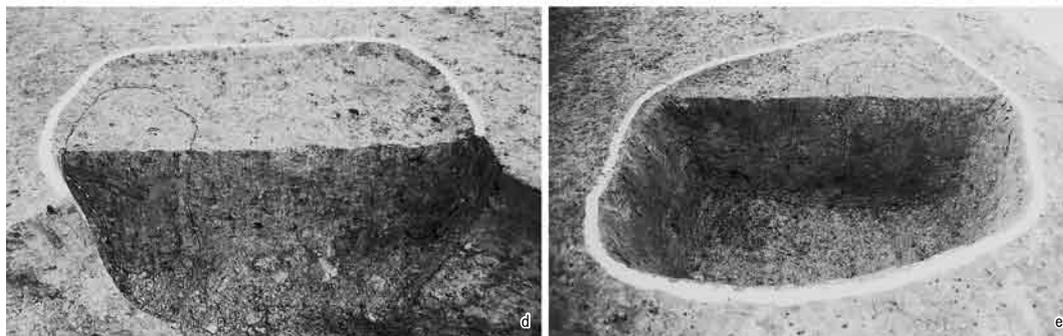
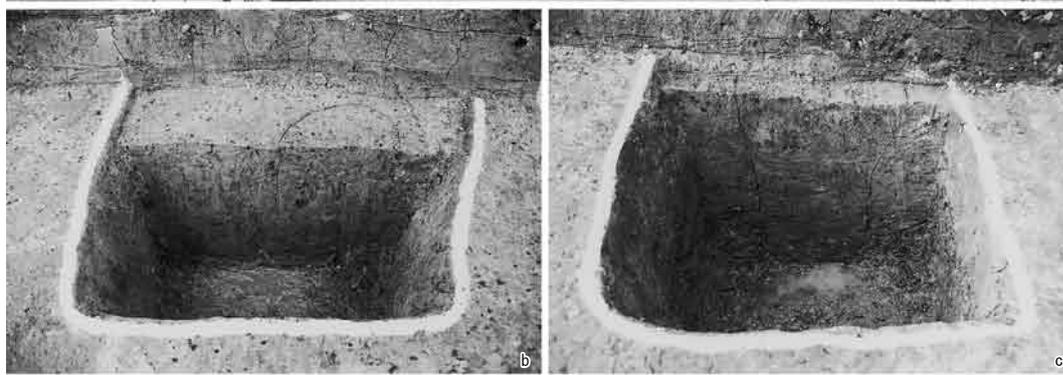
h・i. 溝埋土断面
(h. 2014、i. 3010)



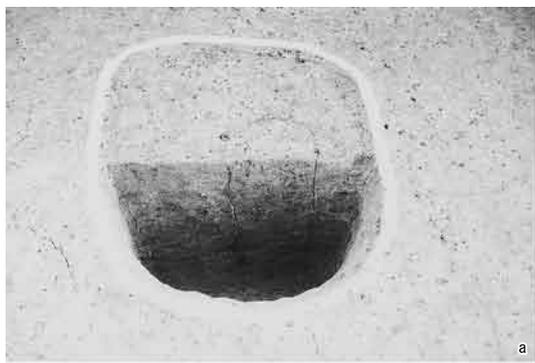
j ~ l. 土坑埋土断面
(j. 2082、k. 2104、
l. 2111)



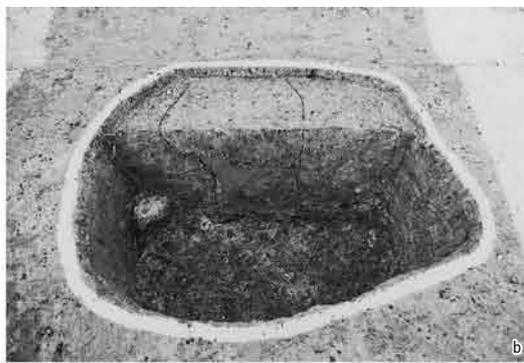
a. 掘立柱建物9他(東から)



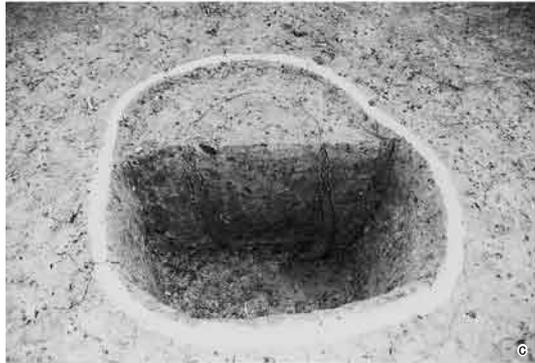
b～i. 掘立柱建物9柱穴断面
(b. 7009、c. 7013、d. 7003、
e. 7014、f. 7004、g. 7015、
h. 7005、i. 7016)



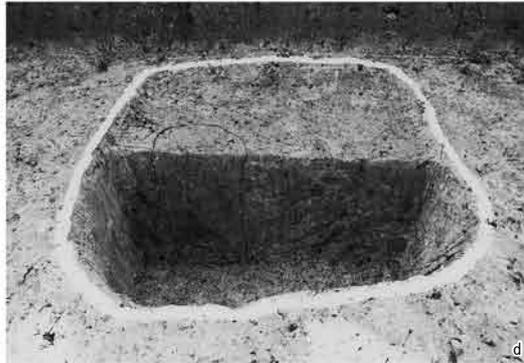
a



b

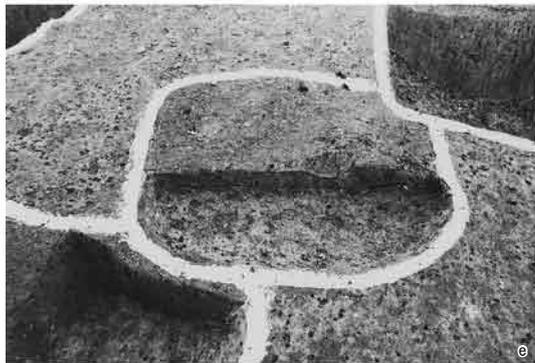


c

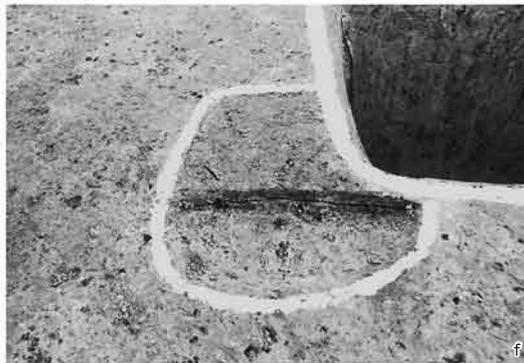


d

a ~ d. 掘立柱建物9
柱穴断面
(a. 7011、b. 7010、
c. 7007、d. 7012)



e



f

e・f. 掘立柱建物10
(f. 7021、g. 7022)



g

g. 溝7001(南東から)



h



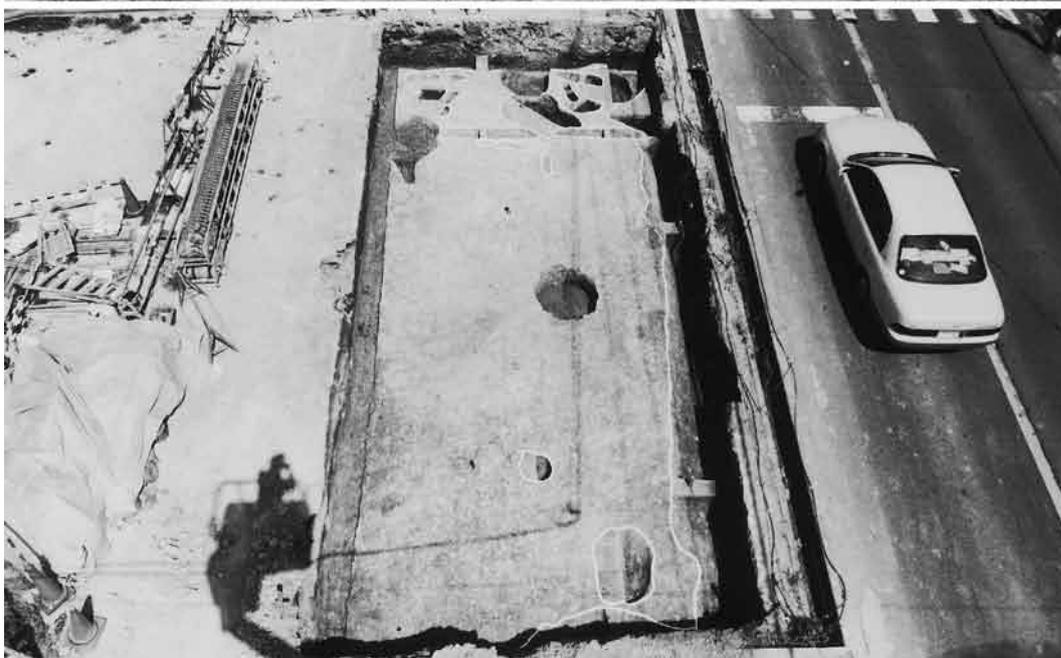
i

h・i. 土坑埋土断面
(h. 7023、i. 7028)

a. F区上面遺構
(東から)



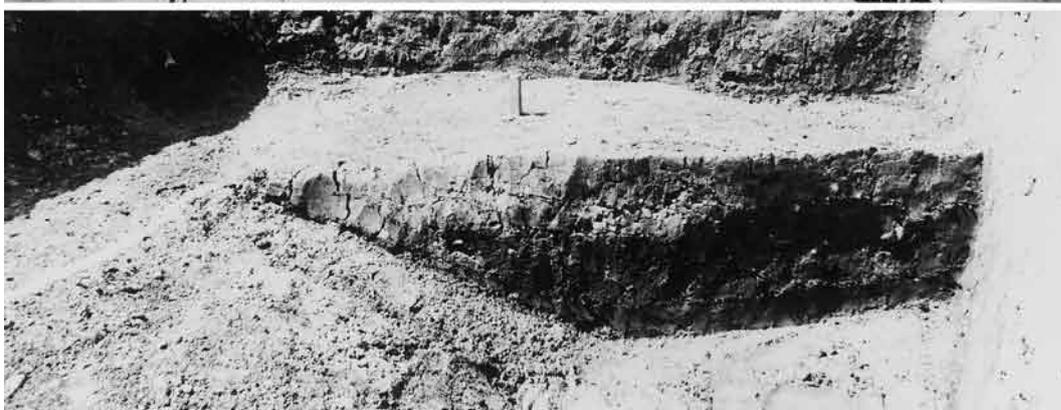
b. D区全景
(西から)



c. 濠5001全景
(西から)

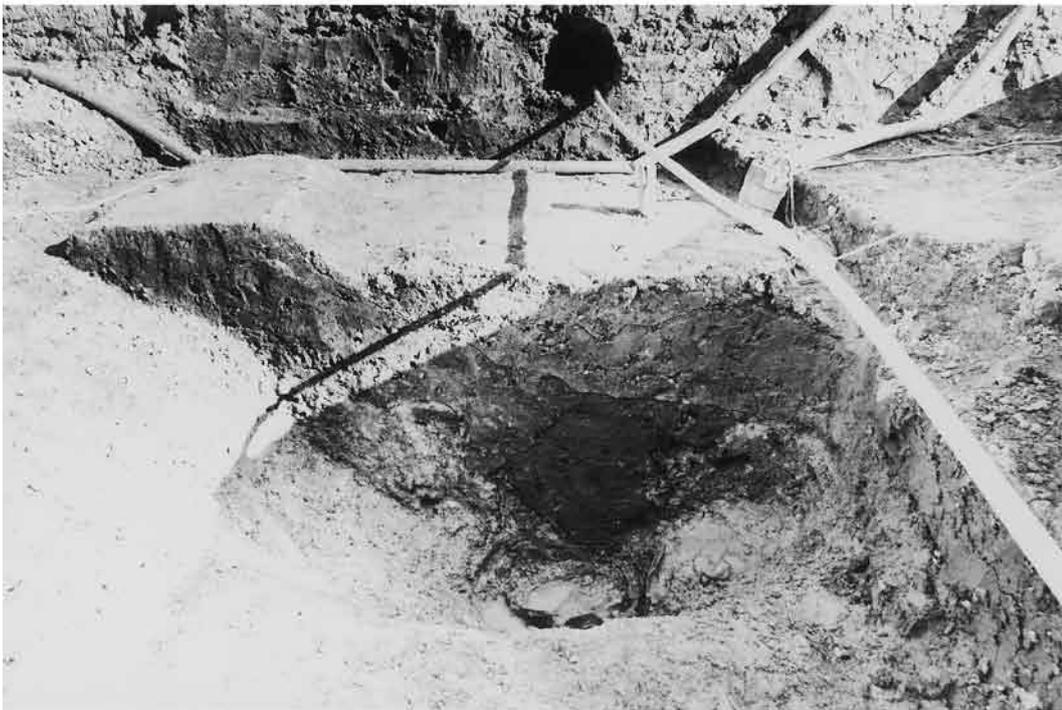


d. 濠5001断面
(南から)





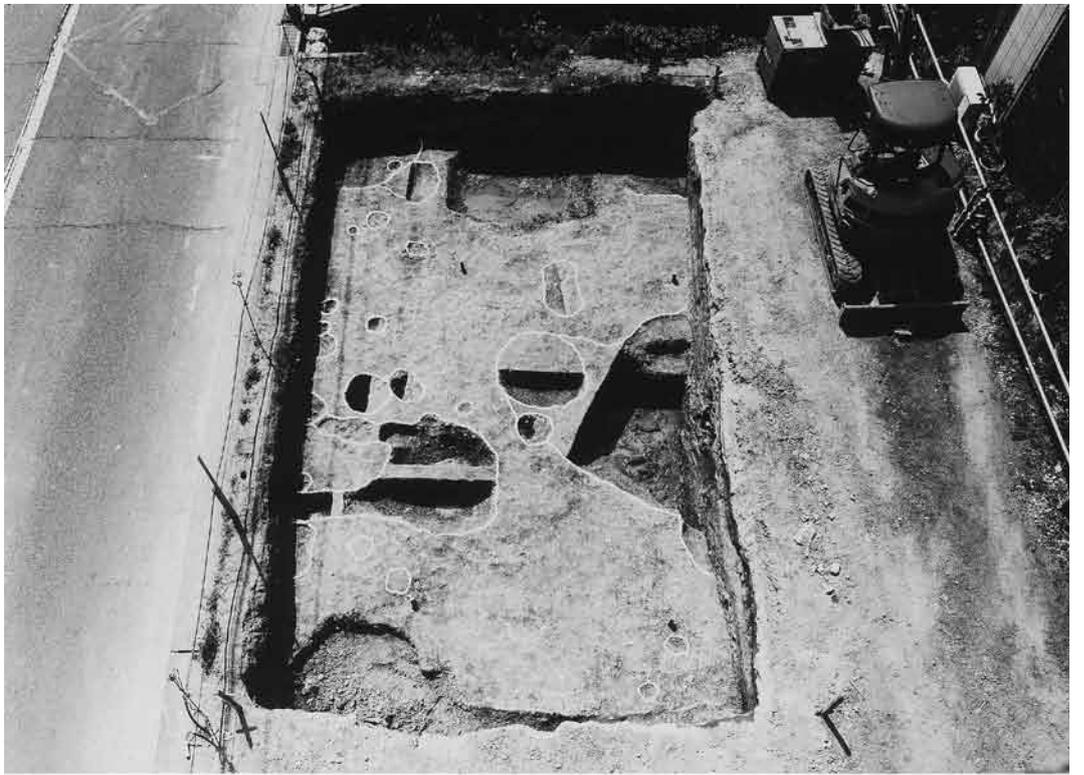
a. 井戸4019(東から)



b. 井戸4019掘削状況
(北から)



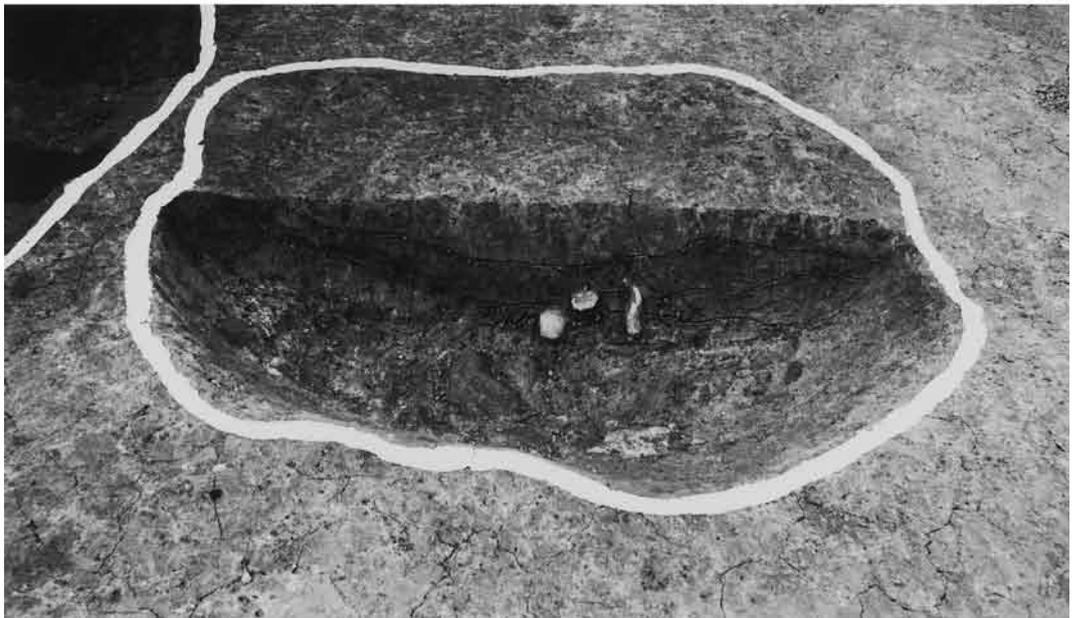
c. 井戸4019遺物出土状況
(南から)



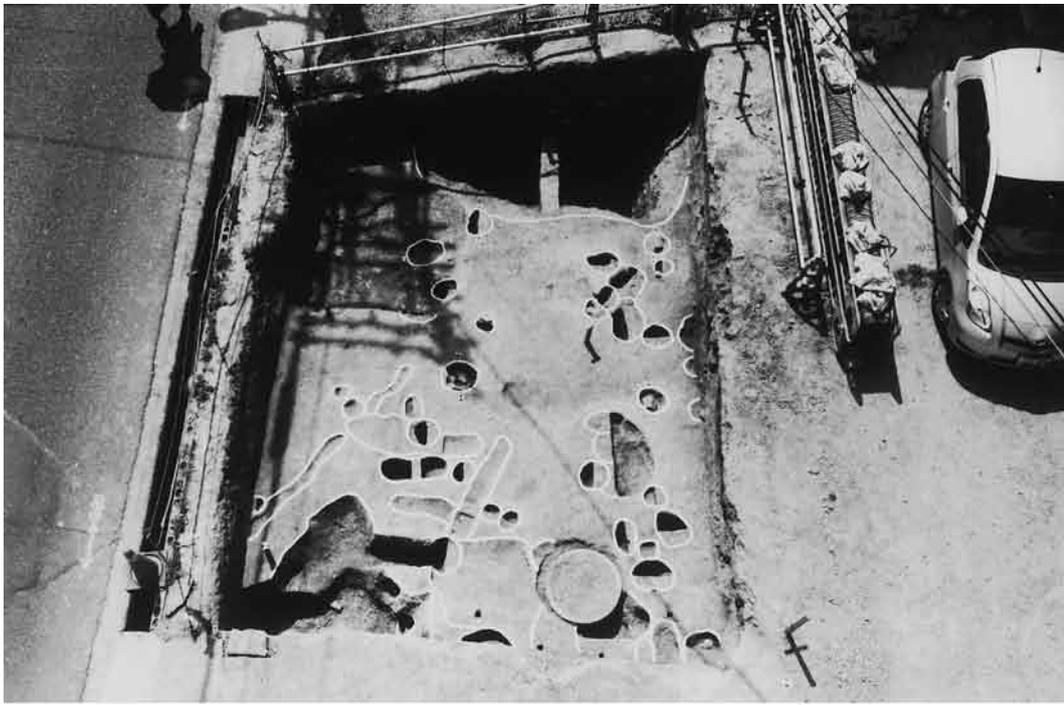
a. E区全景 (東から)



b. 井戸5005全景
(北から)



c. 土坑4018全景
(南から)



a. F区全景（東から）



b. E-F区全景（東から）



c. F区西半の整地土層
（南東から）



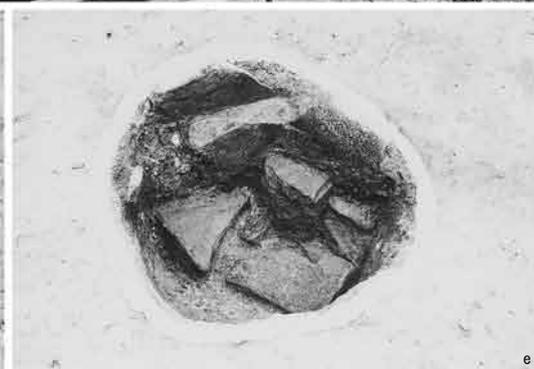
a. 井戸6052全景
(東から)



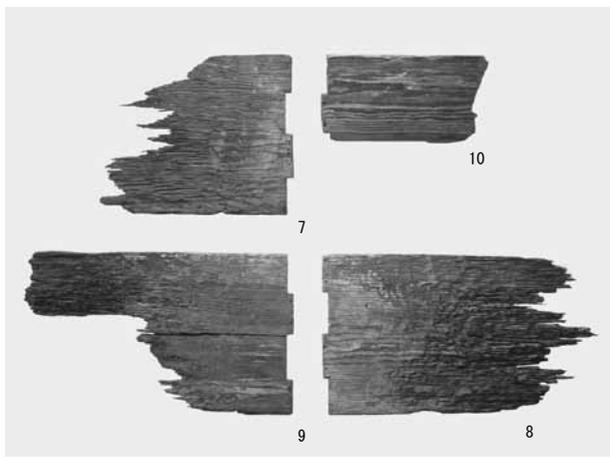
b. E-F区東壁断面
(西から)



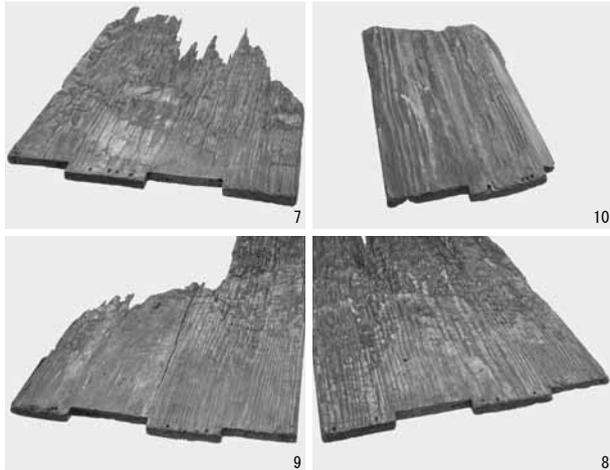
c. F区遺構掘削状況
(西から)



d・e. 掘立柱建物8柱穴断面
(d. 6038、e. 6039)

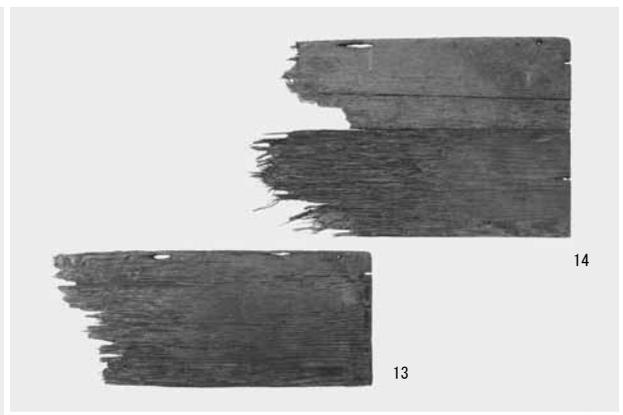


a. 井戸2130梓板 1

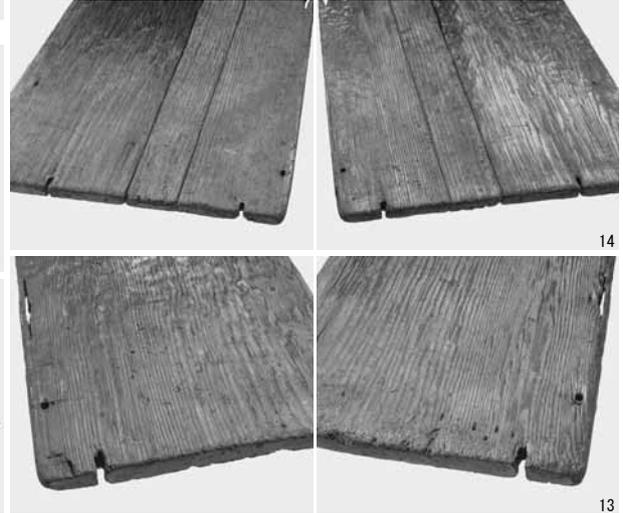


b. 同上細部

i 東区、井戸2130梓板(1)

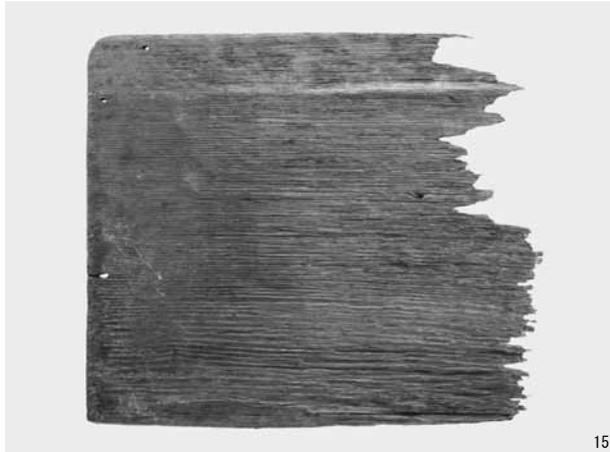


a. 井戸2130梓板 2



b. 同上細部

ii 東区、井戸2130梓板(2)

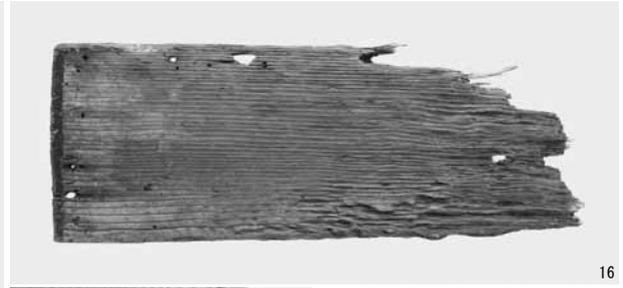


a. 井戸2130梓板 3

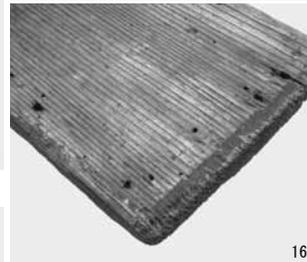


b. 同上細部

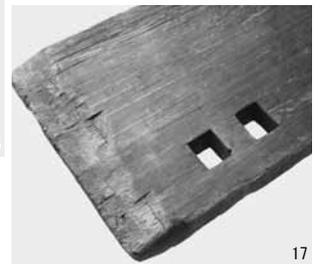
iii 東区、井戸2130梓板(3)



a. 井戸2130梓板 4 (左下:細部)



16

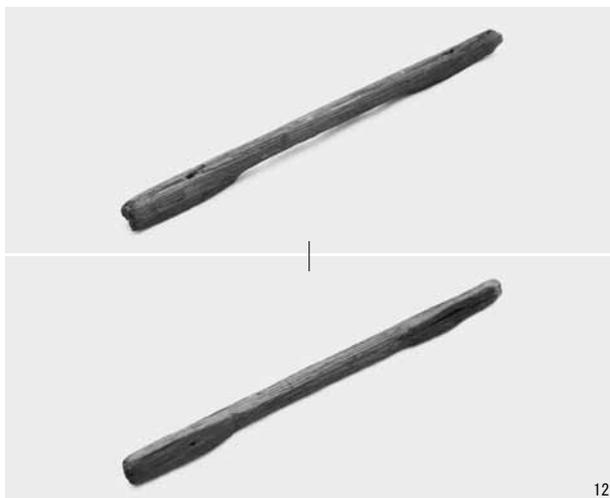


17

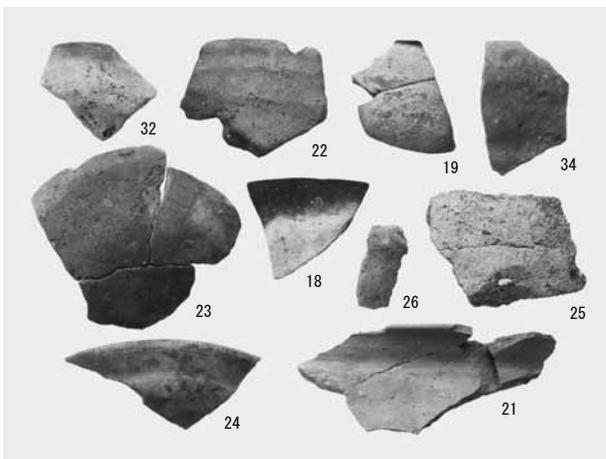


b. 井戸2130梓板 5 (右上:細部)

iv 東区、井戸2130梓板(4)



12

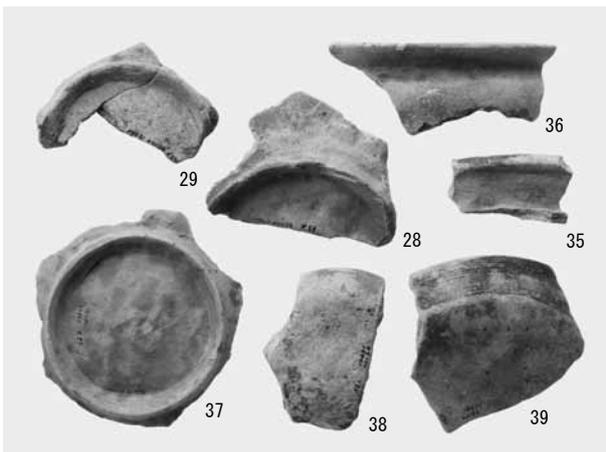


a. 井戸2130出土遺物 1



44

45



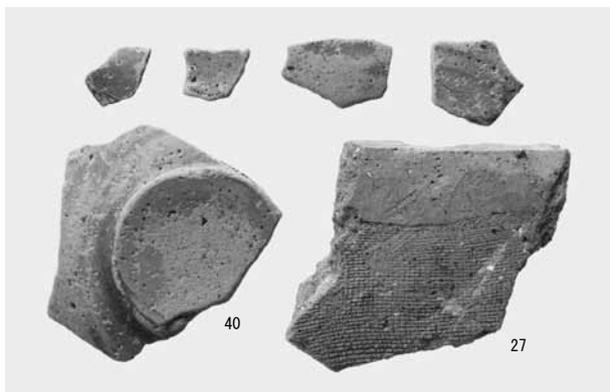
b. 井戸2130出土遺物 2



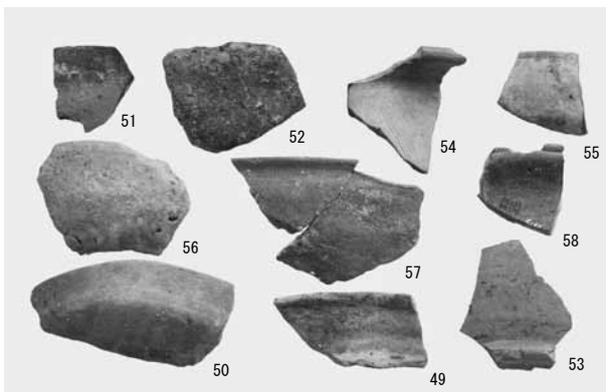
43

井戸2130出土遺物(木器)
i 東区、井戸2130出土遺物(1)

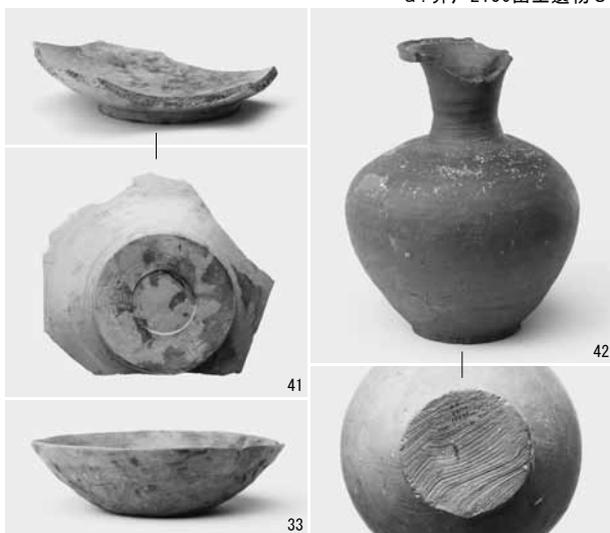
ii 東区、井戸2130出土遺物(2)



a. 井戸2130出土遺物 3

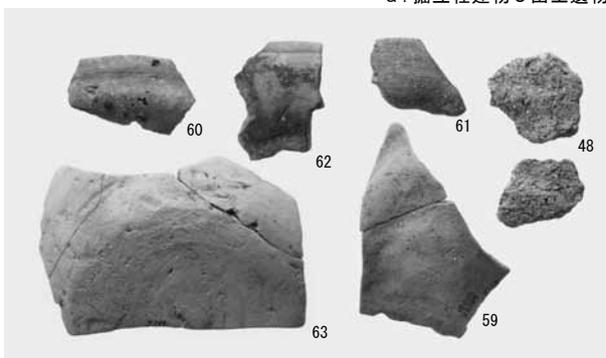


a. 掘立柱建物 5 出土遺物

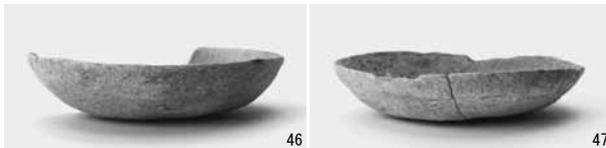


b. 井戸2130出土遺物 4

iii 東区、井戸2130出土遺物(3)

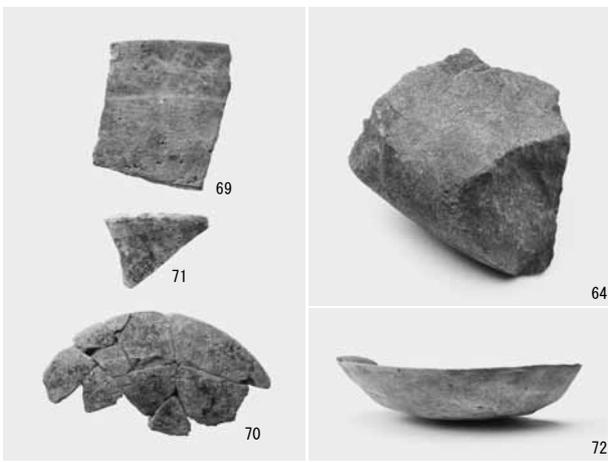


b. 掘立柱建物 4・6 出土遺物

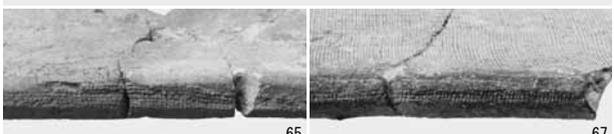
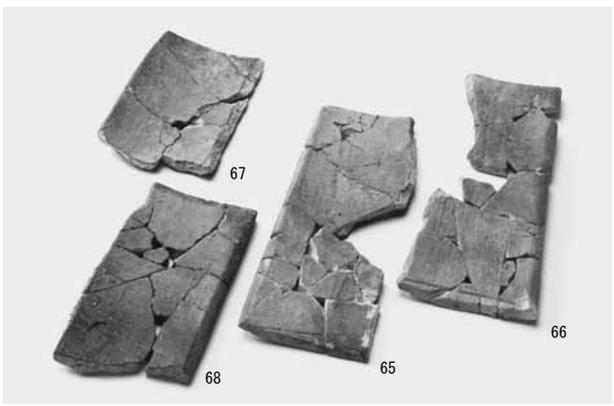


c. 掘立柱建物 3 出土遺物

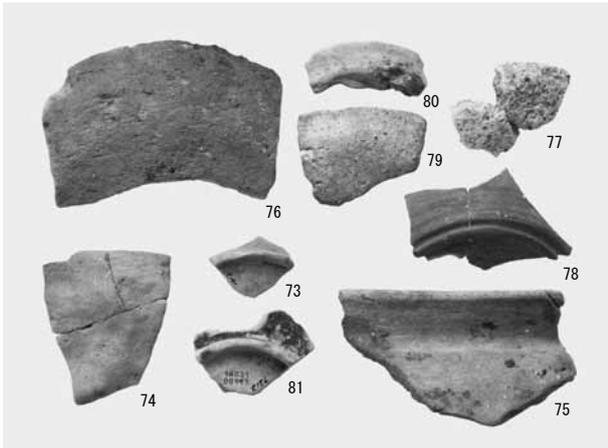
iv 東区、掘立柱建物出土遺物



a. 掘立柱建物6・9・10他出土遺物

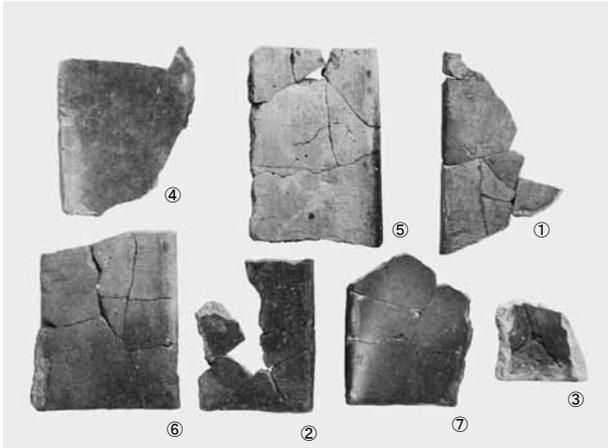


掘立柱建物6 柱穴3021出土遺物(上段凹面、中段凸面、下段細部)
ii 東区、掘立柱建物6出土遺物

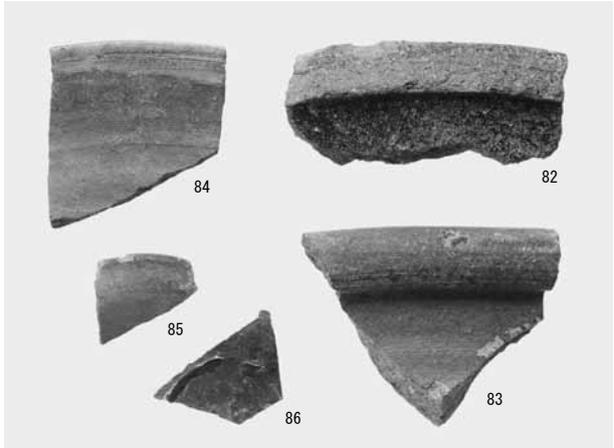


b. その他遺構出土遺物

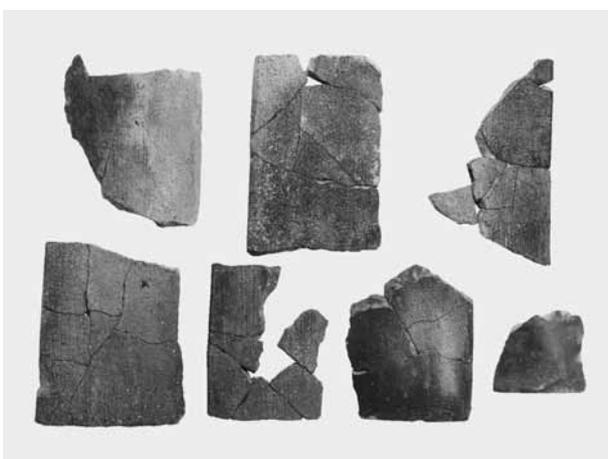
i 東区、掘立柱建物他出土遺物



a. 掘立柱建物6 柱穴3021・3019出土遺物

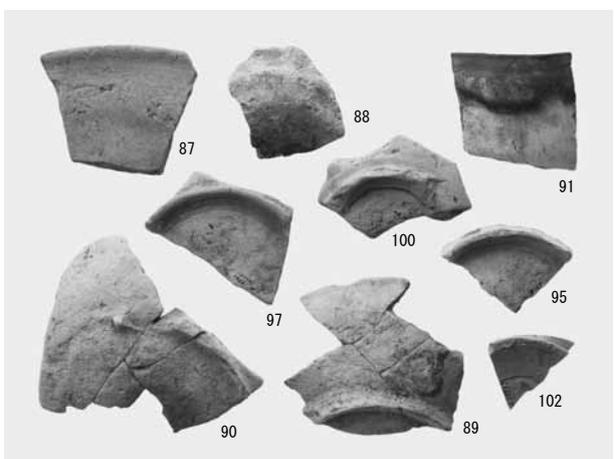


a. 濠5001出土遺物



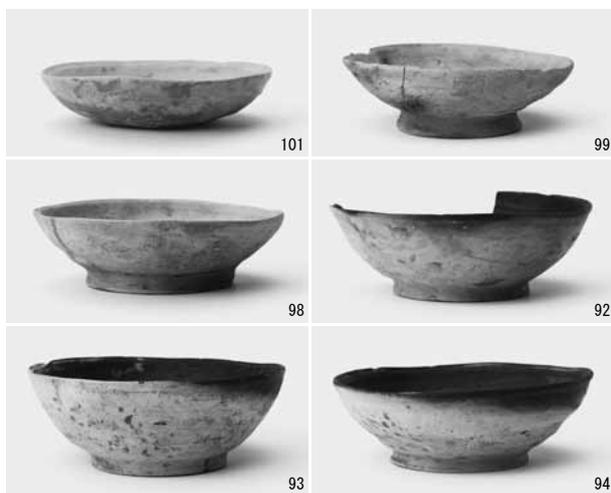
b. 同上(凸面)

iii 東区、掘立柱建物6出土遺物(2)

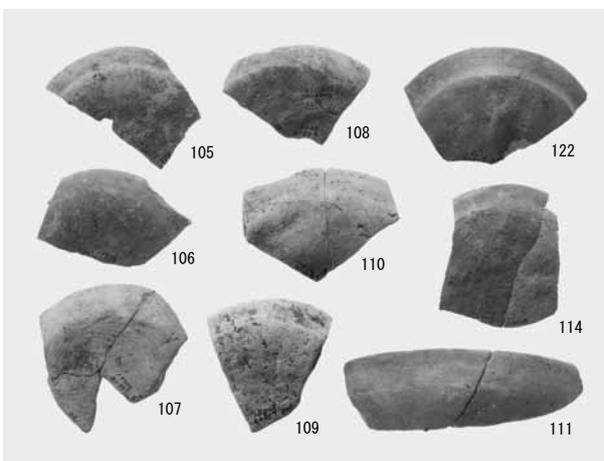


b. 井戸4019出土遺物 1

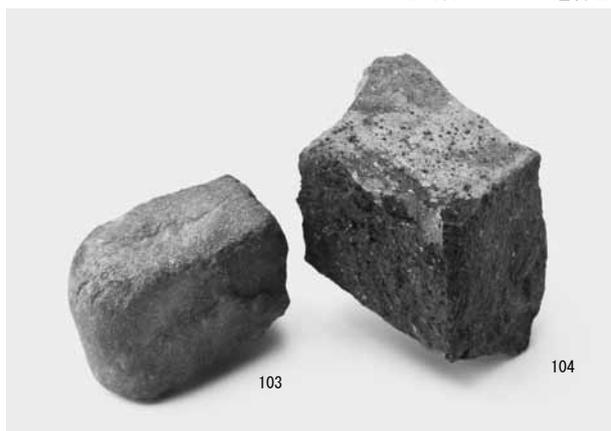
iv 西区、濠5001・井戸4019出土遺物



a. 井戸4019出土遺物 2



a. 井戸5005出土遺物 1



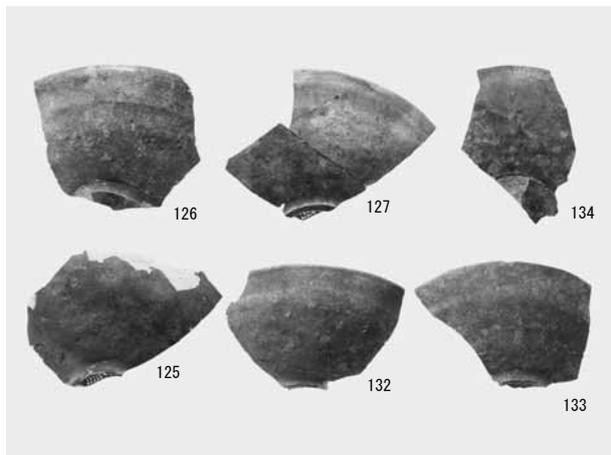
b. 井戸4019出土遺物 3



b. 井戸5005出土遺物 2

i 西区、井戸4019出土遺物

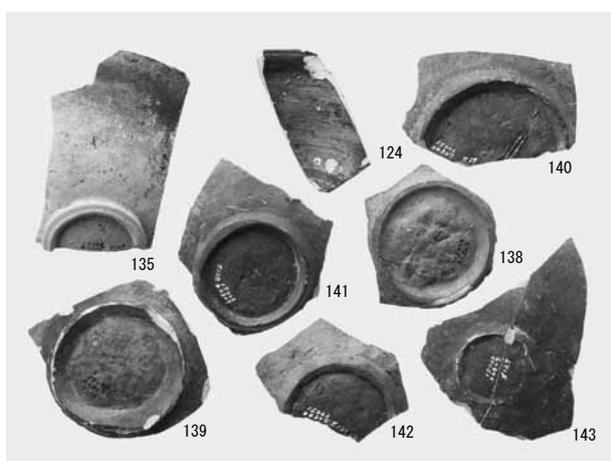
ii 西区、井戸5005出土遺物 (1)



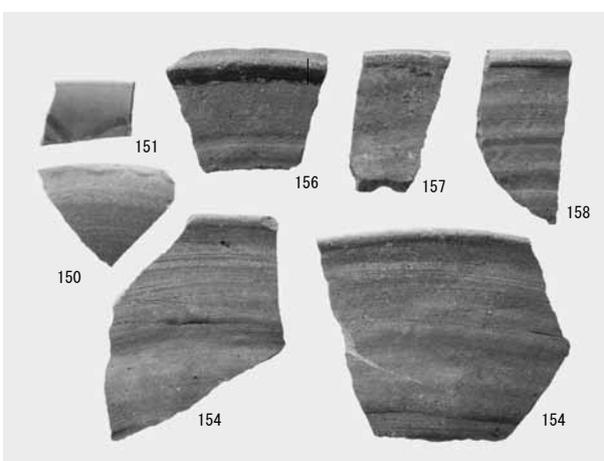
a. 井戸5005出土遺物 3



a. 井戸5005出土遺物 5



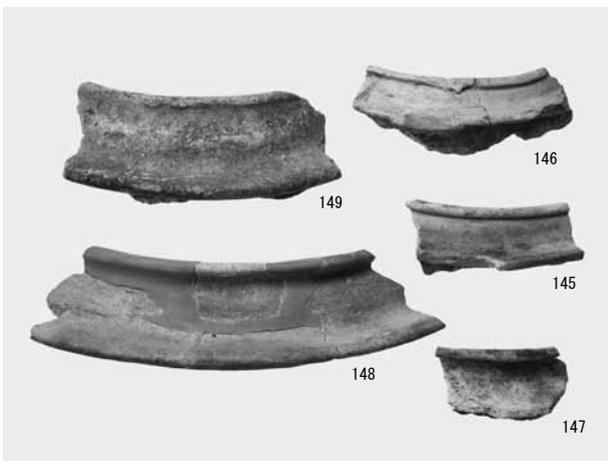
b. 井戸5005出土遺物 4



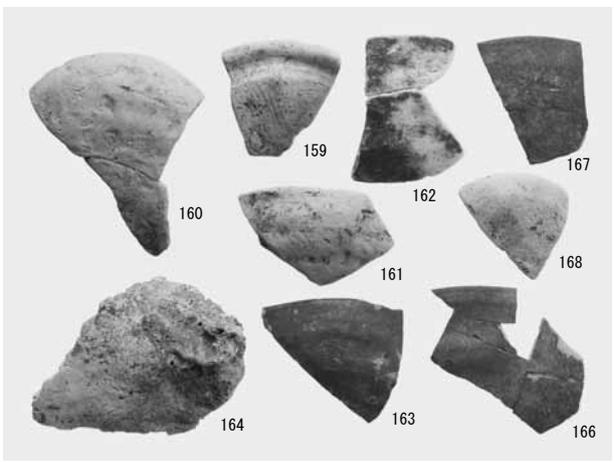
b. 井戸5005出土遺物 6

iii 西区、井戸5005出土遺物 (2)

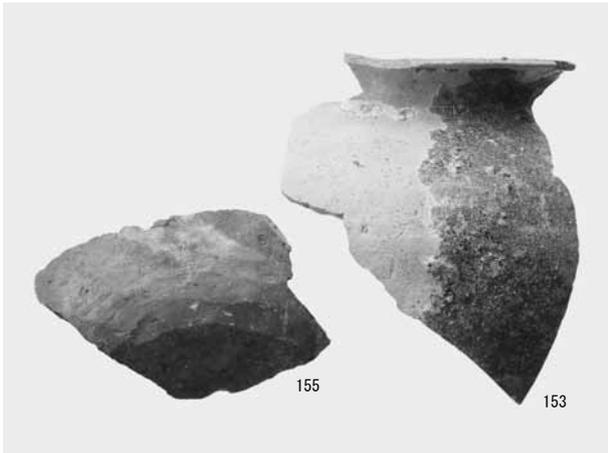
iv 西区、井戸5005出土遺物 (3)



a. 井戸5005出土遺物 7



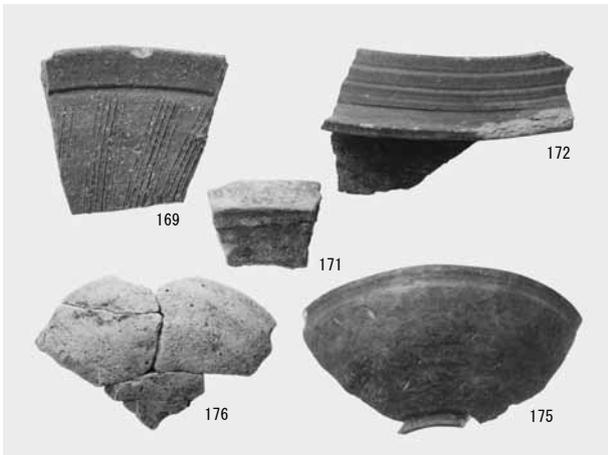
a. 井戸6052、掘立柱建物7・8出土遺物



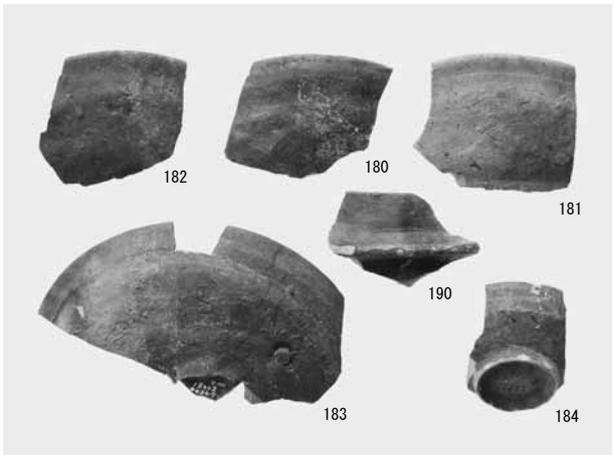
b. 井戸5005出土遺物 8
i 西区、井戸5005出土遺物(4)



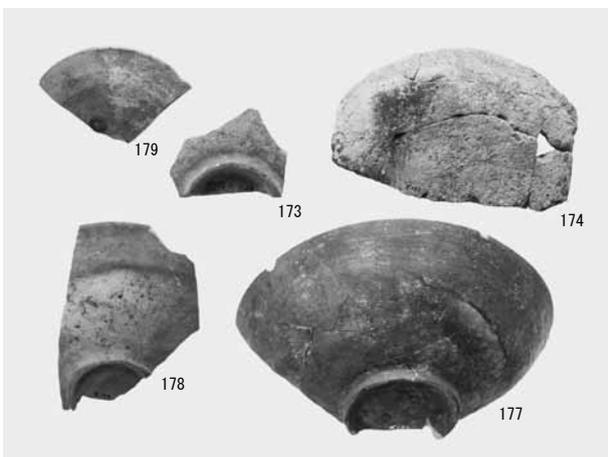
b. 掘立柱建物7、その他遺構出土遺物
ii 西区、井戸・掘立柱建物他出土遺物



a. 各種遺構出土遺物 1



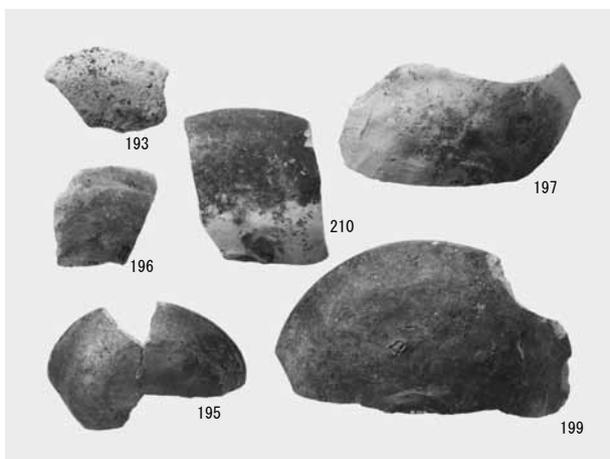
a. E-F区整地土出土遺物 1



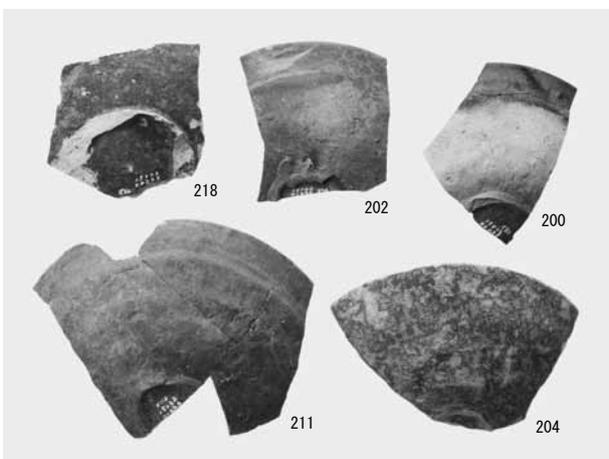
b. 各種遺構出土遺物 2
iii 西区、各種遺構出土遺物



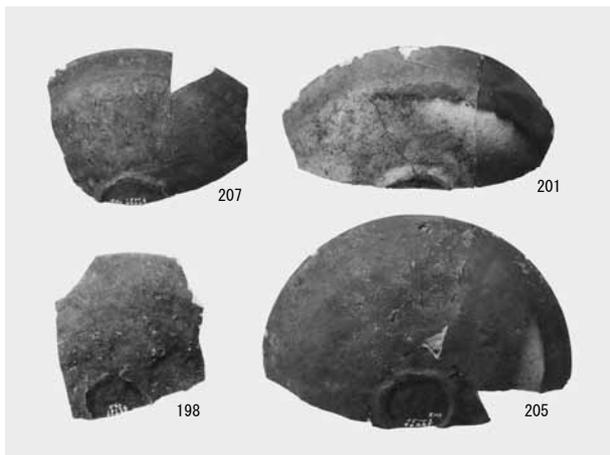
b. E-F区整地土出土遺物 2
iv E-F区整地土出土遺物



a. F区整地土出土遺物 1



a. F区整地土出土遺物 3



b. F区整地土出土遺物 2

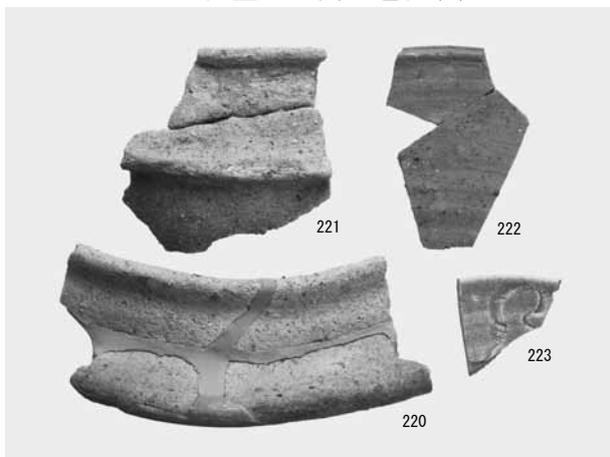
i F区整地土出土遺物(1)



219

b. F区整地土出土遺物 4

ii F区整地土出土遺物(2)

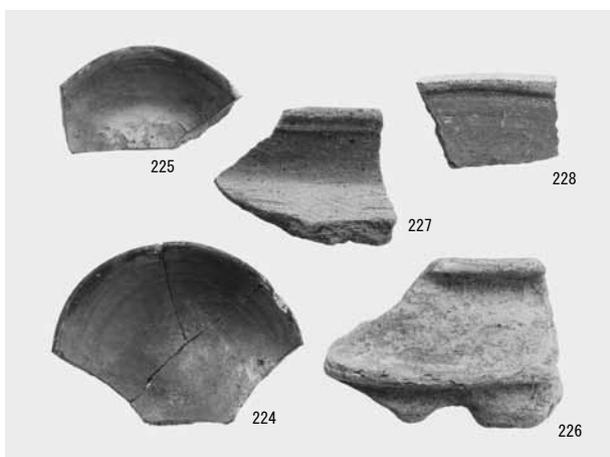


a. F区整地土出土遺物 5



230

229



b. F区整地土下部出土遺物

iii F区整地土出土遺物(3)



231



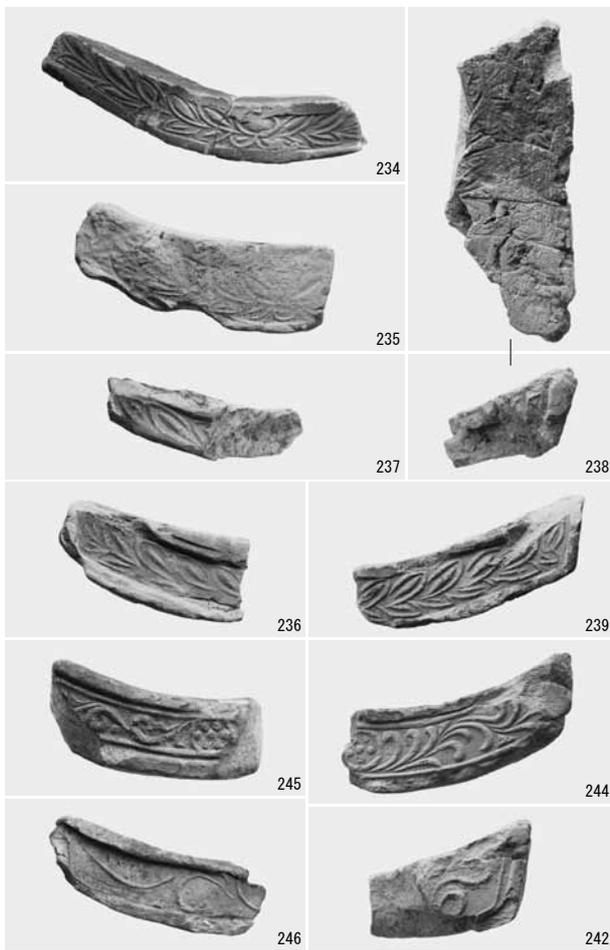
232



233

F区整地土出土遺物(瓦) 1

iv F区整地土出土遺物(4)



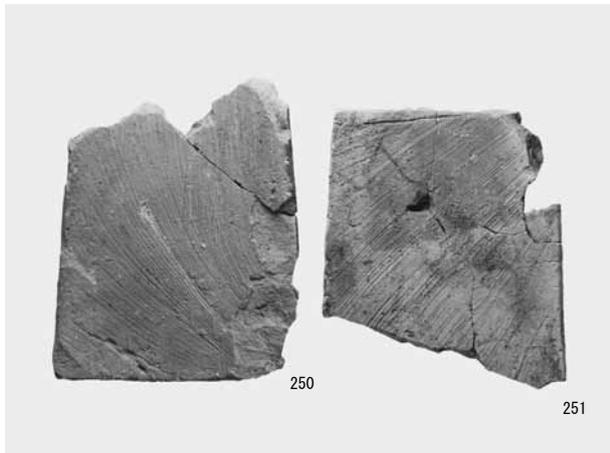
F区整地土出土遺物(瓦) 2
i F区整地土出土遺物(5)



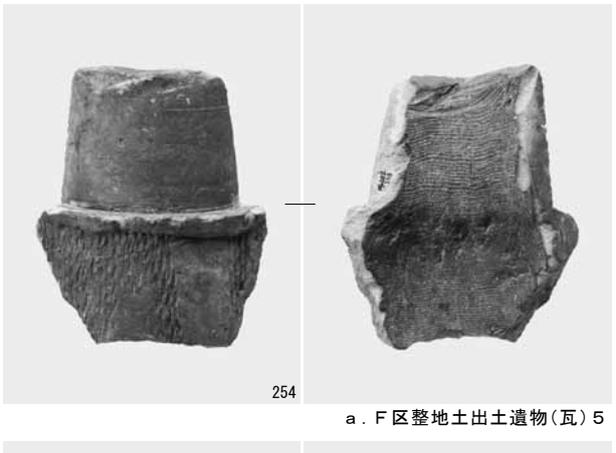
a. F区整地土出土遺物(瓦) 3



b. F区整地土出土遺物(磚)



a. F区整地土出土遺物(瓦) 4

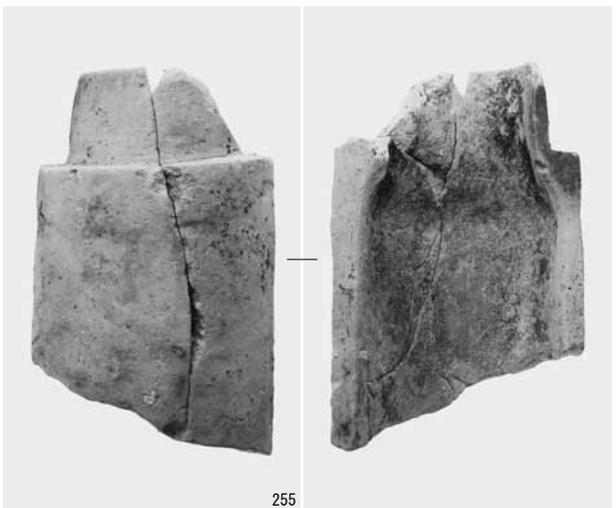


a. F区整地土出土遺物(瓦) 5



b. 同上(凸面)

iii F区整地土出土遺物(7)



b. F区整地土出土遺物(瓦) 6

iv F区整地土出土遺物(8)